

338-440



1200501395754

338

440



始






19

Shunju library



P 267

186



庫文秋春

17

阿片溺愛者の告白

著イシンエク・デ
譯 潤 辻



338-440

新版の序

辻 潤

言ひたいことはいくらでもあるのですが——新版に對して、卷末の「蛇足」を訂正しろと云ふ本屋さんの御注文ですが、私はやはりその時の心持をそのままにして置くことが好きですからそれはやめました。

日本の讀書階級が、このやうな本を一般に愛讀するやうにならなければ駄目です。かくの如き書物は時代となんの交渉もないと云つていい位、いつでも讀めば讀む程、その中から新らしい味が出てくるものなのです。

佐藤春夫が未だ自分の藝術に對して彷徨してゐる或る日のこと……もうなにを讀んでもつまらないと云ふやうな氣持の或る日の散歩の途上……それはたしか本郷の一高前あたりを歩いてゐた時だと記憶します。

春秋文庫は類書中のダイヤモンドだ。
眞に生きた思想と藝術の精髓を、これだけ輕便な、至廉な、而かも堅牢な形に凝縮させて、エネルギー節約とスピードを生命とする現代大衆の手に分つ、これが春秋文庫の使命であり、同時に理想でも、モットーでもある。
先づ試みに一冊を取つて讀んで見給へ。吾等の言葉は諸君を欺かぬことがわかるであらうから。

彼は僕がそんな本を譯したと云ふことさへ知らなかつたとその後話したのですが。

『指紋』と云ふ小説を諸君は御讀みになりましたか？ 彼のその傑作はこの本を讀了して興奮した結果……イヤ興奮と云ふ言葉は妥當ではありませんが……生れた作品なのです。

すぐれた靈魂は唯だすぐれた靈魂によつて發見せられるばかりです。

終りに篤學篤敏なる青年長谷川修二君が——彼はこの書の“Horrible-Lover”です。——私の爲めに誤譯を三ヶ所發見してくれました。私は彼に従つてこんどの新版に於てそれを訂正いたしました。

彼はこの原書の異つた數種を蒐集して喜んでゐます。

わが國にびびりをふわいるのあまりにも少ないのは嘆かばしい次第です。

一九二九年七月

譯者

序

この本は、極めて順當にゆくと、一昨年の暮あたりに出る筈であつた。——おそくとも去年の四月頃には出なければならなかつたのである。しかし、ノンキなことには、三年や五年、イヤ、十年、二十年、遅からうが、早からうが、かくの如き書物の場合、そんなことには一向無頓着である。第一今日の日本の文壇なぞとは差し詰め没交渉である。しかし、時代と没交渉であると云ふことは書物の存在理由とは別段關係がないことである。そんな心配は御無用だが、これで一個の商品になると、事苟しくも本屋さんとふところに関係があるので、僕と雖もボカンとしてすましてもゐられないのである。そこで、

おゝ、文學の御好きな江湖の青年淑女諸君よ！ 少しはかう云ふ本も買つて讀んで置き給へ。なる程、當節、流行の堂々たる人道主義、民衆主義、はた又傳統主義の諸文學、——いづれも結構なものに相違あるまい。大にそれ等の文學も味はれて、「人生の根柢？」とか「民族の精神？」とかに觸れ給へ。しかし、あまり眞面目になつて日々夜々人類や民族の爲めに心血を注いでも、御身體に障るといけないから、偶にはかう云ふ文學も讀んで、肩の張るのを癒し給へ。わるいことは云はないつもりだ。

さて、この本や著者のことに就ては卷末の「蛇足」(それは一昨年の暮に書いたままにして置いた)中に

すべて譲ることにした。この國では覺束ないが、西洋では、この種の書物で、恐らく、この位ポピュラな本は澤山あるまい。だから、大抵の叢書にこの本が這入つてゐる。また、實際、それ程、クラシックになつてゐると同時に、有名なるものである。この一事を見ても、西洋人と僕等の一般の讀書の程度が知れると云ふものだ。——讀書で思ひ出すが、近頃では、まあ追々そんなことは少なくなつてきたやうだが、日本で本が好きだと云ふと、大抵片輪者か戀人扱ひにされる。電車で偶々横文字の本なんかを開けて見てゐると、「彼奴はキザな奴だ。」とおいでになる。尤も中には御タブンに洩れない連中もないではないが、それだとして、指輪や腕時計の類々ミエにするよりは遙かにましかも知れない。しかし、横文字の讀めると云ふことなどは、今ではもうミエにならなくなつて來た。横文字でなくつても、少なくとも、僕のこの譯本などを、學校の往復に電車の中で、開く位にならなくつては駄目だよ。

僕のやうな（少々ケンソンして云へば）低脳兒が、そも／＼文學の何物たるかを、多少でも理解出来るやうになつたのはまつたく「英文學」の御蔭である。ところが、その方は一寸覗いた丈けて、いい加減に切りあげ、おあとは例の「大陸物」の亂讀に走つてしまつたのである。そして、今では、英文學と云ふと殆んど振り向いても見ないと云ふ有様だ。偶々この書を譯す機會を興へられたことは、僕の「英文學」を紀念とするに足るべきものである、今後、恐らく自ら進んで「英文學」を紹介するやうなことはあるまいと思はれる。

翻譯と云ふことは、或意味で精讀だ。少なくとも、僕自身にとつてはさうだ。僕が生きてゐる限り、まだこれから、いくつかの譯本を出すであらう。今の僕にはとても翻譯を輕蔑するだけの資格はない。

（一九二九、六）

内 容

一、序……………一
一、阿片溺愛者の告白……………一
一、後の阿片溺愛者の手記より……………一七
一、著者の小傳……………一六七
一、註……………一七三
一、蛇 足……………一八九

阿片溺愛者の告白

第一編

讀者に

感歎な讀者よ、私は今あなたに自分の生涯に於ける著しい時代の物語を献じます。自分がそれに對する要求から云へば、單に興味ある記録であるばかりでなく、非常に有益であり、また教訓的であることを希望もし、信じたくもあるのです。私がこれを書いたと云ふのも、つまりその希望からなので、それがまた大抵の場合に自分等の過失や、弱點を公衆の面前に曝すと云ふことをさせないあのデリケートな尊い償ましさを私が破つたと云ふ辯解にもならなければ困るのです。實際、公衆環視の中で、自分の道德的腫物や傷口を無遠慮に見せびらかし、よし人間の弱點を赦罪する時がそれ等を蓋ひ包むかも知れないにしても、「高雅な帷帳」を引き裂くと云ふこと以上に英國風の感情に對して叛逆的なものはないかと思はれます。ですから、我々の告白の大部分は（つまり自然で法外な告白です）曖昧な女やヤマ師や、詐偽師から多く出るものです。そして、禮義正しく自重ある階級の人々に同情を持つてゐると思はれてゐる人々から、このやうな理由もない自

己抑損の行爲を期待しようとするれば、是非佛蘭西文學へ行くか、少なくとも佛蘭西の不純な缺點ある感情に染められてゐる獨逸文學に求めるかしなければならぬのです。自分はこの傾向の非難に對してかなり強く感じもし、神經過敏にもなつてゐるので、私の生前に（無論自分の死後には多くの理由で全體が發表されるでせう）この物語の幾分でも公衆の目前に示すと云ふことはどんなものであらうかと數ヶ月の間、躊躇したのです。そして自分がとうとうその決心をきめるまでにはさまざまの理由を氣づかひながら、この態度を檢閲したり、駁したり、辯解したりしないではゐられなかつたのです。

罪惡と貧困とは、自然の本能に依て公衆の注目から萎縮するものです。其等は秘密と孤獨とを求めます。そして墓地を撰む場合でさへ、ごたくした一般の共同墓地を嫌つて何處か人に知れない處に隠れたがるのです。恰度、大きな人間の家族との懇親を放擲して、（ウワースワース氏の情の籠つた言葉を拜借して云へば）

“——humbly to express

A penitential loneliness.”

（卑下して悔ひ改めの寂しさを表さうと）願ふかの様にです。

先づ大體から見て、我々全體の爲めから云つてもさうあるべきが至當なのでせう。又私としても、何も好んでこのやうな鄭重な感情を無視しようなどとも思つてはゐませんし、また言行の上で少しでもそれ等を薄

弱にしようなどとも更に思つてはゐませんが、一方から見ますと、私のこの自己責罪は罪の懺悔と云ふ程まで、物にはなつてゐないので。よし又さうだとしたにしろ、此やうに高價で償はれた經驗の記録が他の人々に及ぼす効驗は、いくら晶負目に見ないにしても、私が今、擧げた感情に對する亂暴を裕につぐなふ事も出来れば、一般の規則違反をも立派に辯明して餘りがあると信じます。病氣と落魂とは必ずしも罪惡を含みはしません。それは唯だ犯罪人の様々な動機や豫望や、犯罪に對する公然の若しくは秘密の辯解や、その誘惑が果して初めから強く、それに對する抵抗が、その努力に於て最後まで眞摯なものであつたかと云ふやうなさまざまのことで、その暗い聯合の蔭に近づきもすれば、離れもするのです。兎に角、私のこれまでの生活は、うそ偽りのない處、大體に於て哲學者の生活であつたと云ふことは私の斷言して憚らないところでは。私は生れながら理智的な人間だつたのです。そして私の快樂と追求とは小學時代から、最高の意味で理智的だつたのです。若し阿片を嗜むと云ふ事が、肉慾的快樂であり、そして私が、今迄の人の記録を極端に破つた程、それに耽溺したと云ふことを告白しなければならぬとしても、少なくとも、私が宗教的熱誠を以つて、この魅力ある束縛と争ひ、遂に、これ迄、何人にも歸せられたと云ふことを聞いたことがないまでに、私を束縛した呪ふべき鎖を、殆んどその最後の環にまで、ほごしたと云ふことは事實です。このやうな自己克服は放縱の如何なる種類程度に對しても、充分稱賛せらるべき理由があると思はれます。私

の場合にしても、その自己克服が明らかであつたと云ふことを主張しないまでも、放縱と云ふ言葉が廣義に用ゐられて、單に苦痛を免かれようとする行爲を指す場合と、積極的快樂の昂奮を目的とするものにのみ、限られるかどうかといふ事によつて、先づ良心學の疑念を免かれることは出来ないでせう。

だから、私は罪惡だとは認めないのです。そして、よし認めたとにしても、私がそれによつて阿片愛用者の全階級に及す効果を考へて見れば、進んで現在のやうな告白の行爲に出る決心は充分つく筈です。ですが、全體、阿片愛用者の連中と云ふのは、どう云ふ人達なのでせう？ 讀者よ、實際、其中には随分澤山な連中があるのだと云はずにはゐられないのです。と云ふのは數年前、私はその當時、英國社會に於ける一部少數の人々を數へて見たことがあるのです。(其階級は重に技倆と、立派な地位とで卓越してゐた人々のそれでした)。そしてそれ等の人々は直接間接にオピウム・イーターとして、私に知られてゐたのです。たとへば雄辯家で慈悲深いキルパーフォース、カアライルの故の校長アイザック・マイルナ博士、アースキン侯、哲學者の某氏、故内務二等書記官(その人は一番初めに彼をして阿片を用ゐるやうにさせた感覺をカアライルの校長とそつくり、そのままの言葉で私に説明しました。それは「まるで鼠が彼の胃の膈の上衣を噛み破つてゐるかの如く感じた」と云ふのです)、サミュエル・テイラー・コルリッチ、その他右の人々に劣らない知名人々。さて、比較的制限されてゐる或階級がその様に澤山の人數を出してゐるとする(そしてそれはたつ

た一人の穿鑿者の智識の範圍に過ぎないとしたら)、英國全體の人口がそれに比例した數を供給するだらうと云ふことは自然推察することが出來ます。然し私はこの推論の確實なことを、或事實が明らかになつて、それが間違ひでないと云ふことが、私を満足させた迄は疑つてゐたのです。私は二つの場合を擧げて見ませう。第一の場合と云ふのは、私が倫敦のかなり飛び離れてゐる三人の尊敬すべき藥種屋から、偶々小量の阿片を買つてゐたことがありました。その當時の經驗が、初心のア片愛用者(と私はその人達を呼んでゐますが)の數が夥しいものだと思ふこと、そして永年の習慣で阿片がなくなつてはゐられないと思ふ人と、自殺の目的で阿片を買ふ人とを區別する事がむづかしいところから、藥屋が毎日のやうに、色々なゴタ／＼やら厄介やらで苦しめられたと思ふことを私に確めてくれました。これは倫敦ばかりに就ての事柄です。ですが、第二のは(それは確かにもつと讀者を驚かすでせう)數年前マンチェスタアを通つてゐる時に、數人の綿製造業者から聞いた話ですが、その人達の使つてゐる職工が恐しい勢で阿片を愛用し始めたので、土曜日の午後などには藥種屋の帳場には晩方の需用の準備をするので、阿片が幾粒もこぼれてゐることなどは決して珍らしくないことだつたさうです。この實行の直接原因は貨銀の低廉だつたことで、その當時、職工連はビールや酒に耽ることは出来なかつたらしいのです。そして貨銀が上ると、この實行が止むだらうと考へられてゐたかも知れません。しかし、私は一度、阿片の神聖な愉樂を味つた人間が、その後で下品な人間臭ひ、ア

ルコホルの悦樂に墮落するやうなことを容易に信じませんから、私は

※That those eat now, who never ate before:

And those who ate, now eat the more."

前に決して喰べなかつた人達が今喰べ、

そして何時でも喰べてゐた人達は今ではもつと喰べる。

と云ふことを先刻承認してゐたのです。

實際、阿片の魅力はその一番大きな敵である醫學上の記者達によつてさへ許されてゐます。ですから、たとへば、グリーンキチ病院の調劑師オウシタアは一七六三年に出版した「阿片效果論」中に、何故、ミードがこの薬種のさまざまの性質や、反応性を充分明らかにしなかつたかを説明しようと企てて、自から次ぎの不可思議な言葉で云ひ表はしてゐます。Dawson Sweney (智者には一言でわかる)——「恐らく彼はあまりに微妙な性質の問題を平凡にしようと考えた。そして當時多くの人々が無差別にそれを用ゐたかも知れないから、人々がこの薬劑の擴つて行く力を經驗することを防ぐ爲めに必然の恐怖と注意とが要る。何故なら阿片には若し、一般に知られてゐるとすれば、その使用を習慣にしたトルコ人、かれ等自身より一層我々の要求を促す澤山の性質があるからである。その智識の結果は」彼は附け加へてゐます「一般の不幸に終らな

ければならない。私はこの結論の必要なことを少しも信じはしませんが、その點に就いて私は告白の終りに於いて、話すべき機會を持つてあります。其處で私は私の物語のモラルを讀者に提供したいと思ひます。

序の告白

著者が後年に於ける阿片愛用の習慣に根柢を置いた青年時代のさまざまな冒險に關するこれ等の最初の告白、乃ち序言的物語は三つの色々な理由を前提とすることを以て適當と判じられた。

1. 「どうして理性のある人間がこのやうに悲惨な軌の下に彼自身を置くやうになり、進んでそのやうな卑劣な俘囚となり、知りながらも、このやうに七巻きもある鎖で、彼自身を縛すやうになつたか？」と云ふ其疑問を豫防し、それに對して充分な答を與へる爲である。若しそれが何處かで解決されないとすると、放縱な愚行などに對して得て擧げられ易い義憤に依て、どんな場合にも著者の目的に必要な同情の其程度と砥觸する事を誤らないから。そして其疑問が、阿片告白の道程にそれ自身關入して來ると云ふ苦痛があるから。
2. 後に至つて阿片愛用者の様々の夢を充した凄まじい光景の或部分を開く鍵を供給するものとして。
3. 告白の事柄から離れて、告白しつつある主人公の個人的人柄に對する或前提的な興味を創造するものとして。そしてそれは告白それ自身を愈々興味あるものとなすことを誤り得ない。若し「※牡牛に關して語

る。人間がオピウム・イーターになれば、恐らく彼は（若し彼が夢を見るべくあまりに遲鈍でないとすれば）——牛の夢を見るであらう。然るに當面の場合では、讀者はオピウム・イーターが自ら哲學者であることを、誇りとしてゐることを發見するであらう。そして、だから、彼の夢の幻影は（醒めてゐるようが、眠つてゐるようが、晝の夢だらうが、夜の夢だらうが）その人柄に於いて、

Humani nihil a se alienum putat.

彼は如何なる人事に關しても一切、無頓着であり得ない人にふさはしいものである。

哲學者と云ふ稱號に對する權利を維持するに缺くべからざるものと彼が考へてゐる事件のうちには、單にその分析的作用に於ける立派な智力の所有ばかりではなく、（その口實の方では、しかし、英國は數代の間、殆んど要求者がないと云つていい。少なくとも、彼は言葉を強めて鋭敏な思索家と云はれる程なこの名譽を荷ふやうな知名の候補者を氣づかないのである。しかし例外としてサミュエル・テイラー・コルリッヂ、と更に狭い思想の領域では、近頃で著名なデイギッド・リカードとがある）——尙又我々人間性のさまざまの神祕とギジョンに對する内觀と直覺力とを彼に與へるやうな道義的能力の組織がある。その能力の組織とは、要するに、（創世の初めから、この遊星上の人生に發展したあらゆる時代の人間の中で）我々の英國詩人等が、

最高の度で、——そしてスコットランドの教授等が最低の度で、所有したところのものである。

私は自分がどうして規則的なオピウム・イーターになり始めたかと云ふことを度々訊ねられた。そして私は、自分がこれから記録しなければならぬあらゆる苦痛を、單に愉快的藝術的昂奮状態を創造する爲めのみ、永い間、この習慣に耽つて、自分の身に招いだのだと云ふ、私の知人の説から出た極めて不正な評判から苦しめられた。だが、これは自分の場合では虚説である。如何にも自分は約十年間、阿片が自分に與へた微妙な愉快の爲めにのみ、折々それを取つたことがある。しかし自分がこの目的で阿片を飲んでゐた間、私は愉快的感覺を再新する爲めの種々な放縱な行爲の間に永い間隙を差し挿む必要によつてあらゆる身體の悪い結果から有功に保護された。自分が抑も阿片を日常食品の一種として用ゐる始めたのは非常に激しい苦痛を癒す爲めで、愉快を創造する目的からではなかつたのである。私が二十八歳の時、曾て十年ばかり前に初めて自分が経験した最も激しい苦痛が恐しい勢で、私を襲つた。この疾患は元來、私の少年時代に受けた極端な飢餓によつて引き起されたものであつた。それはその後、續いた希望とあり除る幸福の季節（即ち十八歳から二十四歳まで）の間、眠つてゐた。その後、三年間、それがまた時々再發した。そして、今では、思はずしくない境遇の下に、精神の阻喪から、それは阿片以外では、どうしても癒らない烈しさで、私を攻撃した。始めて、この胃の擾亂を生じた少年時代の苦しみが、それとしても、またそれに伴ふ境遇としても興味

があるので、自分は此處で簡単にそれを跡づけて見ることにした。

私の父は、自分が七歳の頃に死んだ。そして四人の後見人の手に私を残して行つた。自分は大小さまざまな學校にやられた。そして夙に私は古典に關する熟達、殊に希臘語の智識によつて拔群であつた。十三歳で自分は樂に希臘語を書いた。十五歳で、その國語に對する自分の驅使が非常に著しくなつて、自分は抒情的韻律で希臘詩を書いたばかりでなく、流暢に些の澁滯もなく希臘語を話すことが出來た。——かくの如き熟達はまだ曾つて自分の時代の如何なる學者にも見出されなかつたところのもので、自分の場合では、それは日々の新聞を即席に自分に浮んで來る最上の希臘語に讀み直す習慣に歸せらるべきものであつた。なぜなら、さまざまな近代的の思想や、影像や、物の關係に適當する色々こみ入つた發想のあらゆる種類と結合を求め、自分の記憶を限なく搜つたり、言葉を發明したりする必要が、道徳的論文等のだらけた翻譯などでは決して呼起されぬ言葉使ひの限界を私に與へてくれたからである。その子供は、と自分の教師の一人は、見知らぬ人の注意を私の方に向けながら云つた。その子供はあなたや私が英語でやるよりも以上に、雅典の民衆に演説することが出來ますよ。この贊辭を以つて私を遇して呉れた人は學者で、そして圓熟した立派な人物であつた。そして私のあらゆる先生の中で、自分が愛しもし、尊敬もした唯一の人であつた。自分は不幸にして（そしてこの尊敬すべき人が非常に憤つたと云ふことは、後に知つたが）手始めに、ある

愚物の手許に移された。其愚物は私が彼の無識を曝露しはしないかと云ふので、たえず恐慌を來たしてゐた。そして最後には昔し創立された或大きな學校長である尊敬すべき學者の下に移された。この人はオックسفオードのブレズノーズカレッジによつてその地位に任命されたのであつた。そして健全な、シツカリした學者であつた。けれど（私がその大學で知つた大抵の人々のやうに）粗野で、チヂムサク、そして武骨であつた。自分の好きな先生のイートン風の光彩に對して、その人は、はじめな對照を私の眼に呈した。そしてその上、彼は、私の不斷の注目から、彼の理解力の貧弱を隠しおほすことが出來なかつた。兎に角、少年が智識に於ても、自分の先生以上であり、そしてかれ等以上に彼自身を知つてゐると云ふことは、よくないことである。これが少なくとも智識に關して、單に私自身ばかりの場合ではなかつた。なぜなら自分と一緒に並んで第一列を造つてゐた二人の少年が、校長以上に立派な學者ではなかつたとしても、或は又女神グレイセスに犠牲を捧げる點で一層慣らされてゐなかつたとしても、校長より遙かにすぐれた希臘學者であつた。私が初めて入學した時、私は自分達がソフォクレースを讀んだと記憶してゐる。そして第一列の三人組の學者である我々にとつては、我々の *myself*、*myself*、*myself*（と彼は呼ばれる事を好んでゐたが）が我々の行く前に我の學課を調べたり、彼が合唱句中に發見した難解な點を（まるで）一氣に吹き飛ばすつもりかにかで、字引や文典を行列させてゐるのを見るのは、我々にとつて常に勝利の誇りを感じずる事柄であつた。しかし我々は

決して登校の瞬間迄、讓歩して本を開くやうな事はしなかつた。そしてたいてい校長の假髮に對する短歌詩や、その他の重要なことを書いて費した。私の二人の仲間は貧乏だつた。そしてかれ等は將來有望だと云ふ校長の推薦で大學に寄食してゐた。けれど自分は當時、僅かな相續財産を持つてゐた。その収入がカレッジに這入つても、自分を支へてくれるに充分だつたので、私は早速其處へやつてもらひたいものだと思つた。自分はその間に就て色々熱心な陳述を後見人等に對してしてみたが、悉く無駄であつた。比較的わけのわかつた、そしてあとの者より世の中の智識を持つてゐた一人は遠くに住んでゐた。他の三人の中の二人は彼等の權利を悉く第四の後見者の手に托してゐた。そして自分が相談しなければならなかつたこの四番目の人は、その人の行き方としては、價値のある人ではあつたが、傲慢で、頑固で彼の意志に反するものは何事によらず、我慢がならないと云ふ質の人であつた。幾度か手紙を書いたり、會見をしたりした結果、私は私の後見人からその事に關する妥協をさへ、到底、望み得ないことを發見した。彼の要求したのは、無條件の服従であつた。それで、自分は他の方法に對して、自分自身を準備することにした。夏が今や急ぎ足で近づいてゐた。そして私の十七歳の誕生日が迅速に近づきつつあつた。その日以後最早、自分はスクールボーイとは伍すまいと自分の衷に誓つた。なにしろ第一に要るのは金なので、私は或高貴な婦人に手紙を書いた。その人は年は若かつたが、少年のうちから私を知つてゐた。そして後にはたいへん特別に自分を待遇してくれ

た。私は彼女が自分に五ギニイを「貸す」ことを頼んだ。一週間餘りになつても、何の返事も來なかつた。そして、私はそろ／＼絶望し始めた時、とう／＼一人の下僕が「冠」の封印のしてある二重手紙を私に手渡しした。美しい筆者は海濱にゐた。それで返事が遅れたのであつた。彼女は私の請求した倍額を入れてくれた。そして親切にも、若し私が決して彼女に返さなくつても、それは絶対に彼女を傷けはしないだらうと云ふ注意までしてあつた。さて今、私は計畫に向つて準備した。自分の小遣から残して置いた二ギニイ許りに附け加へられた拾ギニイは、いつまでも充分なやうに自分には思はれた。そして其幸福な時代に、若し一定の境界が人間の力にあてがはれてないなら、希望の精神と快樂とは實際、それを無限にするものである。(我々が習慣的に永くし續けてきたことを止めると云ふ最後の場合には心の悲しみを覺えずに、意識しては到底何事もなし得るものではないと云つたドクター・ジョンソンの言葉は至當である。(そして屢々彼の言葉に就て云はれ得ないものは、極めて意識的なものである。) 私は自分の愛さなかつた、そして自分が幸福でなかつたマンチェスタアの地を去らうとした時にこの眞理を深く感じた。自分が永久にマンチェスタアを後にした前の晩の事あの古い宏大な教室で、私の耳に最後の響きを與へた勤行の夕の鐘が鳴り渡つた時、自分は泣いた。そして夜になつて名簿が呼び擧げられ、(いつものやうに)自分の名が最初に呼ばれた時、私は前に進み出て、傍に立つてゐた校長の前を通りながら、私は彼に叩頭をした。そして「校長は年をとつて弱くなつて

ある、自分はこの世では再び校長には近へないのだ」と自分だけで考へながら、熱心に彼の顔を見守つた。私の考へは當つてゐた。私は決して再び彼に近はなかつた。勿論これからも、近へないであらう。彼は慇懃に自分の方を見て、やさしく微笑し、私の挨拶（或は寧ろ、私の告別）に答へた。そして私達は（たとへばそれは知らなかつたとは云へ）永久に別れた。私は智力の上では彼を尊敬することは出来なかつた。しかし彼はいつも變らず自分に親切であつた。そして多くのわがまを私に宥してくれた。そして私は私が彼の上に蒙らす懊惱を考へて悲しんだ。

自分を世の中に船下するべき朝が來た。そして、それから以後に於ける私の全生涯が多くの重要な點で、其色彩を取つた。私は校長の家に寄つてゐた。そして、私の最初の入學當時から、自分の部屋を持つ自由を許されてゐた。私はそれを書齋兼寢室に當ててゐた。三時半に私は起きた。そして深い感動を以つて（學校附屬の教會）の古塔を眺めた。それは「一番早い光りに包まれて」、そして雲のない七月の朝の曙光で紅になり始めつつあつた。私は自分の目的で確く動かさずにゐた。しかもなほ不確かな危険や困難の豫感でドキドキしてゐた。そして若し自分があの颶風と、やがて、自分の上に落ちて來た苦惱の完全な颶風を先見することが出来たなら、私が激動したのも尤もなことであつた。この激動に對して、朝の深い平和がわざとらしい對照を呈した。そしてそれが幾分か藥になつた。靜寂が眞夜中のそれよりも更に深かつた。そして自分

は他のあらゆる靜寂よりも夏の朝の靜寂によつて心を動かされる。なぜなら光りが他の季節に於ける眞晝のそれの如く、ハッキリとして強く、人が未だ戸外に出てゐないせいにか、眞晝ともちがふやうに見える。かくして、自然及び神の罪なき被造物の平和は、人間と彼の性急な不安な精神がその神聖を妨げない間は深く安定してゐるやうに思はれる。私は衣物を着て、私の帽子と手袋をとつて、少しばかり部屋の中でグヅグヅしてゐた。一年半の間、この部屋は自分の「默想の城」であつた。此處で私は夜びて本を讀んだり勉強した。そして、この頃の終りに、愛とやさしい性情に向つて形造られた私が、後見人と眞赤になつて争つてゐるうちに、いつか自分の快活と幸福とを失つたことは事實であつたが、又一方では、熱烈に書物を愛好し、智的追求に捧げられた少年として、落膽の中にも、多くの幸福な時間を享樂することを誤らなかつた。私は私が椅子や、爐邊や、机や、その他の親しいものを眺めた時、自分がそれ等のものを見るのも最後だと云ふことを、あまり確かに知りぬいてゐたので泣いた。今、これを書きながら考へると、それは十八年も前のことではあるが、今でも、私には私が自分の訣別の癡視を注いだ物の姿や表情が恰も昨日のやうにハッキリと見える。それは爐棚の上に懸つてゐた可愛いXの肖像であつた。その眼と口はそんなにも美しかつた。そして全體の容貌は慈愛に輝いて、神聖な靜けさを湛へてゐた。私は信者が、その守護神に對するやうに、幾度となくそれから慰藉を得る爲めに、私のペンや書物を傍に置いた。私がそれを癡と眺めてゐる間に、マンチエ

スタアの時計の深い響きが六時を報じた。自分は晝の傍へ行つて、それを接吻した。そして靜かに歩き出して、永久に部屋を閉ぢた！

この世では笑と涙との錯綜する場合が、かなり澤山にあるものだ。自分はその時に起つた一つの出来事を思ひ起す度に微笑せずにはゐられない。そして、それは私の計畫をすぐに實行することを殆ど止めさせようとした。私は恐しく重い靴ブーツを持つてゐた。それには、私の衣物の他に、私のライブラリイが殆んどみんなはひつてゐた。厄介なのはこれを運送屋に渡すことであつた。自分の部屋はその家のかなり高い處にあつた。そして(更に悪いことには)建物のこの一角に通じてゐた階段は、校長の部屋の側にある廊下を通らないでは行かれなかつた。私はみんなの下僕から可愛がれてゐた。そして、誰でも私をかばつて、充分信頼することが出来るやうに振舞つてくれるだらうと云ふことを知つてゐたので、私は校長の馬丁に私の困惑をうち明けた。その馬丁は自分の要求を何んでもして呉れると誓つた。そして、その時が到來した時、靴を卸す爲めに階段を上つてきた。これはとても一人の力ではむづかしいと自分は氣づかつてゐた。しかし、その馬丁は

Of Atlantean shoulders fit to bear

The weight of mightiest monarchies:

アトラスの様な肩をして、よく

廣大な王國の重さにも耐へる

男であつた。そしてソールズベリイ平原のやうに廣い背中を持つてゐた。だから、彼はそのトランクをひとりて卸すと主張した。その間私は何か起りはしまいかと心配しながら、最後の逃げ足で立つて待つてゐた。しばらくの間、私は彼が靜かなシツカリとした足どりて下りて来るのを聴いた。しかし、不幸にして、彼が震へたので、危険な處へ近づいた時に、廊下から今、數歩と云ふ處で、彼の足が辻つた。そして彼の肩からころがり落ちた大きな荷物は落ち行くに隨つて勢を増した。そして床に達する頃には、グル／＼廻つて、否寧ろ飛び上りざま、悪魔が二十もゐるやうな音を立てて、校長の寢室の戸をめがけてぶつかつた。自分はその時萬事が失はれたと一番に考へた。そして逃走を實行する自分の唯一の機會は私の荷物を犠牲にすることであつた。けれど、思ひ直して、自分はその結果を忍ぼうと決心した。馬丁は彼自身の爲と私のことと兩方で、極端に憚おそいた。しかし、これにも拘らず、この不幸な *Crucifixions* (不慮の災難) の最中に、可笑味の感おかしさが必然に彼の想像を捉へた。そして彼は七人の睡眠者の眼をも醒しかねない長い、高い、調子のいい咲笑わらを歌ひ出した。侮辱されたオーソリテイの耳元に鳴り渡るこの愉快な音響に自分も一緒になつて結び付くことを我慢にも辛棒することが出来なかつた。自分はトランクの不幸な *etourderie* (バカ氣た過失) によつてよ

りも寧ろ、それが馬丁に與へた效果に負されたのであつた。自分達二人は、無論、ロートン博士が彼の室から出だして来るだらうと豫期してゐた。なぜと云ふと、いつでも、彼は、鼠が一匹ガタついて、猛犬のやうに彼の寢床から飛び起きたから。だがこの時は不思議に、哄笑の響きがやんでも、寢室の中で何等の物音も、衣摺の音さへきこえなかつた。ロートン博士には、時々寢つかれないやうな、苦しい病氣があつた。だから、多分寢ついた時には、その眠りが一層深いものであつたのであらう。シンとしてゐるのに勇氣づけられた馬丁は再び彼の重荷を差し上げて、こんどは無事に残りの降下をすませた。私はトランクが一輪手車の上に置かれ、運送屋に渡される迄待つて見てゐた。それから、^{アトランクス} 嚮望を自分の道案内として、私は歩き出した——私の腕の下には、衣物のコマ／＼した道具の入つた小包を抱へ、一方のポケットには愛讀してゐる英國の詩人を入れ、片ツポの方にはエウリビデースの戯曲が九つ許り納めてある小さいデュオデシモ形の冊子を入れてゐた。

私の最初の意向はウエストモアランドに出るつもりであつた。自分がその地方に對して抱いてゐた愛からと、他に一身上の理由からと兩方で。けれど、ある出来事が、私の漂泊に對して異つた方角を與へた。そして私はノース・ウエールズの方に自分の歩みを曲げた。暫時、デンビシヤア、メリオネットシヤア、カナダオンシヤアなどをさまよひ歩いた後で、私はバンゴアのある小さい瀟洒な家に宿をとつた。自分は

此處で數週間たいへん愉快に滞在することが出来たのかも知れなかつた。なぜならバンゴアでは、廣い農業地方の産物のありあまるにひきかへて、他に市場が少なかつたので、食糧品が安かつたから。しかし或事件——それには恐らく何等の悪意も含まれてはゐなかつたのであらう——が起つて、それが再び私を漂泊に驅つた。わが讀者が嘗て口にしたことがあるかどうかは知らないが、自分は屢々英國の人民中で一番傲慢な階級（少なくとも、その傲慢の一番目につきやすい階級）は監督僧正の家族共であると云つた。貴族とその子供等は、かれ等の稱號それ自身にかれ等の位の充分な告示を擧げてゐる。否、かれ等の名前そのもの（そしてこれはまた多くの無位無爵の家柄の子供等にもあてはまる）が屢々、英國人の耳に、高貴な家系や、血統の相應な説明者である。サックゼル、マナーズ、フイツロイ、ボウレット、カヴンデイシュ、その他の多くが、かれ等自身の物語を語つてゐる。だから、このやうな人達は至る處で、既に確立されてゐるかれ等の權利の適當な意義を發見する。但し自己の微賤なるが爲め世の中に付て無智である人々の間では例外である。*Not to know them, argues one's self unknown.* 貴族等の態度はかれ等にふさはしい一種の調子と色彩とを帯びてゐる。そして一度かれ等が他人の上に自己の尊大な觀念を印象せしめる必要を發見するに對して、かれ等は感奮な謙遜の行爲によつて、この觀念を和げる千の場合に遭遇する。しかし監督僧正の家族の場合では、まったく反對である。彼等にとつては自分等の看板を知らせるのは、悉く困難な仕事である。なぜなら

高貴な家柄から擇まれる僧正の椅子の割合は何時でもさう大きくはなかつた。そしてこれ等の顯職の在位期間は又極めて迅速で、かれ等が文學上の名聲とでも關聯してゐない限り、公衆の耳がかれ等と親しむ時は殆どないと云つてもいい位である。だから、僧正の子供等と云へば、いつでも、峻嚴な反抗的な容子をしてゐる。それは一種の *noli me tangere* (わしに觸るな) と云ふ態度で、あまり馴れ／＼しい接近を神經的に恐れ、痛風病者の敏感を以て、*omni populo* (平民)とのあらゆる接觸から、縮み上つてゐるのである。勿論、力強い理解や、異常に善良な性質はこのやうな弱點を免れさせもしよう。だが、一般には、私の陳述する事實が認められるであらう。誇りが、若しこのやうな家柄に深く根ざしてゐないとしても、少なくとも、かれ等の態度の表面に一層よく現はれてゐる。この種の態度の精神は自然彼等の奉公人や、其他の寄食者の上に、それ自らを傳達する。さて私の宿屋の主婦はベンゴアの僧正家で、ある貴婦人の召使だか乳母だかをしてゐたことがあつた。そしてつい近頃結婚して(或人の云ふやうに)身を「固めた」のであつた。ベンゴアのやうな小さい町では、單にビショップの家族と生活したと云ふ丈でも、豪儀なことに考へられてゐた。そして私の善良な主婦は私その方面で認めたよりも、寧ろよけいに彼女の誇りの分前を持つてゐた。「御前様」がどう云つたとか、「御上」がどうしたとか、彼が議會で如何に有用な人物だとか、オックスフォードではなくてはならない人だとか云ふやうなことが彼女の談話の日々の重荷になつてゐた。如何にも御尤もだと、自

分はこれ等のすべてを忍んだ。なぜなら、私は人の面前で嘔ふにはあまりおひとよしてあつた。そして自分は年よりのサーバントのオシャペリを充分に赦すことが出来た。しかし、必然に、私は彼女の眼に、僧正様のエラサをあまり感銘してゐなかつたやうに見えたにちがひない。そして、多分私の無頓着に對して私を罰するつもりだつたか、或は恐らく偶然に、彼女は或日、私に或話を繰り返してきかせた。自分も其中に間接の關係がある一人の當事者であつた。彼女が御機嫌伺ひに御屋敷へ行つたと云ふのだ。晚餐がすんだので、彼女は食堂に呼ばれた。彼女が家政の話をした折々に、彼女は偶々自分の家の部屋を貸してゐると云ふことを話した。そこで其善良な僧正さんは、恰度いい折だと考へたものか、寄宿人の撰擇を注意するやうにと彼女に告げた。「なぜと云ふと」彼は云つた。「ベテイヤ、おまへは此處がお膝元へ行く本街道だと云ふことを忘れてはならんよ。だから借金を背負つて英國へ逃げるアイルランドの驅兒が、又、借金でアイル、オプ、マシオンへ逃げる英國の驅兒が澤山、その途中でよく此處を通ると云ふことに氣を付けてゐなければいかんよ。この忠告には確かに根柢のある理由がなくはなかつた。しかし、これは特に私に報告すると云ふよりは寧ろベテイ夫人のひそかな冥想中に貯へらるべき性質のものであつた。しかし、その後はなほわづかつかつた——。」「お、且那樣」と私の主婦が答へた(その事柄に關する彼女自身の話しぶりによれば)、「私は實際この若紳士が驅兒だなどとは思つてはゐません。なぜなら——。」「あなたは僕を驅兒と思つてゐやあしなないんですか？」

と私は、彼女をさへぎりながら、ムジャクシャ腹で云つた。「これから僕はあなたがこんな風に考へるその心配を除いてあげませう。」そしてグヅ／＼せず、私は自分の出發の準備をした。その善良な女は若干の讓歩をするやうに傾いて見えた。しかし私がかの學識ある高官彼自身に對してすら恐らくあてつけ、たらしい激しい侮蔑的な言葉使ひが、こんどは彼女の憤りを發せしめた。それで和解が不可能になつた。自分は、實際、如何に遠廻しとは云へ、自分の一度も見たこともない人間に對して、疑惑の根據になるやうな暗示を與へた監督に對して非常に腹を立てた。そして私は自分の心持を希臘語で彼に知らせてやらう、さうすれば、自分の騙見でないといふ察しを與へると同時に、また（自分は希望した）監督をして同じ言葉で答へさせることになるだらう。その場合、自分は閣下のやうな金持ではないが、ズット立派な希臘學者だぞと云ふことを見せつけてやるのが勿論、出來ると考へた。しかし、一層平靜な考へが、この子供らしい企てを私の心から逐ひ出してしまつた。なぜなら私はその監督が年よりのサブバンドに忠告するのは尤なこととてまたと彼がその忠告を私に繰り返されるやうにたくらんだとは如何になんでも考へられはしなかつた。それにベデイ夫人をして少なくともその忠告を繰り返させたその蕪雜な心なら、尊敬すべき監督の實際の發想よりも、寧ろ彼女一流の考へ方にふさはしい仕方、それに色をつけかねばしないと考へたからである。

自分はスグその場でその宿を出た。そしてこれが、自分にとつて非常に不幸な出來事に變つた。と云ふの

は、それから以後、色々な宿屋で生活したので、私は忽ちの間に自分の金を費ひ果してしまつた。二週間許りのうちに自分は残り少なにされてしまつた。即ち私は一日に唯だ一食しか取ることが出來ないやうになつてしまつた。不斷の運動と山の空氣によつて生ぜられた食欲が、青年の胃に鋭く働くので、私はやがてこの貧弱な養生からひどく惱まされ始めた。なぜなら、私が敢て命ずることの出來た唯一の食物は珈琲か茶であつた。しかし、これすら終に讓歩しなければならなかつた、そして後には、ウエールズに滞在中、私はキイチゴやサンザシの實や、イバラの實などを喰べて、辛うじて生活した。或は機會のある度に自分がやつてやつた僅かな仕事の御禮として偶然の厚遇を受けることなどもあつた。時に私は、リヴァプールや、倫敦に親類のある小作人等に用事の手紙を書いてやつた。それよりも度々、私はシュレウスベリイや、英國の國境邊にある小都會に下女奉公をしてゐる若い女達の爲めに、彼等の愛人に遺るラヴレターを書いてやつた。すべてこのやうな場合に、私は私のハンプルな友達に非常な満足と與へてやつた。そしてたいい厚くもてなされた。或時などは、特にメリオネットシヤアの邊鄙な部分にあるランイステンヅウと云ふやうな名前の村で、私は若い人達の家庭で三日以上も情け深い兄弟のやうな親切をもつて待遇された、其時の印象は今もなほ依然として、私の心に殘されてゐる。其家族は、當時四人の姉妹と三人の兄弟から成り立つてゐた。彼等は悉く一人前になつてゐて、いづれも優雅で、デリケートな態度が際立つて眼についた。このやうな美し

さと、性來の立派な育ちと垢ぬけのした容子とは、ウエストモアランドやドヴオンシイアで、一二度見た以外には、未だ嘗て田舎の小屋で見たことはなかつた。彼等は英語を話した。このことは一ツの立派な嗜みであつて、特に本街道から遠く離れた村落にあつて、一族中の數人が悉くそれを有してゐることなどはメツタにないことである。此處で私は手初めに、ある英國の軍艦に乗り組んでゐる兄弟の一人に宛てた賞與金に關する手紙を書いた。そして更に、密かに、二人の姉妹の爲めにラヴレタアを二通書いた。彼等は二人ともインテレスティングな相付をした娘達であつた。そして一人はすぐれて愛らしかつた。彼等が口授してゐる間或は寧ろ私に一般的な指圖を與へてゐるかかれ等の困惑と羞恥の最中に、かれ等の願ふ處は、その手紙が相當な處女の誇りを傷けない限り、出来る丈親切なものであつて欲しいと云ふことを見破るには別段の洞察力を要しなかつた。私は二人の感情の満足を計る爲め、私の發想を加減することに努めた。そしてかれ等は私がこれ等の思想を現はした仕方を非常に喜んで（かれ等の單純な心で）私が容易にかれ等のおもむくを發見したことを驚いた。人がある家族の女達から受けス待遇は、一般にその人が受ける禮應全體の主調を定める。この場合、私の秘書官として自分の信頼された義務を果すと共に、恐らく又私の會話で彼等を樂ませて一般に充分の満足を與へた。私は別段拒む氣もなかつたので、その惡な待遇にひきとめられて滞在した。私は若い女達の部屋にあるたつた一つあいてゐる寢床で、兄弟達と一緒に寢た。しかしすべて他の點で、かれ

等は、私のやうな軽い財布の所有者に對して拂はれるにしては、かなり過分な尊敬を以つて私を遇してくれた。恰かも私の學識が私の「上品な生れ」を充分證明してゐるとも云ふやうに。かうして、私は三日と四日目の大部分をかれ等と一緒に暮した。そして、かれ等が私に續けて現はした變らない親切から、私は、若しかれ等の力がかれ等の意志と合致さへしたなら、今頃迄も一緒にゐることが出来たかも知れないと、私は信じてゐる。しかし、最後の朝になつて、私はかれ等が朝飯に坐つた時、かれ等の顔に或不快な消息の近づいた表情を認めた。そしてやがて兄弟の一人はかれ等の兩親が、私の着いた前日、カアナアヴオンで開かれメソヂスト信者の年會に出かけて、今日歸る筈であると説明した。そして、たとへ兩親が當然の禮義を心得てゐないとしても、若い人達の顔に免じて、私がそれを悪く取らないやうにと、彼は乞うた。兩親は粗野な顔をして私の挨拶に：“Dym the good.”（英語でなく）で答へた。どんな風な場合になつたかと云ふことが私には解つた。そして私の親切な面白い若い主人等に戀な別れを告げて、私は自分の行くべき方に出かけた。たとへかれ等が兩親に向つて、私の辯護を親切にもしてくれ、そして度々、それは「ただあの人達の風」なのだからと云つて、老人等の態度を自分に謝したにしても、私が戀文の名人だといふことが私がサブフォ風やアルカイオス風の希臘詩を作ると云ふことと同様二人の生眞面目な六十代のウエルシュメソヂストに私を推薦する理由にはならないと云ふことは、自分も容易に理解してゐた。私の若い友達の優美な禮義を以て

自分に向けられた時、優遇であつたものが、この老人達の殿しい態度と結び付くが最期、慈善に變つてしまふだらう。たしかにシェレイ氏は老年に對する彼の考へに於て正しい。反對ならゆる種類の力によつて強く反抗されなければ、それは、人間性の惡な慈愛に對するみじめな腐敗者である、残害者である。

この後間もなく、私は或方法で、倫敦へ私自身を搬ぶ計畫をした。私は餘地がないので、それを略さなければならぬ。そして今私の永い苦痛の後半の更に激烈な舞臺が展開された。私はそれを自分の苦悶と呼んでも不適當な發想ではない。なぜなら私は今や、十六週間以上も、緊張の種々な程度で、飢餓の肉體的痛苦を味つた。だが、恐らく、今迄それを通して人間が苦んだよりも一層ひどかつたにちがひない。私は自分が耐へたあらゆる事柄を詳細に語つて、わが讀者の感情を徒らに苦しめようとは思はない。なぜなら、このやうな極端なことは、最も重い過失、或は罪惡のどんな事情の下にあつても、單に記述するさへ、人間自然の善性に對して痛ましく悲しい憐憫を伴はずしては考察することは出来ない。この場合では少なくとも、私の身體が全く缺乏しきつてゐると云ふことは知らないで、私を病氣だと想像してゐた)或個人の朝飯の食卓のパンの僅かな切々が、不定の間を置いて、私の全生活を成立させてゐたと云ふことを云ふだけで満足しよう。私の艱難の前半(即ち、ウエールスに於てたい、そして倫敦に於ける最初の二ヶ月間ズット)私は宿ナシだつた。そして屋根の下に寝たことさへメッタになかつた。このたえず外氣に曝されてゐたことは私

は主として、自分が苦痛の爲めマイツテしまはなかつた理由としてゐる。しかし、その後、寒い殘酷な天氣がやつて來た時に、私は更に憔悴した状態に沈み始めた。自分がその人の朝飯の食卓に接近することが出來たその同人が、彼の借りてゐた大きなガランとした家で眠ることを私に許して呉れたと云ふことは、自分にとつて、勿論、幸福なことであつた。私はそれをガランとした家と呼ぶ。なぜなら、その中には家族と云ふものもゐなければ、第一住居と云ふ體裁をなしてゐなかつた。實際、テーブルが一個に椅子が三ツ四ツあるきり、家具と云ふやうなものもなかつた。しかし私は、私の新しい宿所に引き移つたとき、その家には既にタツタ一人の寄寓者のあることを發見した。それは見たところ十歳許りな、哀れな友達のない子供であつた。彼女は飢餓でやつれて見えた。そして、その種の苦しみは屢々子供を年よりも老けて見えさせる。この見棄てられた子供から、私は彼女が自分の來る少し前から、其處に獨りて住んで寝てゐたと云ふことを學んだ。そして彼女は、これから夜の暗黒の間、私が彼女の仲間になるのだと云ふことを發見した時、その可哀想な女の子は非常な喜びを表はした。その家は大きかつた。そして、道具がないので、鼠の音が廣い梯子段や座敷に恐しい反響を與へた。寒氣の爲めに實際身體が悪くなつた上、恐らく飢ゑてゐたその孤獨な子供は猶更、自製の幽霊の一種から苦しむ餘裕を見出した。私はたとへどのやうな幽霊からでも彼女を保護してやると約束した。けれど悲しいかな！ 自分はそれ以外の助力を彼女に提供することは出来なかつた。私達は

呪はれた法律新聞の束を枕に床の上に寝た。掛ける物と云つては大きな乗馬者の外套の一種の以外にはなにもなかつた。しかし後に、自分達は屋根裏に古い安樂椅子の覆ひや粗氈の小さい切れツ端やその他のボロを見付け出した。それが幾分我々の暖さを増した。その可哀想な子供は暖をとる爲めと幽霊から安全である爲めにシツカリ私に啗り付いてゐた。私は身體の具合がいつもより悪くない時には、彼女を抱いてやつた。そして、彼女はいつでもかなり暖かつたから、私の寝つかれないやうな時でも、屢々よく眠れた。と云ふのは、私の艱難の最期の二ヶ月間、私はたいてい晝間寝た。そして何時に限らず、よく居睡りをした。しかし私の眠りは醒めてゐる時よりも更に自分を惱ました。なぜなら、私の夢の擾亂（それは自分がこれから述べようと思ふ阿片によつて生ぜられた夢のやうに恐ろしくはないと云ふだけであつた）に加へて、私の睡眠は決して所謂 *dog sleep*（うたたね）以上のものではなかつた。だから、私は自分の呻吟く聲を聞く事が出来た。そして屢々、突然自分自身の聲で眼醒めたやうに思はれた。それに、此時分から、眠ると間もなく、恐ろしい感覚が私を襲ひ始めた。それはその後、私の生涯の種々な時期に自分に歸つて來た、即ち一種の痙攣で（どこか解らないが、たしかに胃の附近）それを救ふ爲めに、私は自分の足を激しく投げ出さなければならなかつた。この感覚は自分が眠り始めるとスグ來るので、それを免がれようと努力が絶えず自分の眼を醒してゐたから、とうとう自分は困憊からのみ眠るやうになつた。そして（私が前に云つたやうに）衰弱が次第に

増して來るので、私は始終睡つて始終起きてゐると云ふ有様だつた。それに又、その家の主人が折々突然に朝早くやつて來た。時には十時頃まで來ないやうなことも、少しもやつてこないこともあつた。彼は執行官をたえず恐れてゐた。クロムウエル※の方法を利用して彼は毎晩倫敦の色々な方面でねた。そして訪問する人のある毎に彼は戸を開けることを許す前、秘密な窓からその人の容子を覗はなかつたことは一度もなかつたことを自分はみてとつた。彼は朝飯を獨りて食べた、實際、彼の道具は第二者に彼の危なつかしい招待を許すことは出来なかつたであらう——それに食品の分量は、たいてい菓子パン一個かビスケット數個に過ぎなかつた。それを彼は彼の寝た場所から家に來る途中で買ったのであつた。或はよし、彼が客を招いたに於て自分が嘗て學者風に諧謔を弄して、彼に述べたやうに——客の數人は相互に連續の關係で立たなければならぬ。（どんな關係にしろ坐ると云ふことはない）、そして哲學者風にそれを云へば同對の關係に於てではない。即ち、時間方面の關係で、空間方面の關係では駄目なのだ。彼の朝飯の間、私はたいていブラブラする理由を案出した。そして、出来る丈無頓着な風をして、彼が餘した屑を拾ひあげた。時としては實際チツトもなんにもなかつた。このやうなことをやつたからと云つて私はその人間彼自身に對して以外、ドロポ一はやらなかつた。それで、かれは時々、晝頃に、餘分なビスケットを買ひにやるべく餘儀なくされたのだと（私は信ずる。）例の可哀想な子供はと云へば、彼女は彼の書齋に（若し彼の羊皮紙や、法律上の書き物等

の主要な貯蔵室に對してその名を與へ得るとするなら) 入ることを許されなかつた。その部屋は彼女にとつて、その家の青髯部屋であつた。それは、六時頃、いつも彼が夕飯に出かける時に鏡を下された。そして、それが普通、彼の夜に向つて出發する最後であつた。この女の子がブルーネル氏の私生兒であつたか、或は單に一個の下女であつたか、自分には確めることが出来なかつた。彼女は自分でも知らなかつた。けれど、確かに、彼女はまったく奴隷的なサアバンドとして取り扱はれてゐた。ブルーネル氏が現はれるや否や、彼女は下に降りて、靴や、上衣を拂つた。そして彼女は使に行く爲めに呼ばれる外、夜になつて私のうれしいノックが彼女の小さいブルブルする足どりを入口に呼び出す迄、臺所の薄暗い地獄から決して出だしては來なかつた。しかし、彼女の晝間の生活に就いては、夜になつてから聞いた彼女自身の話から綜合した以外には殆どわからなかつた。なぜなら、用事時間が始まるや否や私は自分のゐない方が御氣に召すと云ふことが解つた。だから、たいてい、私は出かけて、夜になる迄、公園やその他の處でブラついてゐた。

だが、それにしても、この家の主人その人は、全體、誰れて、何者であつたか？ 讀者よ、彼は法律の低級な方面に於ける例の變則な法律家の一人であつた。その人は——さあ、なんと云つたらいいのだらう？

——、用意周到な理由からか、或は必要からか、あまりに微妙な良心の贅澤に耽ることをかれ等自身に拒んでゐる人等であつた。(このやうな婉曲な物の云ひ方は著しく省略されるかも知れない。だが、兎に角、私

はそれを讀者の味ふに委せる。) 人生の幾多の行路の中で、良心は妻君とか馬車など云ふ物より、遙かに高價な厄介物である。そしてよく人々がこれ等の馬車を「曲げる」と云ふやうなことを云ふが、思ふに私の友人のブルーネル氏も暫時、彼の良心を「曲げた」のであつた。勿論、彼が出せるやうになりさへすれば、早速それを受け出す心算で。このやうな人の日常生活の内幕は、若し私が讀者の自腹で彼を樂ませることを自身に許すことが出来たら、最も不可思議な光景を呈したであらう。私の制限された機會で、その行はれた事を觀察したところによつては、私は倫敦の陰謀や、複雑な術策が、"cycle and epicycle, ord and orb," (輪に輪をかけて) 行はれた多くの光景を目撃した。私はそれを思ひ出す度に今日でも時々微笑する——そしてその時も私は自分のみじめさに拘らず、微笑した。しかし、その當時の自分の境遇は、私一個人としてはブルーネル氏の性格に就て、自分が彼を尊敬したと云ふやうなこと以外には、殆ど何等の經驗をも自分に與へなかつた。そして彼の不思議な全體の心理組織に就いては、かれが自分に對して親切であり、彼の力の範圍で、寛大であつたと云ふ他、すべてを忘れなければならぬ。

その力の範圍は、實際、さう廣いものではなかつた。けれど、鼠と同格で、自分は無代で休息した。そしてドクタア・ジョンソンはその一生の中で一度でも彼が思ふ存分ウォールフルトを食べたことがなかつたと録してゐるが、感謝すべきことには、そのタッタ一ツの場合に自分は倫敦の大家で自分の欲しいままに勝

手な室を撰擇することが出来た。例の哀れな子供が、お化けの出ると信じてゐた青髭部屋を除いては、何處でも、屋根裏から穴倉に至る迄、我々の自由になつた。"the world was all before me". そして私達は何處でも自分達の好きな處に夜の天幕を張つた。自分はこの家を既に大きな家として描いた。それは倫敦のよく知られてゐる部分のよく目立つ場所に立つてゐる。わが讀者の多くも無論これを読みつつある數時間内に、そこを通り過ぎたであらう。自分としては、倫敦に用のある場合には必ず、そこを訪問することを誤らない。今夜の（千八百二十一年、八月十五日の）十時頃、私の誕生日なので——私はわざわざその家を瞥見する爲めオックスフォード街の方へ私の夕の散歩を轉じた。それは今では或立派な家族によつて占められてゐる。そして前方の客間の燈火によつて、私は家内の人々の群を見た、恐らく茶を飲む爲めに集つてゐたのであらう、見た處は如何にも愉快に陽氣さうであつた。十八年以前のその同じ家の中あの暗黒——冷氣——靜寂——荒廢に比して自分の眼にはなんと云ふ著しい對照なのであらう。その當時、その夜毎の占有者は一人の餓死しかかつてゐる學者と、そして一人の除け者にされた子供とであつた。——（因に、後年、自分は彼女を捜さうと努めたが駄目であつた。）彼女の境遇から離して見て、彼女は決して興味があると云はれる質の子供ではなかつた。彼女は可愛らしくもなく、解りの早い方でもなかつた、また容子もあまり感心はされない方であつた。しかし、ありがたいことには——その當時にあつてさへ、自分の情愛を宥和するために珍奇な

附屬物の裝飾を必要とはしなかつた。最も謙遜な、そして最も質素な服裝をしてゐる質朴な人間性が自分にとつては充分であつた。そして私は彼女が落魄中に於ける私の道連れであつたといふ理由で、その子供を愛した。若し彼女が今生きてゐるとすれば彼女は多分彼女位の子供がある母親である筈だ、けれど、前にも云つたやうに、私は決して彼女を跡づけることは出来なかつた。

私はそれを悼しむ。しかしその頃もう一人の人がゐた。自分はその後その人を遙かに深い熱心を以つて捜さうと努めた。そして自分の失敗を愈々深く悲しんだ。この人は若い女であつた。そして賣春の賃金で身すぎをする不幸な階級の一人であつた。私は當時、その不幸な境遇にある多くの女達と親密な友人關係を結んでゐたと云ふことを告白することに、何等の羞恥をも感じない。又それを感じすべき理由をも持たない。讀者はこの告白に對して微笑む要もなければ、眉をひそめることも入らない。なぜならわが古典の素養ある讀者に *Sires, Cousins, etc.* の古い羅典の諺を思ひ出させないでも、當時の懐ろ状態では、この種の婦人と自分の關係が不純なものになり得なかつたと云ふことは充分想像することが出来ると思ふ。だが、實際私は自分の生涯の如何なる場合に於ても、人間の形をした物の接觸或は接近によつて、毒されることを自ら防ぐやうな人間ではなかつた。反對に、私は自分の極く若いときから、男でも、女でも、子供でも、機會が自分の道に投げるあらゆる種類の人間と *more or less* (ソークラテース風) に碎けて話をするのが、私の誇りであつ

た。それは人性の智識、善良な感情、率直な話し振りに親しむ一つの修業であつて、哲學者みたやうな人間にふさはしいものである。なぜなら、哲學者とも云はるべき人間は、假りに自ら世俗の人と稱し、血統と教育の狭い獨りよがりの偏見に充された哀れむべく制限された人間の眼を以て見てはならないからだ。彼は自ら宏量な人物を以て任じ、高き者にも、低き者にも、教育のある者にも無い者にも、罪のある者にも、無い者にも、同一關係に立つてゐる人間を以つて自任しなければならぬ。その當時、私自身は必然に一個の逍遙派、若しくは街上散歩者であつたから、自然かの専門的に街上歩行者と呼ばれるそれ等の闊秀逍遙派の人々と屢々落ち合つた譯である。それ等の婦人の多くは屢々私に味方して、私が腰かけてゐた家々の石段から私を追ひ出さうとした番人等に反抗した。しかしかれ等の中の一人、その一人の爲めに私は少なくともこの問題を引き出したのである。しかし、否！ おお、高潔な精神を有するアン——、汝をしてかの種の婦人に伍さしむる勿れ。出來得べくんば、彼女の境遇に名づくるにやさしき名稱を發見せしめよ。現在自分がこのやうに生き永らへてゐる事は、あらゆる世の中が自分を見棄てた時、私の急迫を救つてくれた彼女の恵みと慈悲とに歸せられなければならない。——數週間、私は夜々この哀れな孤獨の娘とオックスフォード街をアチコチとさまよつたり石段や支關の庇の下で彼女と一緒に休息したりした。實際彼女は滿十六歳にならぬのだと自分に話したことがある。このやうな質問から彼女に對する自分の興味が迅速に促されたので、私

は段々に彼女の單純な歴史を引き出して行つた。彼女のも（私がその後さう云ふ風に考へる理由を持つたやうに）、よくある普通の出來事であつて、若し倫敦市の恩澤が一層よく調整されてゐて、それに應ずる事が出來たなら、法律の力が其間に立つて保護を與へ、復讐することの出來るやうな事情であつた。しかし倫敦市の慈愛の流れは如何に深く大きくとも地底の水路を無言に流れて、哀れな無宿の漂泊者等には見えもしなければ、容易に接近する事さへ出來ない。そして倫敦社會の外面の風格と構造とが残忍、刻薄、冷酷である事は否むことが出來ない。しかし、如何なる場合にも、私は彼女の受けた損害が容易に救済され得ることを見た。そして私は度々熱心に彼女を促して、彼女の苦情を役人に訴へることを勧めた。彼女が頼りない身なのだから、直に然るべき方法を講じてくれるであらう。そして何人にも公平な英國の裁判は即座に彼女の僅かな財産を掠奪した獸の如き惡漢を彼女の爲めに充分罰してくれるだらう。と云ふことを確かめた。彼女は度々さうすることを約束した。けれど彼女は私が始終指摘した手段を取ることを延期した。なぜなら彼女は著しく臆病で、磨げられてゐた。そしてそれはどんなに深い悲痛が彼女の若い心を捉へたかを示してゐた。そして恐らく彼女は最も嚴正な裁判官でも、或は最も公平な判事でも、彼女の最も重い損害を償ふべき何事をもなし得ないと考へてゐた。けれど多分どうにかなつたのであらう。それで、とうとう我々の間で、一兩日中に連れ立つて行政官の處に行き、彼女の爲めに口を開かうと云ふ手筈がきめられたのであつたが、不幸

にしてそれは私が彼女に遇ふ最後の一回前であつた。しかし、この僅かな報恩すら私は遂に實現することが出来なかつたのである。兎角するうち、彼女が私に對してして呉れたことはとても自分が彼女に酬い得なかつた程、偉偉きなものであつた。それはかうである。——或晩私達はオックスフォード街を歩いてゐた。それは私の身體の具合がいつもよりわるく、元氣がわけても衰へてゐたやうに思はれた翌日であつた。私は自分と一緒にソホ・スクエアの方に曲つてくれと彼女に頼んだ。其處へ私達は行つた。そして私達は或家の石段に腰を掛けた。私は今でも、その家の傍を通る毎に、一種悲哀の痛感と、彼女が其處であらした高尚な行爲の記憶に伴つて、その薄倅な娘の精神に對する服従の内部行爲を感じないではゐられない。私達が腰をかける時、突然、私の具合がヒドク悪くなつて來た。私は彼女の胸に自分の頭をもたせかけてみた。そして遂かに私は彼女の腕から離れて、石段の上にひつくりかへつた。私がその時感じたさまざまの感覺から、私は或力強い回生の刺戟物がなかつたら、私はその場で死んでしまつたか、——或は少なくとも著しい疲労困憊の状態に沈んで、私の孤獨な境遇では、それから回復する見込はやがてまつたく盡き果ててしまつたらうと云ふ最も鋭敏な深い確信を感じた。その時、此私の運命の危機に當つて、私に救ひの手を差延べてくれたのは——此世の中で災の他、殆んど何物にも出遇はなかつた——わが哀れな孤兒の友達であつた。驚きの叫びを發したが、一瞬の猶豫もなく、彼女はオックスフォード街に走り去つた。そして殆んど想像だもされな

い速さて、一杯のポートワインと若干の香料スパイスを持つて私の處に歸つて來た。それが私の空虚な胃（それはその時あらゆる固形體の食物を受け付けなかつたであらう）に神速な回生の力を以つて働いた。そしてこの杯の爲にその氣前のいい娘は少しも咄かず、彼女の貧しい財布から拂つたのである。それは——記憶されなければならぬ！ 彼女がそれでやつと生活のなくてはならない品を買ひ得たか得ない時で、況んや私が彼女にそれを返済することが出來ると云ふことを期待する理由なぞは思ひもよらない時であつた。おお、若き恩惠者よ！ 後年幾度か寂しき場所に立ちながら、心の悲哀と曇りなき愛を抱いて汝を思ひやり、かの昔父の呪咀に超自然の力ありとせられ、その目的を追求することがやがて自己完成の必然な宿命と信ぜられたるが如く、——感謝の念にひたすら壓せられた心の祝禱が同一の特權を帯び、天授の力によつて、或は追ひ、或は授り、倫敦娼家の中央暗黒裡に、又は（能ふべくは）墓中の暗黒に迄、汝を索り求め——そこに平和と宥恕と、最終の調和の確然たる使命を以つて汝を呼び醒さんことを、如何に屢々望んだであらう！ 自分は泣くことはあまりしない、なぜなら、日毎に、否、時々刻々、人間の主たる利害と關係あるさまざまの問題に對する私の思想は「涙を流さんにはあまりに深き」千尋ちゆんの底に下るばかりではない。或は嚴肅な私の思想の習慣が涙を早むる感情に對して、かの自己の輕浮なるが爲め常に隱微ひそ的悲哀の傾向より免かれ、其同一なる輕浮に依て、かくの如き感情の偶然の接近にすら抵抗しがたくされてゐるそれ等の人々には必然に缺けてゐる

反感を表はすばかりではない。——なほ又、自分は私と同様にかくの如き問題を深く考察したすべての人々は、極度の絶望からかれ等自身を保護する爲め、夙に人間痛苦の將來の均衡グロウンスとその神秘的意義に關して或靜平の信仰を努めて抱いたに相異ないと信ずる。これ等の理由から、私は今日でも快活である。そして先に云つたやうに、自分はあまり泣かないのである。しかし或感情はたとへ深く熱烈ではないとしても、他の者よりやさしいものがある。そして今でも度々自分は夢のやうな燈火に沿うてオックスフォード街を散歩し、數年前、私と私の親愛な仲間グレイ・コングレーヴ（と私はいつても彼女を呼ばなければならぬ）と慰撫してくれたパーレルオルガンの曲を聞く毎に、私は涙を流し、かの突如として危く來り、永久に我々を別離せしめた不可思議な攝理に對して自から獨り冥想に耽るのである。如何にしてそれが起つたか、讀者はこの序言的物語の後半によつて、それを理解するであらう。

私が録した最後の出來事の後、間もなく、私は、アルベマール街で、故の陛下の親族である一人の紳士に出遇つた。この紳士は様々の場合に、私の家族から、色々な款待を受けてゐた。そして彼は私の家族的類似を楯にして、私を詰問した。自分は何等の假託フィクションをも企てなかつた。私は巧みに彼の質問に答へた。——そして、彼の後見人等に對し、決して自分を裏切るやうなことはしないと、名譽に誓つて受け合つたので、私は例の辯護士の宿所を彼にあかした。翌日、私は彼から十磅の紙幣を受け取つた。それを封じた手紙が他の

用向きの手紙と一緒に辯護士に渡された。彼の顔付と容子は、その中味を訝つてゐると云ふことを私に告げたが、彼は何等の躊躇なく立派にそれを私に手渡したのであつた。

この賜物は、それが適用された特殊の用途から、私をして自然、倫敦に誘惑した目的に就て語らしめる。それは倫敦到着の最初の日から最後の別離の日迄（法廷用の言葉を借りれば）。自分が *solitaire*（切願）してゐたものである。

倫敦のやうな大きな世の中で、私が貧困の最後の極端を防ぐ方法を發見し得なかつたことはわが讀者を驚かすであらう。そして少なくとも二個の財源——即ち私の家族の友人から補助を求めるか、或は私の年少の技術と學識とを金錢上の利益の水路に轉ずるか、——この二つが自分の爲めに開かれたにちがひないと云ふことを讀者に感づかせるであらう。最初の方法に就ては、自分があらゆる禍の中で、最も恐れてゐたのが、私の後見人に呼び戻される機會であつたからだと先づ辯解することが出来る。勿論、法律がかれ等に與へた力が自分に對して如何程、極端に功を奏しても、結局、強制的に私が見棄てた學校に私を歸らせる迄だと云ふことは解つてゐた。しかしその復歸は、たとへ進んで服従したにしても、私の眼には不名譽に見えた。そして自分の知られてゐる願望や、努力が輕蔑無視され私から強奪された時、それは自分にとつて死よりも更に悪い屈辱であることを免がれない。そしてそれは實際、死の終局を告げたであらう。だから、私は、たと

へ自分が確かだと思ふ方面に對してさへ、自分の後見人に私を取り戻す手掛かり迄も供給する危険までも犯して、助力を仰がうとするには充分臆病であつた。けれど、特に倫敦では、勿論、私の父が彼の生前、多くの友人を其處に有してはゐたが、(それでも、彼が死んでから十年の歳月が経過してゐたので) 私は殆んどかれ等の名前さへ覚えてはゐなかつた。そしてこれ迄に、一度數時間、瞥見したほか、倫敦を見たことがなかつたから、それ等の少數の人々の宿所をさへ知らなかつた。だから助力を得る此方法に對して、半ば困難が伴ふと同時に、私が前に云つたやうな不斷の恐怖が中々強かつたので、それが常に私を厭はせた。他の方法に關しては私は今、どうして自分が、それを見落したかを怪しむ點で、半ば讀者に同感を表してゐる。(たとへ他に道がない迄も) 希臘文の校正掛りとして、私は無論、自分の僅かな缺乏を充す位な金は得られたかも知れないのだ。このやうな仕事なら、私は時間も精確に守り、模範的使用人として職務を果し、やがて雇主の信任を得た事でもあらう。しかし、このやうな職務に對してすら、忘れられてはならない事は、私になにより先きに或相當な出版業者に對する紹介状を持たなければならぬと云ふ事である。そして私はこれを得べき方法を持たなかつた。しかし、實を云へば、文學的勞働が幾分の金になると云ふやうな考へは一度も自分には起らなかつたのである。金を手取り早く取ると云ふやうな方法は一度も自分に浮んで來なかつた。唯だ私の將來の權利と期待とを頼みにして、それを借りることであつた。私はこの方法を至る處で求め

たり。そして私が申し込んだ多くの人々のうちに、デルと云ふ或猶太人があつた。

この猶太人、及びその他廣告をしてゐる金貸(かれ等の或者も亦猶太人であつたと信ずる)に對して、私は自分自身を紹介し、私の期待の理由を説明した。私の父の遺言を *Docter's Comments* (登記所)で讀んで、かれ等はその説明の精確であることを確めた。そこにトマス・クインシイの次男として掲げられてゐる人間が自分が陳べたあらゆる權利(若しくはそれ以上)を有することが發見された。しかし、猶太人等の顔が、かなり意味ありげに暗示したなほ一個の疑問は——自分が果してその人間であるか、どうかと云ふことであつた。この疑ひは決してあり得べきこととして自分には起らなかつた。私は寧ろ、わが猶太の友達が貌どい眼で私を穿鑿した時は、いつも、自分がその人間であると云ふことをあまりによく知られ——それが爲め、私を落し入れて、私の後見人に賣らうと云ふ或計畫がかれ等の心裡に起りはしまいかと氣づかつたことであつた。自分にとつて不思議であつたことは、私自身が *Materialist* (物質)に考へられ、(さう私はそれを言ひ表はした。なぜなら、私は差別の論理的精確を病的に愛してゐたから) 私自身を伴る *Formalist* (虚形)と考へられて、咎められ、或は少なくとも疑はれてゐたことを發見した事である。然し、私は、かれ等の狐疑を満足せしめるべく、自分の力で出来る唯一の方法を取つた。私がウエールスにゐる間、私は若い友達から色々な手紙を受け取つてゐた。私はそれを取り出した。私はそれを始終、私のポケットに入れてゐた。——實際

その時分(私が着てゐた衣物を除いては)自分がどうにも處分する事が出来なかつた殆んど唯一の邪魔物であつた。これ等の手紙の大部分はアルモントの伯爵からのものであつた。伯はその當時、自分の主な(或は寧ろ唯一の)親友であつた。これ等の手紙の日附がイートンになつてゐた。私は又スリゴの侯爵から、ある手紙をもらつてゐた。その人の父と云ふ人も、農業に熱中してゐたけれど、元來イートニアンで、貴族の持前としてかなり學者だつたから——依然として古典的な學問と若い學者達に對して愛を抱いてゐた。だから彼は私が十五歳の折から私と通信をしてゐた。時としては、自分のゐた、マヨヤリゴの地方に關する大改革に關して、彼が實行したことや、考へてゐることを書いてよこした。時には又或羅典詩人の價值を論じたり、或は彼が私に書かせたいと思ふ詩歌の題などを暗示してよこした。

これ等の手紙を讀んで、私の獨太の友人の一人は、——若し私が自分より年上でないその伯爵を説き勧め、私が丁年になつた時の返済を保證させるなら、——無抵當で二三百磅を出さうと云ひ出した。今考へて見ると猶太人の最後の目的は、彼が私から期待し得た些少の利益ではなく、私の立派な友人と或關係を確立する預望だつたので、非常な期待が、彼にはよく解つてゐたのである。その猶太人のこの提議に従つて、それから八日か九日經つて、私は十磅を受け取つた。私はイートンへ行く準備をした。そのうちの約三磅を、私は私の金貨の友達に與へた。私が倫敦にゐない間、證書が用意されるかも知れないから、印紙を買つて置

かなければならないと彼が頻りに云ふので。私は心では彼がウソをついてゐるのだと思つた。けれど、私は彼自身の遅延を私に負はせることに對して何等の辯解をも彼に與へようとは思はなかつた。私は又僅かな金を私の友人の例の代言にやつた(彼は金貨の辯護士としてかれ等と關係があつた)、實際。その額は彼のガラソとした宿所に對して相當なものであつた。十五志^{ソラソ}ばかりを私は私の衣物を(無論極めて粗末な)新調するのために費つた。残りの四分の一をアンに與へた。勿論、歸つたら後のは残つてゐるだけ、彼女と分ける積りであつた。これ等の用意が出来たので、——暗い冬の夕方六時少し過ぎに私は、アンに伴はれてピカデイリイの方に出かけた。自分の考へではバスカプリストル行の郵便馬車で少なくともソールトヒル位まで、行く積りであつた。我々の道程は今は大分なくなつた市の一部分に横はつてゐた。だから、私は最早、昔の境界線を辿ることは出来ない。スワロウ・ストリートと、それが呼ばれてゐたと思ふ。だが、時間が充分あつたので、私達は左側の方を傍うて、ゴールドン、スクエア迄來た。そこで、シエラアドストロイトの隅で、私達は腰を掛けた。私達はピカデイリイのやうなガヤ／＼した明るい處では別れたくはなかつたのだ。私は彼女に以前から抱いてゐた私の計畫を話した。そして、私が若し幸運にありついたら、いつでも彼女は私の分前に與かるだらう。そして自分が彼女を保護する力が出来さへすれば、決していつまでも見棄るやうなことはしまいと改めて念を押した。自分はこれを單に義務の觀念からしても、充分實行しようと企てた。な

せむら、如何なる場合でも生涯、彼女の負債者に私をしなければならぬ感謝の念を離れても、自分は彼女が恰かも自分の姉妹でもあるかのやうに心から彼女を愛してゐた。そして、此時も、彼女の極端な落膽を目撃する憐憫の情から、七倍のやさしさを以て愛してゐた。自分こそ、どこから見ても、失望する非常な理由を有してゐた。何故なら、私は私の生命の救主と別れようとしてゐたのである。しかも自分は、私の健康が受けた打撃を考へながら、愉快に、希望に充されてゐた。然るに、彼女に仕ふるに、單に親切と兄弟らしい態度以外に何物も與へなかつた人間と別れようとしてゐる彼女は悲哀に耐へなかつたのである。だから、私が最後の告別として彼女に接吻した時、彼女は私の首に嘔りついて一言も云はずに泣いた。私はせいゝ一週間以内に歸らうと思つてゐた。そして私は、その五日目の晩から、後は毎夜六時頃、グレイト テッチ フールドストリートの突き當りて私を待つてゐるやうにと約束した。其處はオックスフォード街と云ふ大きな地中海で御相互にはぐれないやうに、きめて置いた rendezvous (あひびき) のいつもの港であつた。この他にも、自分は色々と注意した。が、自分は唯だ一ツを忘れた。彼女は一度も自分に、彼女の名字を云はなかつた。或は(大した必要もないので)私が忘れたのかも知れない。實際、不幸な境遇にあの卑しい階級の娘等にあつては、かれ等自身を Miss Douglas, Miss Montague などとは云はないで、單に Mary, Jane, Frances と云ふやうにかれ等のクリステイアンネームで呼び合つてゐるのが通則である。今後も彼女を探す

最も確かな手段として、私は彼女の名字を尋ねなければならぬ。けれど實際、私達は、一寸の間、別れてゐた結果として、われゝの邂逅が數週間別れてゐた時よりもツとむづかしく不確かにならうなどと考へる理由を持たなかつたので、私は少しでも、それを必要として注意しなかつたし、この別離の會見に於て、覺え帳に書き入れようとも考へなかつた。そして、私の最後の心配は希望を以つて彼女を慰めることや、彼女が、それで、苦しんでゐたヒドイ暖や、シャガレ聲の爲に薬を飲む必要を彼女に通ふことなどに費された。私はまつたく、それを忘れてしまつて、思ひ付いた時は、彼女を呼び戻すには、最早あまりに遅くなつてしまつてゐた。

私がグラセスタアの喫茶店カフェインに着いた時は八時過ぎであつた。そして、ブリストルメールが出ようとしてゐた處なので、私は外側の方へ乗つた。この馬車カウチのうつくしい滑つて行くやうな運動がやがて、私を眠らせてしまつた。數ヶ月持つことが出来なかつた安々と楽しい睡眠を初めて貪り得たのがメールコーチの車上であつたと云ふことは特筆すべき事柄である。——今ではその寢床は自分には寧ろ不安な位である。この睡眠と結び付て小さい事件が起つた。それはその時の他の數百人と同様、大きな災難に遇つたことのない人間は、少なくとも彼自身のうちに、人心の善性——若くは、如何にも嘆息すべきことだが、その悪性が確かにあり得べきものと云ふことを少しも知らずに、如何に平氣に人生を通過するものであるかと云ふことを確める

役に立つたのである。人間の性質 (nature) のさまざまの形や、表現の上には恐しい厚い態度 (thickness) の幕が引かれてゐる。だから、平凡な観察者には二個の極端と、その間に横はる變化の無限の領域が、悉く混同されて見える。——かれ等の調和の廣大無限の種々相が全音階或は初等音のアルハベットの如き貧弱な變化の輪廓で表されてしまう。倫敦からの最初の四五哩の間、私は馬車が一方にヒドク傾いた時、折々落つて屋上にある私の乗合を惜ました。そして實際、若し道路がそのやうに滑らかで平でなかつたら、私は衰弱してゐたから、車上から墜落したかも知れない。この迷惑に對して、彼は、恐らく同一の場合に大抵の人間がやるやうに、ヒドク、ブツ／＼云つた。しかし、彼はその不平をその場合が赦してもよささうに思はれた以上に更に氣むづかしく發表した。そして若し私がその時きり彼と別れてしまつたなら、私は（若し少しでも考へる價值がある人間だと思つたなら）彼を意地の悪い、ホントに獸みたいな奴だと考へたにちがひない。しかし、私は自分が不平の原因を彼に與へてゐると云ふことは承知してゐた。だから、私は彼に謝罪した。そしてこれからは出来る丈け限りこけることを避けるやうにしようと思つた。同時に、出来る丈、言葉少なに、自分は身體の具合が悪く、永の苦しみで弱つてゐるので、中の方には寝ることが出来ないと思つた。この説明を聴くと、この人の態度が遽かに變つた。そして私がその次にハンスローの物音や光りて一寸眼を醒した時、（私は眼まいと思ふ願望や努力にも拘らず、私が彼に話してから、二分と

経たないうちに再び眠入つてしまつたのである）私は彼が腕を私の身體にまはして私の落ちるのを防いでゐるのを發見した。そして、その後も、彼は婦人の如きやさしい態度で、私に對した。で、とう／＼自分は彼に抱かれてねてしまつた。そして彼は私がバスやブリストルの終點まで行くのではないと云ふことを知らなかつたのだから、愈々親切だと云はなければならぬ。しかし、實は不幸にして、私が思つてたよりも寧ろ先に行つてしまつた。なぜと云ふと自分の眼りは實に氣持よく爽快で、ハウンスローを後にしてからは、（多分郵便局であつたらう）馬車が突然止つたので、スッカリ眼を醒した迄、前後不覺であつた。そして、訊ねると、私はメイドンヘッドに着いたと云ふことが解つた。——たぶん、ソールトヒルから六七哩先だつたと思ふ。此處で私は下りた。そして馬車が止つてゐる半分開、私は私の親しい連から、（その人は、私がピカデリイでテラと見かけた處から察すると、なんでも或紳士の料理番、——か若くはその種の階級の人であつた）スグと寢床に行くやうにと頻りに勧められた。私は別段さうしようと思ふ積りはなかつたがこれを約束した。そして、實際、自分はスグ歩き出した。寧ろ後戻りをしたのであつた。その時は丁度眞夜中頃であつたに相異なる。しかし自分は這ふやうにゆつくり歩いた。で、私は私がスロウからイトトンへ行く小路を曲らないうちに或小屋で四時の鳴るのを聴いた。空氣と睡眠とが兩つながら、私を蘇生させた。それで自分は依然として、疲れてゐた。私はその時、貧困の境遇にある自分に或慰藉を與へた一つ思想を思ひ出す（隨

分ハッキリ、そしてそれは或羅馬の詩人によつてかなりよく發想されたものである。その少し前にハウンスロウの荒地だか、その近所だかて人殺しがあつた。そして被害者の名がステイルだと云へば自分の考へ違ひでないと云ふことがわかると思ふ。そして彼はその近傍にあるラワンデル栽培地の持主であつた。私の進んで行く一歩／＼は私をその荒地に近づかせつつあつた。そして私とその刑狀持の殺人者とが若し彼がその晩出てゐるとすれば暗の中で御相互に知らず／＼近づきつつあつたのではないかと云ふ考へが、自然私に起つて來た。その時には、と私は云つた、——若し私が

Lord of my learning and no land beside.

私の學問の殿様でこそあれ、その他に何の地面をも持たない

一個の浮浪人(まつたくその通りであるが)だと思ふ代りに、私の友人のアルタモント侯のやうに、有名な年額七萬磅の後継者であると思像したなら、この刹那に私の咽喉のまわりにどんな恐慌を來たしたらう!だが、實際、アルタモント侯が私のやうな場合に出合ふと云ふことはほんとうらしくない。しかしそれにも拘らず、その言葉の精神は依然として眞實である——その大きな權力と所有とは人間をして恥かしい程、死を恐れさせる。そして最も大膽な冒險者の多數は、幸にも貧乏だったので充分にかれ等の自然の勇氣を享樂することが出來たのだが、若しその活動に入らんとする刹那に、かれ等が思ひがけなくも、英國に於て、年五

萬磅の財産を繼承する身分になつたと云ふ報告を受けとつたら、彈丸に對するかれ等の嫌惡は著しく鋭くされ——果はかれ等が完全な平靜と自若に對する努力はその釣合を著しく困難ならしめることだらうと、私は確信してゐる。富は

To slacken virtue, and abate her edge,

Than tempt her to be ought may merit praise. Parul. Requinel.

徳を勵めて賞賛に價する行爲をなさしむより

寧ろ徳を弛め、彼女の刃を鈍らすに

遙か適してゐると、兩運を親しく身に味つた或賢人は云つたがその言葉には如何にも眞理がある。

私は自分の問題にいつまでもグヅ／＼耽つてゐる。なぜなら、私自身にとつては、この當時の思ひ出に深い興味があるからである。しかし、わが讀者はこれ以上に不平をこぼす原因を持たぬであらう。なぜなら、私は今その結末に近づいてゐる。——スロオとイトンの間の路で、私は眠つてしまつた。そして、丁度夜が明けかかり始めた時、彼は私の傍に立つて自分をチロ／＼見てゐる人の聲で眼を醒された。私は其人が誰であつたか知らない。彼は人相のよくない奴だつた。しかし必ずしも惡意のある人間ではなかつた。或は若しさうにしても、彼が多戸外で眠るやうな人間は盜む價值がないと考へたのだと私は想像する。しかし、

その結論は、私自身に關するもので若しその人が、私の讀者の中にあるとすれば、その人は見まちがへられたのだと云ふことをその方に確かめたいと私は願ふ。なにか少しばかり云つて彼は通り過ぎた。そして私は人々がみんな起きない前にイートンを通過することが出来たから、私の邪魔したことに就ては不平でもなかつた。その夜は重くろしく、雲が低かつた。けれど、朝になつて、それは僅かの霜に變じた。そして地面や樹々が今霜を以つて覆はれた。私は見付けられずに、イートンを滑り出た。それから、私自身を洗つて、ウインザアの小さい旅宿で出来る丈け私の服装を整へた。途中私は年少の小供達に遇つた。私はそれ等の少年に色々な事を尋ねた。イートンツ子はいつても紳士である。そして私のみすぼらしい服装にも拘らず、かれ等は叮嚀に私に答へた。私の友達のアルタモント侯はケンブリッジ大學に行つてしまつてゐた。I i omnis est in labori, (その)であらゆる彼の努力が空しくなつた。)けれど、自分はイートンに他の友達を持つてゐた。しかし、失意の人間が伺候しようと思ふのは悉く盛名ある人間とは限らない。しかし、私自身を回想して、私はデザアトの伯爵を訪ねた。その人に對して(たとへその人との間柄が他の人とのやうな親密ではなかつたが)私はどんな境遇の中にあつても私自身面會することを怯むてはゐない。私は彼もケンブリッジに行つてゐるのではないかと思つたが、その時は未だイートンにゐた。私は訪問した。そして懇ろに迎へられて、朝餐に招かれた。

此處で私はしばらく止まつて、わが讀者が誤つた結論に落ち入るのを防がうと思ふ。なぜなら、私は偶然色々なオレキレキの友達のことを話すやうな羽目になつた。しかしこれによつて自分の階級や名門に對する自己吹聴をするのだと想像されては耐らない。私はそんなものを持つてゐないことを神に感謝する。私は英國の平商人の息子である。父はその生前、彼の非常な廉潔と、文學に對する強い愛着を持つてゐたので、重んぜられてゐた。(實際、彼は自分でも無名な一著作家であつた。)若し彼が生きてゐたなら、非常な金持になつてゐただらうと期待されてゐた。しかし、天死したので彼は八人の異つた権利者に僅か三萬磅ばかりの遺産しか残してはいかなかつた。私の母は父以上に高い天稟を持つてゐたと私は名譽に誓つて云ふことが出来る。なぜなら、たとへ文學婦人の稱號と尊敬を奉らないにしても、私は敢へて彼女を(多くの文學婦人はさうではない)智力的な女性と呼ぼうと思ふ。そして若し母の書簡が集められて、出版されたなら、一般から強い男性的なところが表はれてゐると考へられたらうと信ずる。それはわれ／＼の國語に特有な清新なイデオイムの美しさに充ちた純粹な mother English, だ書かれてゐて——モンターグ夫人の書簡を除いては、一寸見られない文體である。——かくの如きものが私の血統の誇りである。私はその他のものを持つてはゐない。そして私は自分が持つてゐないことを眞面目に神に感謝した。なぜなら、私の判断によれば、人間を彼の同胞の水準よりもあまりに著しく引き上げる位置は道德的な、或は智力的な性格に對して最も好ましいも

のではないから。

デザート侯は私の前に最も立派な朝食を置いた。それは實際さうではあつた。けれど、自分の眼にはそれが三倍にも華麗に見えた。——それは私が數ヶ年以後に於ける最初の正餐で、又最初の "Gout d'homme's table" (貴人の食卓) であつたから、しかし、かう云つては不思議だが、私は殆んど何も食べられなかつた。私が初めて私の十磅の紙幣を受け取つた日に、私は或パン屋の店に行つた。そして巻きパンを一對買つた。これは自分が二ヶ月或は六週間以前、熱心な慾望を抱いて眺めた店であつた。それを思ひ出すと自分は殆んど屈辱に耐へない。私はオトウエイ[※]の話[※]を記憶してゐた。そしてあまり迅速に喰べると危険ではないかと心配した。けれど私は警戒する必要がなかつた。私の食慾はまったく消沈してゐた。そして私は自分の買つたパンを半分も喰べないうちに病氣になつた。食事に近いものを取つた此影響を私は數週間續けて感じた。或は、私が嘔氣を催さなかつた時でも、私の食べた物の半分は受け入れられなかつた。時には、酸を伴つて、時にはそれを伴はないで、直に吐き出された。今、デザート侯の食卓についた、私はやはりいつもより少しもよくない自分を發見した。そして、御馳走の眞中にある、私は何の食慾をも持たなかつた。けれど、私は不幸にして、いつでも酒に對する強い欲求を持つてゐた。だから、私は侯に私の境遇を説明し、私の最近の艱難を簡単に話した。彼はそれに對して非常な同情を表はして、酒を命じた。これが私に一時の回復と愉快とを

與へた。そしてどんな場合でも、機會さへあれば、私は決して酒を飲むことを誤らなかつた。私はその後、私が阿片を崇拜したやうに、その當時、それを崇拜した。しかし、此酒に耽つたことが、私の病氣を重くするに與つたと自分は確信してゐる。なぜなら、私の胃の調子は明らかに、まったく衰弱してゐた。そして、よく養生したなら、やがて、恐らく、有功に、回復したのかも知れなかつた。私はイートンの友人の近所にグヅ／＼してゐたのは、酒に對するこの愛着でなかつたことを希望する。それは私が充分の權利を持つてゐないと云ふことを、自覺してゐたデザート侯に對して、私がイートンにわざ／＼やつて來た特別の用事を頼むことが嫌だつたからだと云ふ理屈をその時、無理につけてゐた。けれど、私は私の旅行を無にすることを欲しなかつた。そして、——私はそれを頼んだ。デザート侯の善良な性質は計り知られなかつた。そして、それは、私の場合では、私自身の直接の要求の内容を嚴格に詰問すると云ふより、恐らく、私の境遇に對する彼の同情と、私が彼の親戚の或者と親密だと云ふことを知つてゐるので、寧ろ加減されてゐたが、別段この請求を非難しはしなかつた。彼は金貨と交渉することは好まないことを白狀した。そしてこのやうな事が彼の親戚の耳にはひることを心配してゐた。その上、彼は、自分からの期待が彼の從兄弟のそれより、遙かに制限されてゐるから、彼の署名が私の非基督教徒の友人達の利益にはあまりなるまいと云ふことを氣づかつてゐた。しかし、彼は絶対に拒絶して私を苦しめようとは思つてゐなかつたらしく見えた。なぜなら、し

ばらく考へた後に、彼は、彼が指摘した或條件の下に、彼の保證を與へようと約束した。デザート侯はこの時、十八歳未滿であつた。その後、私はこの場合、彼が非常に上品な態度（それは彼にあつて若き誠實の美を備へてゐた）にまじへたよき智恵と思慮とを回想する毎に、最も外交の術にたけた如何なる老熟の政治家でも、同一の場合にあつて彼以上に處することが、果して出来たであらうかと、私は屢々疑つた。實際たいていの人達は、かう云ふ事を話しかけられた場合に、サラセン人の頭のやうに澁々した苛酷な顔付をして、ジロ／＼見ないではゐないだらう。

最上とはゆかなかつた迄も、自分がたいと想像した最悪の結果よりも遙かに立まさつてゐるこの約束に再び氣を取り直して、私は出發してから三日過ぎて、再び倫敦へウインザア・コーチで歸つて來た。そして、今私は物語の終りに近づいてゐる。——猶太人達はデザート侯の條件を承諾しなかつた。かれ等が結局その條件を承諾する積りなのか、或は相應な詮議をする爲に時間を取つてゐるのか、自分にはわからなかつたが、兎に角、随分永びいた——時が過ぎ去つた——私の紙幣の少額が將に盡き果てんとした。そしてその事の結末のつかないうちに、私はまたそろ以前のやうな、悲惨な状態に逆戻りをしなければならなかつた。だが、突然、この危機に、殆んど偶然、私の友人と妥協する道が開かれた。私は急に倫敦を去つて、英國のかけ離れた方に向つた。それから暫時して、私は大學にはひる手続きをした。そして數ヶ月経過した迄、私

は、今日迄も、私の若き艱難の主なる舞臺として残つてゐる程、自分の興味があつた場所を再び訪れることが出来なかつた。

それはさうと、か、わ、い、さ、う、な、ア、ン、は、ど、う、し、た、か？ 彼女の爲に私は私の結末の言葉を保存して置いた。私は、我々の結束通り、日毎に彼女を捜し求めた。そして、私が倫敦に滞在してゐる間、毎夜テッチファミリー下街の角で彼女を待ち合してゐた。私は彼女を知つてゐるさうな人々には誰れにでも、彼女のことを尋ねた。そして、私が倫敦滞在の最後の數時間、私は倫敦に關する自分の智識の及ぶ限り、制限された自分の力の及ぶ限り、ありとあらゆる手段を盡して、彼女の搜索に従事した。彼女が宿をとつてゐた街を自分は知つてゐたが、その家を知らなかつた。そして私は彼女がその宿の主婦から虐待されてゐると云ふ話をしたことを、とう／＼思ひ出した。たぶん、それがため、彼女は我々が別れる前その宿を去つたにちがひない。彼女には知る邊と云ふ者が殆んどなかつた。その上、たいていの人々は、私の穿鑿の熱心が、かれ等の哄笑を發せしめた動機から起つたと考へて、殆んど相手にしなかつた。そしてまた他の人々は某か（モリス）を私から巻き上げた娘を私が追ひかけてゐるのだと考へたので、實際、與へるべきものを持つてゐたにしても、自然、敎してやれと云ふ氣持が手傳つて彼女に對する手掛りを私に與へることを拒んだ。遂に、絶望的な方法として、私が倫敦を去つた日に、曾て我々と二度連れ立つたことがあるところから、（確かに）アンの顔を知つてゐるに相

違ないたゞ一の人の手に、その當時、私の家族の住居地であるチェスタアシヤアのアドレスを渡した。しかし、この時迄も、私は曾て彼女に就て一言を聴いたことがなかつた。これは、たいていの人々がこの人生で出會ふやうな、障碍のうちで、私の最も重い苦惱であつた。——若し彼女が生きてゐたなら、無論、私達は、倫敦の大きな迷宮の中を、この同じ瞬間に、相互に探り合つてゐなければならぬ筈である。恐らく、相互に數歩の間隔を置いて——けれど倫敦の街程、埒の廣いところはないから、屢々永久の別離に終りを告げるものが多い！ 數年の間、私は彼女が生きてゐることを希望した。そして私は一萬と云ふ言葉の文字通りの非修辭的な使用に於て、幾度か倫敦を訪問した時、私は彼女に近ひたさに、數萬の女の顔を眺めたと云ふことが出来ると思ふ。私は、たとへ一刹那にでも、彼女を見たなら、千人の間にあつても、再び彼女を知ることが出来たであらう。なぜなら、たとへ美麗ではなかつたが、彼女は愛らしい表情の顔と、上品な特殊の頭とを持つてゐた。——私は希望を持つて彼女を探したと云つた。がそれは過去數年の間であつた。今では、私は彼女と別れた時、私を悲しませた喉が、私の慰藉である。私は今はもう彼女に遇ひたいとは願はない。けれど、ズット前、墓の中に入つた人として、一層喜んで彼女のことを考へてゐる。その墓は、乞ひ願はくば、災厄と殘酷とが彼女の寛大な性情を磨滅し變化せしめないうち、或は惡漢の殘忍な行爲が、かれ等の始めた荒廢を完成しない以前に、取り去られたマグダレンが墓の如かれと祈る。

第二編

さらばオックスフォード街よ！ 石の如き心を持つ繼母よ！ 幾多の孤兒の嘆息に耳傾け、子供等の涙を飲む汝よ、かくして私に遂に汝から放免されたのである。時節が終りに到來した。私は最早苦悶を抱いて汝の盡きざる高臺を歩まぬであらう。或は飢餓の苦痛を夢み、醒めては又それに囚へられるやうなことはないであらう、勿論、私自身及びアンの相續者の多くが、我々の足跡を追つたに相違ない——我々の災厄の後繼者等が、アンならざる他の孤兒が嘆息したであらう。涙が他の子供等によつて流されたであらう。そして、オックスフォード街よ、汝は勿論、無數の人々の呻吟に反響した。しかし、私自身にとつては、自分の通過したかの暴風雨は永い晴天の保證であつたやうに思はれた。自分の拂つたかの若き日の艱難は來るべき數年間の賠償、悲哀の永い免税として受領されたやうに思はれた。そして若し再び私が倫敦を、孤獨な沈思に耽る人間として（自分が屢々さうであつたやうに）歩いたとしても、私はたいていは靜かに平和な心を抱いて歩くことが出来たのであつた。そして、たとへ、私が倫敦の新參者として受けたさまざまの災厄が、私の肉體に深く根を下し、後年に至つて芽を吹き、新たに花を咲かせ、不吉な陰影となつて私の後年を暗黒ならしめたことは事實であるが、これ等の苦痛の第二の襲撃は更に確立された堅忍と、成熟せる智力の財産と、同情あ

る愛感——それは如何に深くやさしかつたらう！——を以つて應じられた。

しかし、このやうに如何程の慰藉を以つても、遙かに距てられた年は悉く同一の根元より發した微妙な苦痛の連鎖によつて一貫されてゐた。そして、此處に自分は先見なき人間慾望の一例を見るのである。私が最初の憂ひ深き倫敦假寓の間、月明き夜、屢々オックスフォード街より、メルボーンの中心を通して、野や林に至る連續せる小路を打ち眺めることが、私の慰藉であつた。私は半ば暗く半ば照らされてゐる長い列樹に私の眼を走らせながら、「あれが北へ行く道だ。だからグラスミアヤに行く。若し自分に鳩の翼があるなら、私は慰めを求めに、あすこに飛んで行くのだが」と云つた。私は自分の盲目から、かくの如く言ひ、かくの如く願つた。しかし、その北方の土地に於てさへその谷に於てさへ、否、私の誤つた願望が指摘したその家に於てさへこの私の苦痛の第二の誕生が始まつたのである。そして、それが再び生命と希望の城廓を攻圍するべく威嚇してゐたのである。其處で私は數年の間、オレステースの寢臺にさまよひ出た如き、醜く、色青ざめた幻影に苛めさいなまれたのである。そして更に不幸なことには、萬人にとつて休息であり、回復であり、彼にあつては特にその傷いた心と、襲はれたる頭腦に對する祝福された香油の如きその睡眠が、私の最も苦しい呵責として私を訪問した。かくの如く私は自分の慾望に於て盲目であつた。しかし、若し或る帳が人間の醜げな視覚と彼の將來の災厄の間に差しはさまれるとすれば、その同じ帳が、彼からそれ等の慰藉をも

隠すのである。そして恐怖されてゐなかつた悲哀が希望されなかつた慰藉に出合ふのである。であるから、恰も、オレステースの苦しみに當つてゐた私は、(唯だ彼の激動せる良心を除いて)、彼の扶助に悉く與つてゐた。私のエウメニデースは彼の如く、私の枕元にゐた。そして帳を通して私を見つめた。しかし、其處には私の枕元を見守り、或は眠りに抵抗して、耐へ難き夜の看護に盡す私のエレクトラがゐた。汝愛すべきマアガレット、わが後年の親愛なる遺連れよ、汝は私のエレクトラであつた！そして心の高潔なる點に於いても、又は永く苦しめる情愛に於ても、恐らく一英人の妻は希臘の姉妹に優るとも劣ることはなかつたであらう。なぜなら汝は親切な、謙遜の勤務、最もやさしき愛情の卑しき勞役に服し——數年の間、不健全なる露を額から拭ひ去り、或は熱を以つて焼きつく如き唇をうるほさうとは夢にも考へてはゐなかつたのである。或は又汝自らの平和な眠りが、永い間の同情から、度々私に、"Sleep, no more" (最早、眠る勿れ) を命じたさまんくの幻影や朦朧たる敵との恐ろしい鬭争の光景を以つて毒せられた時すら、——その時すら、汝は何等の苦情不平をも訴へず、或はかの昔エレクトラがなせると同じく汝が天使の如き微笑を消したり、汝の愛の服務から逃れようとはしなかつた。かのエレクトラすら、身は希臘の婦人、王の娘でありながら、時に歎き、彼女の顔を衣の中に隠したではないか。

しかしこれ等の禍は過ぎ去つた。そして汝は我々兩人にとつて痛ましい時代のこれ等の記録を、最早かへ

らざる醜惡な夢の物語として讀むであらう。兎角して、私は再び倫敦に來た。そして再び夜毎にオックスフォード街の高臺を歩いてゐる。そして屢々、私が種々の心勞に壓伏され、あらゆる私の哲學と汝とに慰藉を求めるとき、私は汝から三百哩かけ離れてゐることを考へ、かの陰慘たる三ヶ月の長さを思ひ出す、——私は、月明き夜、オックスフォード街より北に走る街々を眺め、わが若き日の苦悶の叫びを回想する。——そして汝が獨りかの同じ谷間に、十九年以前、わが盲目なる心があこがれたその同じ家に主婦として住ひつつあることを思ひ、私は、たとへ盲目にもせよ、或は近頃の風にまき散されたものにもせよ、私の心を鼓舞するものは、なほ遠き昔に交渉を有し、若し、他の意味から讀まれるなら是認されるかも知れないと考へてゐる。——そして、若し私が私自身を許し、再び幼年期の無力な願望にかへるなら、私は再び、北の方を打眺め、私自身に對し『お、自分に鳩の翼があつたなら——』と云ふであらう。そして汝の善良優美なる性情に信頼して、私はわが若き日の叫びの他の後半を付け加へ『私は慰めを求める爲め、あすこに飛んで行くのだが』と云ふことが出來たかも知れない。

阿片の愉快

私が初めて阿片を飲み始めたのはかなり以前のことである。若しそれが私の生涯に於ける些細な出來事であつたなら、私はその月日などは忘れてしまつたのかも知れない。しかし主要な出來事は忘れらるべくもない。そしてそれに關聯した種々な事情から、自分の記憶する處によれば、それは、千八百〇四年の秋に歸せられなければならぬ。その頃、私は倫敦にゐた。私が大學にはひつて以來初めて其處に來たのであつた。そして、私の阿片入門は次のやうな風にして起つた。早い頃から、私は少くとも一日一回冷水で頭を洗ふ習慣を持つてゐた。すると或時、私は突然、齒痛に捉へられた。私はその原因をなにかの拍子で、暫時その習慣を中止してゐたことに歸してゐた。さう考へて私は寢床から飛び出して、冷水のはひつてゐる金盥に私の頭を浸けた。そして頭髮の濡れてゐるままで、眠つてしまつた。翌朝、云ふまでもなく、私は目を醒すと激しいリウマチ性の痛みを頭や顔に覺えた。それから、二十日許りと云ふものはオチ／＼する事も出來なかつた。多分二十一日目だつたと思ふ。或る日曜日に、私は通りへ出た。と云ふよりは寧ろ私の苦痛に耐へないで、別段の目的もなく、走り出したのである。偶然、私は阿片を聽めた學校友達に出合つた。阿片！ 想像を絶した愉快と苦痛の恐ろしい原動力！ 私はそれに就いてはマンナやアンブロジーに就いて耳にした以上になにも知らなかつた。その時それは如何に無意味な響きであつたらう！ それに反して今ではそれが私の心に如何に嚴肅な諧音を響かせることよ！ 悲しい、そして幸福な追憶の心を慄なす振動！ しばらく、これ等のことを省る時に、私は或重大な神祕的意義がその時と、場所と初めて私にオーピヤム・イータ

61

アの樂園を開いた人間（若し彼を人間だとしたなら）とに關聯する最も細密な事情に附隨してゐることを感
じる。それはじめじめして不愉快な日曜の午後であつた。われ／＼の地球上で、倫敦の雨降りの日曜位ド
ンヨリした光景を示すものはあるまい。私の歸途はオックスフォード街に横つてゐた。そして“the steady”
Pantheon（とウワズブス氏は懇ろにそれを呼んだが）の傍に私は一軒の藥種屋を見た。その藥種屋は——
天樂の無自覺な支配者よ！——恰かも雨降りの日曜に同情してゐるかの如く、愚鈍な顔つきをしてゐた。
恰度、人間の藥種屋が日曜日に期待されてゐるやうな顔付をして。そして私が阿片丁幾をくれと云つた時に
彼は普通の人間が誰れでもやるやうにそれを渡した。そして更に、私の與へたシリングに對して、ほんとう
の木の手斗から出したほんとうの銅の半片であるやうに思はれたものを私に返した。このやうな人間らしい
徴候にも拘らず、彼はそれ以來自分の心に、私自身に對する特別な使命を帯びて地上に遣はされた不滅の藥
種屋が天福を授けてくれる幻影として存在した。そして、かくの如く彼を考ふる確信を愈々自分に與へた譯
は、自分をその次に倫敦へ來た時、私は例の莊嚴な神廟の傍に彼を探したが、彼を見出し得なかつたからで
ある。そして彼の名前（若し彼が實際持つてゐたとしても）を知らなかつた私にとつては、彼はその肉體を他
に移轉したと云ふよりは、寧ろオックスフォードから消え失せたやうに思はれた。讀者は彼を地上の藥種
屋以上に考へないでも、それは御勝手だ。恐らくさうなのかも知れない。しかし私の信仰はそれ以上だ。私

は彼が消滅したか、蒸發したと信じてゐる。だから、自分は、初めてその天上の藥を自分に齎した、時と、
場所と、者と共に、人間らしい記憶を結びつけたくはないのである。

私が宿に着いた時、私が早速、指定された分量を取つたものと想像されるかも知れない。私は阿片を飲む
秘術、秘傳に就いては必然に無智であつた。そして、その時は、あらゆる不利な状態の下に、それを取つた
のであつた。だが、兎に角、自分はそれを飲んだ。——そして、一刻も經たないうちに、オー！ どうだら
う！ なんと云ふ急激な變化だらう！ 内部精神の最低の深みよりの高揚！ 私の心内にひらかれた世界の
天啓！ 私の苦痛の消え失せたことなどは、今の自分の眼には殆んど取るにも足りないことであつた。——
この消極的な効果は私の前に開かれた絶大な積極的効果——かくの如く突如として示現されたる聖なる歡樂
の深淵中に吸収されてしまつたのであつた。此處にあらゆる人間の苦患に對する萬病藥——*Счастливый напиток*
——があつた。此處に、哲學者等が數代の間論議した幸福の秘訣が一朝にして發見された。幸福が今では一
片で買はれ、短衣のポケット中に携へられるかも知れない。輕便な法悦が一ポイントの瓶の中に詰め込まれ
るかも知れない。そして心の平和の幾ガロンかが郵便馬車で郵送されるかも知れない。だが、私がこんな物
の云ひ方をすれば、讀者は私が戯談を云つてゐるのだと考へるであらう。そして私は誰れでも長く阿片と交
渉してゐるものは笑はなくなるだらうと云ふことを確かめることが出来る。その愉樂すら、沈痛嚴肅の色を

帯びて来る。そしてオビヤム・イータアは、その最も幸福な状態に於ても T. Allegro の性格で彼自身を現はすことは出来ない。その時すら、彼は II Penseroso の如く物を云つたり考へたりする。しかし、私には自分自身の悲境の最中にも時々ふざける甚だ非難すべき癖がある。そして私が或力強い感情によつて防止される時でもなければ、恐らく私はこれ等の悲痛歡樂の年代記中にあつてすら、この無作法な常習の罪に落ち入るであらう。読者はこの點に於ける私の薄弱な性質を少し宥してくれなければいけない。そして私はなるべくそんな事に耽らないやうにして、實際はさう輕浮でもなく、虚名を傳へられてゐる程さうドラウジイではない阿片の如き題目に適するやうに、眠氣を催うさない限り、努めて嚴肅にならうと思ふ。

そして、先づ最初に阿片が肉體に及ぼす効果に就て一言したいと思ふ。何故なら、これ迄、阿片の問題に就いて書かれた事は、それが土耳其に於ける旅人等（それ等の虚言の特權を大昔からの標利として、辯護するかも知れない）によつて書かれたにせよ、或は ex cathedra（椅子によつて）書く醫學の教授連によつて書かれたにせよ、私はそれに對して唯だ一ツ虚偽！ 虚偽！ 虚偽！ と力強い批判の言葉を發することが出来る。私は或時、本屋の店を通り過ぎて、その諷刺的な著者の頁から、これ等の言葉を捉へたと記憶してゐる。——『この頃になつて私は倫敦の新聞が少なくとも一週間に二度、即ち火曜日と土曜日に、充分信頼出来る程度でホントのことを書くと云ふことを確信するやうになつた——即ちそれは破産者の名簿が載る時で

ある。』同様に私はこれまで、阿片に関する或眞理が世界に向つて陳述されたことを、決して否定するものではない。かくして繰り返し、學者によつて肯定された處によれば、阿片は黒づんだ蔭色をしてゐるものだと云はれてゐる。これを——注意してもらひたい——私は承認する。第二にそれは寧ろ高價だと云はれてゐる。これも、自分は承知する。なぜなら、その頃、東印度製の阿片は一磅で三ギニイ、土耳其製は八ギニイであつた。そして、第三に若し汝が澤山それを嗜べるなら、十中八九は——規則正しい習慣の人間にとつて特に不愉快であることをしなければならぬ、——即ち死ななければならぬと云はれてゐる。これ等の重しい前提は、悉く奇妙ではあるが、事實である。私はそれ等を反駁することは出来ない。そして、それは過去に於て眞理であつた如くこれから推薦せらるべきものであらう。しかしこれ等の三ツの定理もつて、私は從來、阿片問題に關し、人々によつて蒐集された智識の庫を傾け盡したと信ずる。そして、價値ある博士等は、其處になほ進んで發見の餘地ある如く思はれる時に、傍觀して、私如き者を、前に押し出し、この事に関する講義を敢へてなさしめるのである。

それから、先づ阿片に就いて云々する人々は、大抵、形式的にか、或は偶然にか、阿片が醉狂状態を生ずずるとか生じ得るとか云ふ説を口にするものだが、それは遽かに首肯することは出来ない。さて、讀者よ、阿片の如何なる分量も醉狂状態を起すものではないと云ふことを、君自身 neo Pericles（私にかけて）確め

給へ。(普通 *Tactatum* ——ロオダナムと呼ばれてゐる) 阿片丁幾は、若し我慢してそれを澤山飲む人があれば、たしかに酔つ拂ふかも知れない。しかし何故か？ それは多量の酒精を含んでゐるからで、多量の阿片を含んでゐるからではない。しかし、生のままの阿片は、——私は断然肯定する、——アルコールに依て生ぜられると同様の肉體状態を少しでも生ずることは不可能なのである。そしてそれは度に於てのみではなく類に於いてすら不可能である。それは單にその効果の量に於いてばかりでなく、質に於いて全然異つてゐる。酒によつて與へられる快樂は常に上向的で、危機状態に接近し、その後で下向する。しかし阿片のそれは、一度生じられると、八時間乃至十時間同一状態を維持する。第一のは、醫學上の専門語を借用すれば、急性の場合で——第二のは慢性の愉快である。一つは炎^{ほら}であり、他は不動均一の暗光である。しかし、主要なる差異は此處にある。酒が心的諸能力を攪亂するに反し、阿片は(若し適當にもられるなら)それ等の間に最も精妙な秩序と律法と調和とを生ずる。酒は人より、自若を奪ひ、阿片は大にそれを強調する。酒は判断を亂して、暗くする。そして飲酒者の侮蔑、稱讚、愛憎等に對して異常の光輝と、潑刺たる高揚とを與へる。阿片は、これに反して他動、受動のあらゆる能力に對して、沈靜と均衡とを傳へる。そして一般の氣質及び道德的感情に關しては、單に判断によつて承認され、恐らく原始或は洪水以前の健康な肉體的組織に常に附隨するかも知れないやうな、その種の活力的曖昧を與へる。かくして、たとへば、阿片は、酒の如く、

心や慈悲ある情愛に或伸張を與へる。この著しい差異のほか、なほ酩酊にはそれに伴ふ親切心の突然の發展があるが其處にはいつでも多少たわいもない感傷的性格が伴つて、傍觀者の侮蔑にそれを曝すのである。人が握手をし、永遠の友誼を誓ひ、そして涙を流す、——どんな人間でも何故だか知らない。そして感情的な人間は明らかに有頂天になる。しかし、阿片によつて起こる仁愛的感情の擴張は熱病的な發作ではなく、元來正しく善良であつた心の衝動を攪亂して、それと争つた深く根ざした苦痛の焦燥を取り除かれた上に自然と心が回復するその状態への健全な復歸である。酒でさへ、或人々にとつては、或點迄、寧ろ智を高め確かめる傾向があるのは事實である。今迄決して大酒家ではなかつた私自身は六杯の酒が有効に諸能力に影響した事を常に發見した——意識を緊張し、輝かし、——そして精神に“*ponderibus librata suis*” (それ自身の重力で支へられてゐる) 感情を與へた。そして、普通の言葉で云へば、あの人は、酔つ拂つたふりをしてゐると云はれてゐるが、これは確かに馬鹿くしい言ひ草である。何故なら、反對に、たいていの人々はシラフの時、面を被つてゐる。そしてかれ等が酔つてゐる時こそ(或老紳士が *Atharnensis* の中で云つてゐるやうに) 人間は *exactly the reverse of being sober*——かれ等自から、其性格の眞の容貌を表はすのである。それは確かにかれ等自身を伴つてゐるのではない。しかしなほ、酒は絶えず人間を醉狂と無法の斷崖に導く。そして或點を超えてそれは確かに智的エネルギーを飛散せしめる。しかるに阿片は常に激動せしめられたも

のを調へ、攪亂せしめられたものを集中するやうに思はれる。要するに、一言にこれを纏めれば、酩酊せる人は、單に人間的なものや、餘りに屢々彼の性質の獸的方面を、優越に喚起する状態にあることを感ずるにひきかへ、阿片愛用者（私は何等疾患の苦しみもなく、微かな阿片の影響をも受けてゐない人を指して云ふのである）は彼の神性が最高の位にあることを感ずるのである。即ち、道義的性情が曇りなき靜平な状態にあつてその上に莊重な智力の巨光が照り輝いてゐるのである。

これは阿片問題に關する眞守の教義である。私はその寺院に於ける唯一の信徒であることを私自身承認してゐる——私はそのアルファでありオメガである。しかし記憶せられなければならないことは、私が大きな深い自分自身の經驗の立脚地から話してゐると云ふことである。しかるに、從來、少なくとも阿片を論じたと云はれてゐる人々はたいいて非科學的の著者である。そして *Patent Medicines*（藥材）の上から、明白に書いてゐる人々すら、かれ等がそれに就いて表現する恐怖から、その作用に關するかれ等の實驗的智識が皆無であることを證明してゐる。しかし、私は阿片の狂醉力に對して證明を與へた人間にひとり出遇つたと云ふことを正直に承認したいと思ふ。そしてそれは私自身の非輕信性をさへ揺めかした。何故なら、彼は醫者であり、且又自から大に阿片を飲んだ人であつたから。私は或時、偶々（自分が聞いたので）彼の敵が政治に關して出鱈目を云つたと云ふので彼を攻撃した時彼の友人が彼の爲めに辯護して、彼がいつでも阿片で酩酊

してゐると云ふことを暗示したと云ふ話は事實かと尋ねてみた。成程、その非難は *Prima Leve*（一見）必ずしも無茶ではないが、その辯護は無茶だと自分は云つた。ところが驚いたことには、彼は彼の敵の云つたことも友達の云つたことも兩方正しいと主張した。『私は出鱈目を云ふのです。そして次に、主義があつてとか、或は何にか利する處があつて、出鱈目を云ふものではないと云ふことを主張したいのです。ですが、單にまつたくです、——（と彼は云つた。）單にまつたくです、——その單にまつたくです、——（それを三度以上も繰返しながら）私が阿片を飲んでゐたからです、しかもそれを毎日。』と彼は云つた。私はそれに答へて、彼の敵の確説が、このやうな立派な證明の上に立てられてゐる上に、それに關係してゐる三人が悉くそれに一致してゐるところから見ても、最早それに就いて疑ふ餘地はないやうに見えるが、その辯護に對しては何處迄も反對しなければならぬと云つた。彼は進んでその事柄を論じ、彼の理由を披瀝した。しかしその人自身の職業に關する點に就て誤つてゐると云ふやうな推測をしなければならぬ議論を追求することは如何にも無作法に思はれた。で、自分は彼の議論の仕方に充分反駁の餘地があると思はれた時でさへ彼を壓迫しようとはしなかつた。それに『何等有利の目的もなく』無意味なことを云ふやうな人は、議論上反對者としても、答辯者としても、最も愉快な相手でないのは云ふまでもない。しかし、かなりな評判のあつた或醫者の權威は自分の偏見に對して重いものに見えるかも知れないことを私は告白する。しかし、なほ自分は

一日七千滴と云ふ彼の最大限より更にすぐれてゐた私の経験を辯護しなければならぬ。そして醫者が酩酊特有の徴候を知らないと思像することは不可能ではあるが、しかも自分の氣付いたことは、彼が論理的誤謬に落ち入り、酩酊と云ふ言葉を非常に廣い範圍に使用し、或徴候を伴ふ特殊な興奮の發想として、それを制限する代りに、神經の興奮のあらゆる様式にそれを適用してゐるのではないかと云ふことであつた。或人は又自分の聽いてゐる處で、あの人達は綠茶に酔つ拂つてゐるのだと主張したことがあつた。そして、こゝには又自分がその人の職業上の智識に對して非常な尊敬を抱く理由を有してゐる或倫敦の醫學生は、或病氣から回復しかかつてゐる患者がピフテキに酔つ拂つたと云ふことを自分に確めた。

阿片に關するこの第一の主要の誤謬にあまり多く拘泥してゐたから、私は極めて簡単に第二、第三を指摘しよう。それは阿片によつて生ぜられた精神の昂揚は、それに比例する消沈によつて必ず伴はれるばかりでなく、阿片の自然の直接の結果すら、心身の麻痺、沈滞を來すものと云ふことである。これ等の誤謬の第一は單に否定するだけで、自分は満足したいと思ふ。そして、十年間、私は間を置いて阿片を飲んだが私が自分自身にこの贅澤を許した次の日はいつでも異常に元氣な日であつたことをわが讀者に確めて置く。阿片を嗜べる習慣に續く、或は寧ろ（我々が土耳其のオピウム・イータアの描いてある多くの畫を信用するとすれば）それに伴ふ麻痺状態をも亦自分は否定する。確かに、阿片は麻痺劑の項目の下に分類される。そして

それはこのやうな効果をしまひには生ずるかも知れない。しかし、阿片の第一の效果は常に最高の度で、組織を昂奮刺戟するにある。其作用のこの最初の程度が、私の飲み習ひの間、いつまでも自分に續いた。時には八時間以上にも渡つた。だから、若し阿片愛用者が一回分の藥の效能（醫學的に云へば）が、彼の睡眠の上にもその麻痺的影響の全重量を現すやうにそれを調合しないならば、彼自身の誤りてなければならぬ。土耳其のオピウム・イータア等が、同数の騎馬像のやうに丸太の上の間拔けな顔をして腰を掛けてゐるのは如何にも馬鹿氣たやうに思はれる。しかし讀者はその程度で、阿片が英國人の能力を愚鈍にすると恐らく判斷するかも知れない。私は（その問題を議論的によりも寧ろ説明的に取り扱つて）私自身が一八〇四年から一八二二年の間、倫敦で度々阿片オピウム・イータアの夕をどんな風に過したかを描いて見よう。それによつて少なくとも阿片が私を動かして、孤獨を求めさせたり、不活潑にさせたり、或は土耳其人に歸せられた自己錯雜の麻痺状態に陥らせたりしなかつたことが見られるであらう、私はこの物語を氣狂ひ熱心家、或は幻覺者と云はれる覺悟で書く。しかし自分はそんなことはなんとも思はない。私が讀者に願ふ處は、私が非常な勉強家で、自分の時間の大部分を擧げて烈しい學問に耽つたと云ふことを心に留めてもらはなければならぬ。そして確かに自分は折々他の人々のやうに骨休めをする權利を持つてゐた。しかし、私はこれ等を殆んど稀れにするこゝとをさへ許さなかつた。

故のノーフォーク公は『此次の金曜日には天恵によつて、わしは酒に飲まれようと企ててゐる』とよく云つたものであつた。それと同様に自分も豫め、その時と度数を定めて、阿片耽樂を實行したものであつた。これは三週間に一度以上のことはメッタになかつた。なぜならその當時、私は(その後やつたやうに)毎日 "a glass of laudanum negus, warm, and without sugar" (砂糖ぬきのあつたかい一杯の阿片水)を命ずる程大膽にはなり得なかつた。否、私が前に云つたやうに、私はその當時、三週間に一度以上阿片を飲むことは稀であつた。これはいつも火曜日か土曜日の晩であつた。それに對する私の理由はかうであつた。その當時^{*}グラシニがオペラハウスで唱つた。彼女の聲は自分が曾て耳にしたうちで、際立つて自分に快いものであつた。私はかれこれ七八年もオペラハウスを覗かないので、今ではどんな風になつてゐるか知らないが、その當時は倫敦で一夕を過す公衆の娯樂所としては、最も愉快な場所であつた。一人前、五志^{レリッシュ}拂へば機數に這入れた。そこは芝居の土間よりもズットうるさくなかつた、管絃樂^{管絃樂}が英國のそれに比べて遙かに美しく莊麗であつた。實際、白狀すれば、英國作曲は、ヤカマシイ樂器が優勢なものと、ヴァイオリンが絶對の暴力を振ふのとで、自分の耳に快いものではない。合唱は神々しいものであつた。そしてグラシニが時々現はれて、たとへば、アンドロマケに扮し、ヘクトルの墓前で、彼女のパッションネートな靈魂をそそぎ出す時に、私は、果してかのオピウム・イーターアの樂園にはひつた如何なる土耳其人でも、自分の持ち得た快感の半ば

をも享樂し得たか否かを疑ふものである。しかし、實際、私はそれ等の未開人が英國の智識階級の人々に近づく愉快を味ひ得ると想像する時にかれ等を過分に尊敬するものである。なぜなら、音樂はそれを聴く人の稟性^{稟性}によつて、智的な快樂にもなれば、官能的な快樂にもなるのである。そして序に云ふが、その問題に就ては、かの Twelfth Night の中に歌はれてゐる美しい狂曲^{狂曲} (extravaganza) を除いては、あらゆる文學の中で音樂の問題に就て適當に云ひ表はされた一ツ以上のものを思ひ起すことは出来ないのである。それはサア・ティ・ブラウンの Religio Medici 中の一節である。それは主としてその莊重な點によつて著名であるが、又音樂的影響の眞の理論を指摘する點から云つて、哲學的價值を有してゐる。耳によつて音樂と交通すると想像するのは多くの人々の誤謬である。故にかれ等は其影響を蒙る上に於て純粹に受動的である。しかし、これはさうではない。愉樂の成立せられるのは聽覺の注意の上に働く精神の反應である。(Matter (取材)が官能を通じて來たり、Form (形式)が精神から來るのである)であるから等しく耳のいい人々がこの點に關して非常な差異を生ずるのである。さて阿片は一般に著しく精神の活動を增加する事によつて、必然にその活動の特別な様式を増加するものである。それによつて我々は粗雑な官能的音響の原料から、精緻な智的愉樂を建設する事が出来る。しかし、或友人は、樂音の連續が彼にとつて亞刺比亞文字の集合のやうであると云ふ。自分はそれに對して何等の觀念をも附隨せしめ得ない。觀念! my good sir? そゝには觀

念を形づくる場合がない。かくの如き場合に利用され得るその種のあらゆる觀念は代表的感情の言語を有してゐる。しかしこれは私の現在の目的に外れた問題である。今は、その精妙なハーモニイの合唱が、恰かも花紙スチールの断片の如く、私の眼前に過去の全生涯を展開したと云へば充分である。——それは記憶の作用によつて呼び醒されたものの如くではなく、音楽中に現在具體化されたかの如く思はれた。最早それを眺めることは苦痛ではなかつた。微細なるさまじくの出来事が霧の如き抽象中に、浮動錯綜してゐた。そしてその情熱は昂揚せられ、靈化され、莊重にされた。すべてこれが五志シヅメによつて享樂された。そして舞臺の音楽とオーケストラの他に、なほ私は、幕間に於て、私の周圍に群がる伊太利亞婦人によつて話される伊太利亞語の音楽を聞くことが出来た。なぜなら、機軸はたいてい伊太利亞人によつて占められてゐた。そして私はかの旅行家のウエルドがカナダで、印度婦人の美しい哄笑に傾聴せるが如き快樂を抱いてそれに聴き惚れた。なぜなら、諸君のある國語に對する理解が少なければ少ない程、諸君はその發音の調子の好惡に對して敏感なものである。このやうな目的から云つて、だから、私が貧弱な伊太利亞學者で、少しは讀めたにしろ、まるで話は出來ず、自分の耳にする言葉の十分の一をも理解し得なかつたと云ふことは私にとつて一つの役アドヴァンチ徳であつた。

これらが私のオペラ プレイチユアであつた。しかし私は別にもう一つの快樂を持つてゐた。そして、それ

は土曜日の日に限られてゐたので、時々オペラに對する私の愛と争つた。何故なら、その當時、火曜と土曜とは規定のオペラ・ナイトであつたから。この問題に關して、私は寧ろ曖昧であることを恐れてゐる。しかし、私は少なくとも、マリヌスが、プロクルスの傳に於ける、或は其他、著名の傳記家並に自傳家の如く、曖昧ではないことを讀者に確めることが出来る。この快樂が土曜に於いてのみ持たれ得ると自分は云つた。それなら土曜日は自分にとつて他の晩とどれだけの相違があつたのか？ 私は休息すべき労働を持たなかつた。受け取るべき給料も持たなかつた。だからグラシニを聴かうと云ふ呼び出しである以上に土曜の夜を何の必要があつて注意したのか？ いかにも、最も理論的な讀者よ、君の言は争ふべからざるものである。しかも人間の異なるにつれて、かれ等の感情を投げる溝の異なるは、今も昔も變らないのである。そしてたいていの人々は貧乏人に對するかれ等の興味を、主として、何等かの形式によつて現はされたかれ等の窮境、悲哀に對する同情によつて示す傾向がある。自分はその當時かれ等の快樂に同情することによつて、私の興味を發想するやうに傾いてゐた。私は貧困の苦痛を最近にかなり澤山見聞した。それは自分が記憶に留めようと思つた以上である。けれど貧乏人の快樂、かれ等の精神の慰安、そして肉體の勞役からの休息、これ等を省察しても決して抑壓にはなり得ない。さて土曜の夜は貧乏人の休息の主な、定期的循環の季節シーズンである。この點で最も敵視してゐる宗派が結合して、同胞の共同連鎖を承認する。あらゆる基督教國がその勞働から

休息する。それは他の休息に導かれる一つの休息であつて、全一日と二晩で勞役の再新から區別される。この故に私も常に、土曜の夜、自分も亦或る勞働の軛から免せられ、受け取るべき賃金を有し、樂しむべき慰安の贅澤に與るが如く感ずるのである。であるから、私の同情が全部濺がれる光景を、出来るだけ大仕掛に觀察する爲めに、自分は屢々、土曜の夜々、阿片を飲んだ後で、方向をも定めず又遠近をも問はず、凡そ貧乏人が土曜の夜、かれ等の賃金を落すべく集合する倫敦のあらゆる盛り場、その他をさまよひ歩いた。男とその妻と、時に子供等の一二名から成り立つ多くの家族が、立ちながら、かれ等の手段方針、或は財源の力若しくは家具の價値などを相談してゐるのに聴き耳をたてた。自分は次第にかれ等の願望や、やりくりや、意見などに親しむやうになつた。ときに不満の唸きが聞かれぬことはないが。大方は辛棒と希望と安靜とが、その顔色や、言葉に現されてゐる。そして一般に見て、少くとも、この點だけは、貧乏人が金持よりも遙かに哲學的である。——かれ等は癒しがたき禍、讀み得ざる損失と考ふるものに對してより、多く待ち構へた心置きのない服従を示してゐる。私は機會がある度に、立ち入つたと思はれない限り、かれ等の仲間入をした。そして論じられた事柄に對して自分の意見などを述べた。それはいつも賢明なものと思はれないにしても、寛大に受け入れられた。若し賃金が少々あがつたとかあがりさうだとか、或は四半斤のパンが少しさがつたとか、葱やバターがさがりさうだとか云ふ報告をきいた時に、私を喜んだ。しかし、若しその反對が

事實であつた時は、阿片によつて自から慰むる方法を引き出した。なぜなら（薔薇や、烟突の煤から無差別にその材料を引き出す蜜蜂のやうに）あらゆる感情を支配してマスターキー（Master Key）に適合せしめるからである。これ等の逍遙は時に自分をかなり遠方迄搬んで行つた。なぜなら、オビヤム・イータアは時の運動を觀察すべくあまりに幸福であるから。そして時に、航海上の原則に従ひ、北極星を眼あてに、故郷の方に歸航せんと企て、曾て遠洋航海に通過せるあらゆる岬灣を週航する代りに、西北の航路を求めんとする野心を抱いて、私は遙かにさまざまの小路や、曖昧な路地や、スフィンクスの謎のやうな袋道などの入り亂れた問題にぶつかつた。恐らくそれは無鐵砲な立ん坊をめんくらはせ、馬車屋の智慧を感亂さしたに相違ない。私は時々自分がこれ等の *terrore incognite*（未知の國）の最初の發見者でなければならぬと信じないではゐられなかつた。そして近頃出た倫敦の海關にそれ等が乗せられてゐるか否かを疑つた。しかし、すべてかくの如きことに對して、自分は後年、したたかの價を拂つた。その時人間の顔が私の夢の中に暴力を振ひ、紛糾錯綜せる倫敦街上の歩行が戻つて來て私の夢を惱ました。それは勿論、道徳的な或は智力的な困惑せる感情が伴はれ、理性を攪亂し、良心に悔恨と痛苦とを齎した。

かくして、私は阿片が必然に麻痺と倦怠を生ずるものでないことを示した。それは、反つて屢々自分を多くの市場若くは劇場に導いた。しかも、市場や劇場は、オビヤム・イータアが最も神聖な享樂の状態にある

時、さまよひ歩く適當な場所ではない。その状態に在る時、群集は彼にとつて一種の壓迫となる。音楽すらも、あまりに肉感的で下品に思はれる。彼はそれ等の恍惚と深遠な幻想の必然の條件として靜寂と沈黙とを求め、それは阿片が人性に及ぼす王冠であり、總量である。あまりに多く黙想に耽り、あまりに少なく觀察する疾を持つ自分は、大學に初めて入學した時に、私が倫敦で目撃したさまざまの艱難苦痛に對して、あまりに多く思ひ耽つた結果、深い憂愁に沈みかかつてゐた。そして出来るだけ、それ等に抵抗しようと云ふ私自身の思想の種々な傾向を充分氣づいてゐた。自分は、實際、昔話にあるやうに、トロフォニオスの洞窟に這入つた人間のやうであつた。自分の求めた治療法は私自身を社會に突き出し、私の理性をたえず、色々の學問の上に働かせることであつた。しかし後年自分の快活な心持が確立された時、私は孤獨な生活に對する自分の自然の性癖に従つた。そして、當時、私は屢々阿片を飲みながらこれ等の幻想に沈んだ。たとへば夏の夜、明け放した窓の傍に坐つてゐる時、——その室から自分は約一哩程かなたの海を見下し、それと殆んど同一の距離にリヴァプールの大都會の眺めを恣にすることが出来た——その時、私は日没から日の出まで少しも動かうと云ふ意志なくチット坐り續けてゐたことなどが一度ならずあつた。

私は神秘主義だとか、ベームニズムだとか——靜寂だなどと云つて攻撃されるかも知れない。しかしそれは自分を驚かさなうであらう。弟の方のヴェンはわれ／＼の最も賢明な人間の一人であつた。そしてわが

讀者は彼が、その哲學的著作中にあつて、自分の半分も非神祕的であるか否かを見るがいい。——それなら自分は云つて見よう。それで自分は云ふ。かくの如き幻想中に起つた光景それ自身が稍々代表的なものであつたと云ふ事が度々私を驚かした。後に残したさまざまの悲哀や、墓場に滿ちた土を代表してゐた。そして、それはまだまつたく眼界の外に消え失せもせず、全然忘却されもしなかつた。鳩の如き靜穩に抱かれ、永久に而も靜かに揺蕩せる大洋はその時、自分を支配した心と情調とを表はすものであると云つても、不適當ではないかも知れない。その時、私は恰度、初めて人生の喧囂から高く離れて立つてゐたかの如く思はれた。騒擾と、熱病と、鬭争が停止され、休安が心の隠れたる重荷から、許され、あらゆる人間の勞役から休息する安息日が來た如く思はれた。此處に人生の行路に花咲く數多の希望が墓中にある平和と打ち解けた。天體の如く疲勞せざる智力の活動があつた。しかもあらゆる不安を脱却した翡翠の如き靜穩があつた。その沈靜は決して惰性の産物ではなく、無限の活動と無限の休息と平等偉大なる相反力の結果であつた。

オウ！ 正しく、精妙にして偉大なる阿片よ！ 決して癒えざる傷口に、或は『靈魂を誘うて反逆させる劇痛』に、貧者の心でも富者の心にも等しく慰安の香料を齎す雄辯の阿片よ！ 汝は汝の力強き能辯を以つて憤怒の目的を籠絡する。そして罪ある者には、一夜青春の希望を返へし、その手を血汐より洗ひ潔める。また誇ある者には

救はれざる悪業、雪がれざる侮辱

に短かき忘却を興へる。そはまた苦しめる無辜の勝利の爲めに、夢幻の法廷に偽りの證人を呼び出し、偽誓を惑亂せしめ、不正の法官の宣告を覆へす。——汝は頭腦の幻想から、闇黒の胸にさまよふの都市や殿堂を建設する。それ等はフイデイヤス及びブラキシテリースの藝術に優り、ピロン及びヘカトンピロスの莊麗を凌ぐ。汝はまた『夢見る睡眠の渾沌より』日光に永く埋められた美の面を呼び出し『墓中の汚辱』より潔められ、祝福されたる家族等の顔を呼び出す。汝はこれ等の賜物を人間に興へる。そして汝は樂園の鍵を所有する。オー、正しく、精妙にして、偉大なる阿片よ！

阿片痛感の緒論

感徳な、そして望むらくは、寛大な讀者よ、(なぜなら、わが讀者は悉く寛大な人々でなければならぬ。然らざれば恐らく、自分は、かれ等の禮讓を信賴するにはあまりに多く讀者をおびやかすであらう)、此處まで、私について來たところで、私は更に約八年程讀者に、前進して頂きたいと御願ひする。即ち、一八〇四年(前に私が阿片を初めて知つたと云つた時)から一八一二年にです。學校生活の數年が既に經過して

殆ど忘れられてゐるのです。學生帽は最早、私の顛顛を押しつけはしない。若し私の帽子なるものが、少しでも存在するなら、それは私自身のやうに幸福な熱烈な智識の愛好者である若き學者の顛顛を押しつけてゐると信ずる。自分は敢て云ふが、私の上衣は今頃、ポドレイアン圖書館裡の數千冊の名著と同一状態にあることであらう。即ち或勤勉な魚(フクロウ)に精出して熟讀されてゐることであらう。さもなくば、(彼の運命に就て自分の知つてゐる限りでは)どこかの大きな財藏所中に消え失せたことであらう。そこへは茶碗や、茶壺や、急須や、鐵瓶などが悉く消え失せた。(それ等よりも更に脆い酒杯とか、徳利とか、ベッドメーカーと云ふやうな器具は云ふ迄もない。それ等の茶碗によく似た現代の有象無象が曾て一度は所有せられてゐたことを私に思ひ出させる。しかしその死や、最後の運命に就いては、私も大抵の大學の連中が、興へ得ると同様、僅かに朦朧たる推測の歴史を興へ得るのみである。)六時の朝の禮拜に歓迎されない集合を鳴り響かす寺鐘の迫害が最早私の睡眠を障げない。その鐘撞きの番人は美しい鼻(銅の象眼のはひつた青銅色の)を持つてゐた。そして、私は意趣返しに、衣物を着換へてゐる間、その鼻に對して澤山の希臘短嘲詩を作つたが、その男も今では死んで、人惱ませを止めてしまつた。彼のガンガン鳴らす辭から随分苦しめられた自分と同様の多くの人達も、今では彼の過失を大目に見ることに一致して、彼を宥してやることであらう。鐘そのものに對してさへ、私は今では同情を表してゐる。勿論、鐘は依然として日に三回鳴り響いて、多くの立

派な紳士達を惱まし、かれ等の平和な心境を攪亂してゐるに相違ない。しかし、自分にとつては、一八一二年の此年に、最早、その頼み難い聲を顧慮しない。(私はそれを頼み難いと云ふ。なぜなら、悪意の洗練からか、今では人を或會に招待でもするかの如く美しい銀のやうな音を鳴してゐるからである)その音調は、實際、最早、自分に届く力を持つてはゐない。風よ、かの鐘自身の悪意が欲するままに吹け。私は今ではそれから二百五十哩も離れた深山に埋もれてゐるのである。そして自分は山の中で何をしてゐるのか? 阿片を飲んでゐるのである。しかし、その他には何を? 云ふ勿れ、讀者よ、一八一二年と云ふこの年には、數年以前からと同様、私は主としてカント、フイヒテ、シェリンク等の著書によつて、獨逸哲學の研究に耽つてゐたのである。そして、どうして、どんな風に自分は生活してゐると云ふのか? つまり、自分がどんな階級或は種類の人間に屬してゐると云ふのか? 私はこの節、即ち一八一二年に或茅屋にタッタ一人の女中 (boni soit qui mal y passe) — わるくとも人には恥あれ)と住んでゐるのである。その女中は、私の近隣の人々の間では、'House-keeper'の名で通つてゐるのである。そして、學者で教養ある一個の人間であり、その意味の紳士として、私はかの紳士連と呼ばれる曖昧な團體の無價値な一員として敢て自分を區別するかも知れない。それは恐らく、半ば自分が指定した根據から、又半ば明らかな職業又は仕事を持たないことから、私が自分の私有財産で生活してゐるに相違ないと云ふことが正しく判斷せられる。私は隣人によつてさ

う云ふ階級と見做されてゐる。そして、近代英國の禮儀によつて、通常手紙には *Respectable* (殿) と云ふ尊稱を奉られる。しかし、恐らく、嚴格な紋章家の解釋に従へばその光榮ある尊稱に對しては、殆んど口を出す資格がないのである。しかし、普通の評價によれば、私は X. Y. Z. 殿である。と云つても決して *Just, so it Peace* (治安判事) でなければ、*Chief Justice* (裁判所記録保有掛) でもない。私は結婚したのか? 未だである。そして自分は未だ阿片を飲んでゐるのか? 土曜の晩に。そして、恐らくかの一八一〇四年の『雨降りの日曜』『立派なパンシオン』『天福を授けた藥種屋』以來、恥づかしくもなく、平氣でそれを續けてゐたのであらうか? さうかも知れない。そして結局、阿片愛用の結果として、私の健康はどうなのか? 讀者よ、感謝します、かなり丈夫です。産褥にゐる御婦人の言葉を拜借すれば *'As well as can be expected'* (御蔭様でまつたく、豫期通り丈夫) です。實際、若し敢てほんとうに簡単な事實を云へば、醫者の理論を満足させる爲には、自分が病氣でなければならぬ筈なのである。しかし、私は一八一二年の春位、今迄の中で具合のいい時はなかつたのである。私はクラレット、ポット、若しくは「特別なマディラ」を善良な讀者諸君が八年のある一定の時期に恐らく飲んだか、若しくは飲まうとしたか、その孰れにしても、その分量は、諸君の生活が自然である間、私が一八一〇四年から一八一二年の八年間にかけて吸んだ阿片と同様、諸君の健康に別段の障害を及ぼさないことを希望するものである。それで、諸君は再び「アナスタシウス」から醫學

上の忠告を受けることの危険を見ることが出来るかも知れない。自分はよくは知らないが、神學や法律に關しては、彼は安全な相談相手であるかも知れない。しかし醫學上の事柄では駄目である。それは自分のやつたやうにドクタア・バカンに相談する方が遙かに優つてゐる。なぜなら私は決してかの尊敬すべき人のすぐれた忠告を忘れることが出来ない。そして私は『特に二十五オンス以上の阿片を飲まないやうに注意した』。この藥劑をかくの如く適度の節制を以つて用ゐたことは、少なくとも(一八一二年迄)自分がかの阿片の寛大に乗じてそれを亂用した人々の上に蓄へられる恐るべき復讐を知りもせず、疑ひもしなかつた主なる原因であると思像してゐる。それと同時に、忘れられてならないのは、これまで自分は單に一個のディレクタント・オピウム・イーターであつたことだ。八年間の實行さへ、僅かにそれに耽るに充分な間隔を置くと云ふ注意を取つただけでは、阿片を自分の日常缺くべからざる食品の一種となすに充分ではなかつた。しかし、今や異つた時代に來た。讀者よ、どうか、一八一三年に進んでください。われ／＼が今しがた後にしたその年の夏に、私は、ある非常にメランコリイな出來事と結びついた精神の沮喪から、いたく身體の健康を害した。この出來事は、私の目下の題目には、あの爲めに生じた病氣以外には何の關係もないので私はそれ以上特に注意を引く必要がないのである。一八一二年に於けるこの病氣が一八一三年のそれと何等かの關係を有してゐるかどうかを自分は知らない。兎に角、その後の年に私は最も恐ろしい胃の痙攣に襲はれた。それはすべ

ての點から云つて、青年時代に自分を苦しめたものと殆んど同一である。そしてあらゆる昔の夢の復活が伴はれた。これが私の物語の要點である私の自己辯明に就いてはこれから先の一切がその上にかかつてゐると云つて差支ないかも知れない。そして此處に私はディレンマの中に困惑する自分自身を發見する。——私は自分の疾患や、それと争ふ話などを詳細に語つて、最早自分がその痙攣や不斷の苦痛と争ふべき無能の事實を充分確立したりして、讀者の忍耐を汲み盡さなければならぬ。然らざれば、私の物語のこの批評的部分を軽く上滑りして、私は讀者の心の上に殘されたより、強き印象の恩恵を棄てなければならぬ。そして、私が阿片愛用の始めより終りに至る迄、放縱な人間の安逸な自然の足どりで行つたと云ふ誤解に私自身を曝さなければならぬ。(其誤解はたいいていの讀者の心中に潜んでゐる素因である事は私も先刻承認してゐる。)これがそのディレンマである。其最初の角笛は、たとへ忍耐強き讀者の縦隊がいかに厚く排列され、たえず、新しによつて交代せられるとも、容易にそれを突き崩してしまふだらう。よつてそれは考へられるべくもない。殘る處は唯私が自分の目的に必然であるものを獨斷するのみである。そして、善良な讀者よ、私の獨斷する處は、私が、諸君の忍耐に私自身のそれとを犠牲にして、それを既に説明したものととして、私に充分な信頼を置いてもらひたいことである。それで私自身の忍耐と諸君に不快の念を與へまいとする遠慮とに免じて、諸君の正しい説を吐いて私を苦しめるやうな人の悪いことはしてもらひたくないと思ふ。否、

私が諸君にするすべてを、即ち、自分がどうにも抵抗することが出来なかつたのだと云ふことを信じてもらひたい。それを恩惠の一行爲として、卒直に信じてもらひたい。若しくは、單に慎重な態度として、なぜなら若しさうでないとしたら、改訂増補した私の阿片告白の次の版で、諸君を信じさせ、そして戰慄せしめるであらう。そして a force d'ennuyer (苦しませる爲め) 單に欠伸によつて、私は再び自分が適當と考へる獨斷を質問することから、すべての讀者を驚かすであらう。

それなら自分がこれを獨斷することを、再び繰り返さしめよ。——私が日毎に阿片を飲み始めた頃私はどうしてもさうしないではゐられなかつた。實際、後で私があらゆる努力が無用であると自分に思はれた時すら、その習慣を破ることに成功しなかつたかとか、私が盡した無数の努力が遠く及ばず、失はれた足場を再び除々と回復し得た力を更に強く持ちこたへることが出来なかつたと云ふやうな——疑問は私が撤回しなければならぬのである。恐らく私は辯解の或場合を造り出したかも知れない。しかし、自分は公明正大に口をきいてゐるのであらうか？ 私は自分の不斷の缺點として告白するが、私はあまりに幸福主義者である。私は自分自身及び他人の爲めに、あまりに多く幸福の状態を熱望してゐる。私は自他の區別に拘らず、充分な確信の眼を以て艱難に面を向けることは出来ない。そして將來の恩澤の爲め、現在の苦痛に抵抗することも出来ない。その他の事柄に就ては、マンチエスタアで綿の商賣に従事して、ストイック派の哲學を喋々す

る紳士達に賛成することが出来るが、この點だけは同意出来ない。此處では自分は折衷派(モダニスト)の哲學者の自由を取る。そしてオピウム・イータアの薄弱な状態に一層卑下して同情する感慙な、そして思慮ある流派を探し求める。それはチョーサーが所謂、*sweet meat to give abolition*、(赦罪を與ふる懐かしい人々)でかれ等の科する懲罰に或良心を示し、私自身の如き哀れなる罪人から、かれ等が強取する節戒の努力を示す人々でなければならぬ。私は自分の神經状態として、火にかけない、阿片と同様無慈悲な道德家を最早忍ぶことは出来ない。兎に角、道德改善の巡洋航海に克己苦行の大荷物を積み出すことを私に命ずる人は、その有望であることを私の理解にハッキリさしてもらはなければならぬ。私の年頃(三十六歳)では私が精力を大に節用しなければならぬと云ふことは想像され得ない。實際、私は自分の手元にある智力的勞働に對しては、かなりその不足を感じてゐる。であるから、何人に限らず、道德の絶望的冒險にその幾分でも乗船せしむるやうな苛酷な數語によつて私を戰慄せしめるやうなことはしてほたくないものである。

しかし、絶望的であるか否かは兎に角、一八一三年に於ける苦闘の結果は自分が今云つたやうなものであつた。そして、この日附から、讀者は規則的に確立したオピウム・イータアとして、私を考へるべきである。そして、その上に對して彼が或特別な日に阿片を飲んだか飲まないかを訊ねることは、彼の肺が呼吸作用をしてゐるか、彼の心臓がその職務を果してゐるかと云ふことを訊ねることである。——讀者よ、諸君は今、

私が何であるかが解るであらう。そして諸君は今では、『雪のやうに白い髪』の生えた如何なる老紳士も、『その毒薬の小さい金色の小器』を譲り渡すことを私に説き勧める機會を持たないであらう。否、私は、たとへ道徳家にしろ、醫者にしろ各自の實行方面の效能書と技倆とが如何なるものにもせよ、かれ等が若し私に阿片を斷つと云ふ四句齊やラマダンの野蠻な提出を始めようと思ふなら、私から何等の好意をも望んではならないと云ふことをすべての人に警告する。これが充分我々の間に理解されて、その時初めて、我々はこれから順風に乗じて帆走るであらう。さて、讀者よ、我々が始終坐つたり、その邊をブラ／＼してゐた。一八一三年から——、立上つて、どうか、もう三年向ふへ歩いて頂きたい。そこで幕を開けて見給へ、諸君はまつたく新な別人として私を見出すであらう。

誰れでも、貧乏人にしろ、金持にしろ、彼がその生涯中、最大幸福の日が何であつたか、そして、何故であつたかを我々に語らうと云ふなら、我々は必ずみんな——謹聴！ ママ——と叫び出すだらうと想像する。——最も幸福な日、と云ふことはどんな賢人でも指定するに非常に難かしいものでなければならぬ。なぜなら、凡そ人間がその一生を回顧するに當つて、しかく顯著な位置を占め、或は特に或日を撰んで幸福をふり濺いだ特權を有する出来事は、たとへ如何なるものと雖も、必ず持久の性格を帯び（その事件を離れても）數年に渡つてその同一の幸福を繼續して與ふるに相違ない。しかし、最も幸福な潔清式（*Justrium*）

或は最も幸福な年に對してすら、智識の抗議なしに指摘することが何人にも許され得るかも知れない。讀者よ、私の場合では、この年が、我々の今到達したところのものであつた。勿論それは更に陰惨な性質を帯びた年の間の挿句として立つてゐたものであることを私は告白する。それは（寶石商人の口扮を借用すれば）光澤燦爛の年であつた。そして暗鬱憂愁を極めた阿片生活の眞中に巍然として孤立してゐたのである。可笑しく聞えるかも知れないが、この少し以前に突然、何等著しい努力を用ゐずに、私の阿片の量が一日三百二十粒（即ち阿片丁幾の八千滴の相當）から、四十粒（即ちその八分の一）にまで減じた。忽然として、魔法の如く、私の腦に覆ひかぶさつてゐた最も深い憂愁の雲が、山の頂から立ち昇るのを自分は見たことがあるが、黒い水蒸汽のやうに、一日（Wednesday 一日一夜）の中に消え失せた。そして濱に打揚げられた船が

That moveth altogether, if it move at all,

動きさへすれば、諸共に動く

春の潮に漂ひ去ると同じく、その暗鬱たる小旗をひるがへして走り去つた。

さて私は今再び幸福になつた。私は今一日僅かに千滴の阿片を飲んだ。そしてそれがどうであつたか？ 後春が青年期を閉ぢるべく來た。私の頭腦は以前に變らず健康に働いた。私はまたカントを讀んだ。そして再び彼を理解した、若しくは理解した様に思つた。再びさまざまの愉樂の感情があたり隈なく廣がつた。そ

してオックスフォードからか、又ケンブリッジからか、乃至その他の何處からでも、私のみすぼらしい茅屋へ客に來ると云ふ通知があつたなら、私は貧乏人の力の範圍で出来るだけ、立派な待遇をもつてその人を歓迎したことであつたらう。賢人の幸福によし缺けたものがいくらあつたにしろ、阿片丁アピヤン幾だけはその人の欲しのままに飲ませることが出来たであらう、しかも金杯で。そして、今私はラウダナムを御馳走すると云ふ話の序に思ひ出したから、この時分あつた一寸した出来事を話さうと思ふ。それはツマライナイことではあつたが、讀者がやがて、再び私の夢の中で出遇ふことなので、それは想像以上に恐しく自分に影響した。或一人のマレイ人が私の戸を敲いた。英國の山の中に全體マレイ人が何用あつて來たのだから、自分には想像がつかなかつた。けれども多分彼は四十哩許り離れた港にでも行く途中ででもあつたのであらう。

彼の爲めに戸を開いた下婢は山の中で生れて、山の中で育つた若い娘であつた。その娘は勿論、今迄亞細亞風の服裝など見たことはなかつたのである。だから、彼の頭巾が少なからず、彼女を困惑させた。そして彼の英語に對する腕前が、彼女のマレイ語に於けるそれと全く同程度だと云ふことが解つた時、其處には、たとへ兩人が如何程考へが山程あつたにせよ、相互にそれを交換させるに當つて、超え難い溝があつたやうに思はれた。身體谷カミヤまつたその娘は、フト彼女の主人の有名な學識を思ひ出して（そして無論、地上のあらゆる國語の智識——それに月世界の分も一ツや二ツは、に對する信頼を私に與へてゐたので）、私の處にや

つて來た。そして、下になんだか惡魔のやうな者が來てゐると云ふことを私に告げた。彼女は明らかに私の術がその惡魔を家から追ひおどかふことが出来るものと想像してゐた。私はスグ下へ降りては行かなかつた。しかし私が降りた時に、偶然に出來上つてそれ自身を表現してゐた群像は、たとへ極めて精妙ではなかつたとしても、曾てオペラハウスのパレイによつて現された彫像とはまつたく異つた風に私の幻像や、私の眼を捉へた。勿論その外觀の複雑な事にはかはりがなかつた。臺所と云つても、壁の上に黒い木の鏡板があつて、それが時代と磨きがかかつてゐるので擬振ひに見えてゐたりして、臺所と云ふよりも寧ろ田舎座敷の入口と云ふ觀があつた。そこに例のマレイ人が立つてゐた。——彼の頭巾と白の煤けたダブ／＼のスポンとが黒い鏡板の上に浮き出てゐた。彼は彼女が味つて見たいと思つたよりも一層近く、その女の子に近く立つてゐた。勿論、彼女の持前の山の氣性が單なる畏怖の感情と激しく争つてゐた。その感情は彼女が自分の前の虎ヒョウ猫を眺めた時に、彼女の容貌に現はれたものである。そして、その娘の眞直に獨立した態度と一緒に美しい英國風の顔が海の空氣で光澤のあるマホガニイ色を被せられたマレイ人の淡黄な膽汁的な皮膚やその小さい物凄モノシロいキョロ／＼した眼や、薄い唇や、奴隸的の身振りや、崇拜と對照されたその圖より恐らく驚異に價する光景はあるまい。その驕猛な顔付をしたマレイ人の蔭に半ば隠れて、彼の後からコソソリついて來た近所の小屋の子供がゐた。そして今反りかへつて、頭巾と其下にある凄モノシロい眼を見あげてゐる處であつた。そして

一方の手は保護される積りで娘の衣物を捉んでゐた。東洋語に對する自分の智識は左程廣いものではなかつた——實際、知つてゐるのは大麥と云ふ亞刺比亞語と *maçion* と云ふ阿片の土耳其語の二語に限られてゐると云つてもよかつた。それも私が「アナスタシウス」から學んだのであつた。それに自分はマレイ語の字書も、アデルンクの *Mithridates* (それはいくらかの言葉を自分に與へてくれたらう) も持ち合せてゐなかつたので、イリアッドの數行を借りて彼に話しかけた。それは、自分の知つてゐる國語の中では希臘語が、地理的に見て經度の點で一番東洋に近いと考へたからであつた。彼は最も敬虔な態度で私を拜した。そして私がマレイ語だと想像した言葉で答へた。かうして私は隣人に對する私の名聲を傷けないですませた。なせなら、マレイ人はその秘密を裏切る何等の手段をも持たなかつたから。彼は凡そ一時間程、床の上で横になつてゐた。そしてそれから彼の旅を續けた。彼の出發に當つて、私は一片の阿片を彼に呈した。東洋人たる彼にとつて、阿片は親しいものでなければならぬと私は勝手に結論した。そして彼の顔の表情がさうだと云ふことを自分に確かめた。それにも拘らず、私は彼が突然彼の手を口の邊にあげ(小學生の言葉で云へば)三ツに分たれてゐる全體を一口にあはせて吞み込んだのを見た時には、稍々吃驚りしなひではゐられなかつた。その分量は充分三人の龍騎兵を馬ぐるみ殺すに足るものであつた。そして私はその可哀な人間に對して、ある恐怖を感じた。しかし、どうしようもなかつた。私は彼の孤獨な生活に對する同情から、その阿片

を彼に與へた。若し彼が徒歩で倫敦から旅行を續けて來たとすれば、少なくとも人間と思想の交換が出來たのは約三週間に相違ないと云ふ事を思ひやりながら。それに私は彼を捉へて、無理なりに吐瀉を飲ませ、我々が彼を英國の偶像に犠牲とするのではないかと云ふやうな驚怖の觀念を與へて待遇の法則を破らうなどとは思ひもよらなかつた。否、明らかに救済の方法はなかつた。しかしその後マレイ人の死骸が発見されたと云ふ事もさかなかつたので、私は彼が阿片に慣れてゐたのだと確信するやうになつた。そして、私は自分の計畫通り、漂泊の苦痛から一夜の休息を彼に與へて、彼の爲めに盡してやつたのに相違ないと考へた。自分が岐路にはひつてこの出來事を記した理由は、このマレイ人が(半ば彼が組み立てた繪畫的表現と、半ば私が數日、彼の幻影と連絡せしめた不安から)後に私の夢に固着して、彼自身より殘惡な他のマレイ人を伴つて來て、手當り次第に私を目がけて切つてかかり (*"a-mnok"*) として私を困惑の世界に導き入れたからである。——しかしこの挿話を棄てて、今、私は私の幸福な年の年に歸らう「幸福と云ふやうなわれ／＼のすべてにとつて重大な問題に就ては、どんな人間の經驗や、實驗にも喜んで傾聴するもので、たとへばそれが一個の農童ポロイで、人間のあらゆる苦樂の馴らされ難い地面を深く耕すことも出來ず、人心を啓發するさまざまの原理に彼の研究を導き得るとも想像しがたいやうな人間の場合でもさうだと云ふことは私の既に述べた處である。しかし、自分のやうに、固體、液體のいづれを問はず、その煮沸したると否とを問はず、東印

度製なると、土耳其製なるとを問はず、その幸福を求め、——この興味ある問題に對する私の實驗を一種のガルヴニイ電池に對するが如き態度を以つて試み——そして世界一般の幸福の爲めに、云はば、日々八千滴の阿片丁幾の毒液を私自身に注射した私、(恰度、同一の理由で、一佛蘭西の醫者は近日、癌腫を彼自身に注射した、或英國の醫者は二十年前、ペストを、そしてその國光か自分は知らないが、或人は恐水病を注射したと云はれてゐるが)——その私は若し何人でもさうだとすれば幸福の如何なるものなるかを確かに知らなければならぬ。(また知るものとして承認せられるであらう。)それ故、自分は此處に幸福の解剖を試みるであらう。そして、それを傳へる最も興味ある様式として、私はそれを教訓的でなく、自分がその間の年の間、毎夕を過した、その一夕の光景に包まれたものとして、記してみよう。その頃は、勿論日々に阿片液を飲んでゐたが、それは自分にとつて快樂の靈液以外の何物でもなかつた。これが終つたら、私は幸福の問題をまつたく棄てて、異つた問題——即ち阿片の痛苦——に移らうと思ふ。——

今、或都會から十八哩許り離れた谷間に一個の小屋が立つてゐるものと假定せしめよ。——その谷はさして廣くはない。長さが約二哩程で幅は平均一哩の四分の三位である。その食糧の恩澤は周圍に住んでゐる家族全體が恰かも、更に大きい家庭を成立してゐるかのやうである。それは諸君の眼に親しみがあつて、多少諸君の性情に興味を興へる種類のものである。山々は眞の山々で、高さは三四千呎なければならぬ。そして

その小屋も實在の小屋で、(機智ある作家の解するやうに)『二個の馬車小屋のある茅屋』であつてはならない。それは、實際、(私はどこまでも實景に忠實でなければならぬ)花の咲いてゐる樺木に蔽はれてゐる由塗りの小屋でなければいけない。その樺木は墻壁の上に絶えず花を咲かせ、——五月薔薇に始まり、素馨に終るまで、春、夏、秋のあらゆる月を通じて、窓側に咲き亂れなければならない。けれど、春、夏、秋は姑らく置き、冬をして其最も嚴肅な容貌をつくらしめよ。これは幸福學に於ける最も重要な點である。そして私は人々がそれを輕視し、冬の過ぎ去り行くを祝すべき事柄であると考へ、冬の來る時に、寒氣の烈しからざることを願ふのを見て驚くのである。反對に、私は年々天空が我々に興へ得る限りの雪や、霰や、霜や、嵐を祈願するものである。確かにすべての人は冬の爐邊に伴ふ神聖な快樂に氣付いてゐることであらう。四時の燈火暖かい爐邊の敷物、茶、茶を入れるうるはしき人、閉ぢられた窓、床の上の一杯に垂れ下つてゐる窓掛、そして戶外では雨と風の荒れまわつてゐる音が聽える。

And at the doors and windows seem to call,

As heav'n and earth they would together call;

Yet the least entrance find they none at all,

Whence sweeter grows our rest secure in mussy hall-Castle of Indulgence,

そして戸や窓の處で呼んでゐるやうに思はれる。

天地をも諸共に巻きこんでゐるけれど僅かの入口をもかれ等は見出し得ず。

それが爲め厚き廣間の中の安全なる。

われ等の休息が愈々心地よきものとなる。——遊惰の城。

凡てかくの如きは冬の夕の描寫に缺くべからざる項目である。そして高き緯度に生れたる凡すのみに種かに親しい者でなければならぬ。そして凡てかくの如く微妙なるもの大半は、アイスクリームの如く、それを生ずるに大氣の極めて低き温度を要するのである。それ等は、或意味から云つて、暴風雨或は無情の天候なくしては熟し得ない果實である。私はそれが雪であらうが、黒霜^{ブラックフロスト}であらうが、(クラークソン氏が云ふやうに)『君は柱のやうにそれに倚りかかれるかも知れない』やうな強い風だらうが、別段 "Patriotism" (氣むづかしい)ことは云はない。私は若しドシャ降りになるなら、雨でもいいと思つてゐる位である。兎に角、私はその種のものを持たなければ承知出来ない。そして、若し自分がそれを持たないなら、私は虐待されたやうに自分自身を考へる。何故なら、私は何故に紳士の場合にさへ有り得る重税を、多に於いて仕拂はされるのであらう。たとへその品質はよくないにしても、澤山の炭や、燈火代や、その他色々な必要品の爲めにか? 否、私は自分の金づくで買へるなら、カナダのやうな冬が欲しい。或は何人も自己の耳の永代借

地に北風の共有者である露西亞のやうな冬が欲しい。實際、この點で自分はかなりな貧窮家^{poorhouse}である。そして、トマス尊者の日をズット過ぎて、そろ／＼青草の萌え出す厭ふべき傾向に墮落するやうになれば、充分冬の夜を味ふ事は出来ない。否、それは暗黒の夜々の重い壁によつて、光と日光のあらゆる復歸から隔離されなければならぬ。——だから、十月下旬の週間から、クリスマスの前夜迄が私の斷定によれば、幸福が茶盆と一緒に室内に入りこむ季節である。なぜなら、茶は、飲酒の結果、自然その神経を粗奔にされ、洗練された刺激に無感覺な人々に抑捺されるが、常に智者の愛好する飲料となるだらう。そして、この點に於いて、自分は、かの政で茶を汚辱したジョナス・ハンウェイ及び其他不敬な人々と *bellum internecinum* (死を決した) ドクタア ジョンソンに味方するであらう。——しかし此處では、あまり多くの言葉の上の煩雜を私自身に避けるために、私は一人の畫家を紹介するであらう。そして残りの畫に對する指圖を彼に與へよう。畫家はかなり雨風に曝されてゐない限り、白塗りの小屋を好まないものである。しかし、讀者も先刻承知してゐる通り、それが冬の夜であるから、彼の仕事は家の内部以外には必要ではあるまい。

それなら、今、長さ十七呎、幅十二呎、高さ七呎半以上でない室を描いてもらひたい。讀者よ、これは、私の家としては稍々贅澤にしつらはれた客座敷である。しかし、『二重の負債を償却すべく』企てられたので、それは又、圖書室と名づけられた方が更に正しいかも知れない。なぜなら書物だけが自分の唯一の財産

で、この點で、自分は私の隣人よりも富者である。書物だけは、私の十八歳の年から次第に蒐めたので、今では凡そ五千巻ばかり蔵してある。だから、畫家よ、この室に出来るだけ澤山な書物を置き給へ。その室を書物で埋めてしまひ給へ。そして、それから、氣持のいい爐邊と學者の氣取らない茅屋にふさはしい簡素な家具とを描いて呉れ給へ。そして、火の邊に、茶卓を描いてくれ給へ。それから（このやうな風の晩には誰れも訪ねて来る人間もないと云ふことが明らかだから）茶盆には皿を二個とコップを二個だけ置いて呉れ給へ。そして、若し君がかう云ふものを象徴的に、或はその他の方法で、描くことを知つてゐるなら、永遠の急須 (an eternal teapot) と云ふやうなものを描いてもらひたい。——永遠にして a parte ante (始めもなく) a parte post (終りもない)。なぜなら、自分は通常、夜の八時頃から、朝の四時頃まで茶を飲むのである。そして、自分で茶を入れたり、注いだりするのは甚だ不愉快なものだから、私の爲めに、テーブルに侍してゐる若く、愛らしい女を描いてもらひたい。彼女の腕をアウロラの如く、彼女の微笑をヘーベアの如く描き給へ。しかし、否、親愛なマアガレット、假りにも私の茅屋を輝かす汝の力が單に一個人の美貌の故に不朽であると云ふが如き事を口にせしむるな。或は又天使の如き微笑の妖術が地上の筆の領土の中にあると云ふが如き口粉を洩さしむる勿れ。されば、わが善良な畫家よ、去つて其力の範圍にある或物に移れ。そして次に來るものは自然私自身——即ち阿片溺愛者が、かたへのテーブルに『毒藥を蔵する小さき黄金の小箱』を

置いた姿でなければならぬ。阿片は、特にその畫に關して何等の注文をも持たない。私は寧ろ唯だその現物を見たいと思ふばかりである。若し、描きたいと思はない、描いても差支はない。けれど、一八一六年に於てすら、その『小さい』入れ物は『立派な神廟』とあらゆる藥種屋（人間のもさうでないもの）から遠ざかつてゐた私の目的に適はなかつた事を君に告げ知らせる。否、君は黄金製ではなく、硝子から出來て、かつてゐた私の目的に適はなかつた事を君に告げ知らせる。否、君は黄金製ではなく、硝子から出來て、まるで酒瓶のやうな形をしてゐる眞實の入れ物を描く事が出來る。この中へ君は紅玉色の阿片丁幾のスクルトを入れることが出來る。そして、その傍に置かれた獨逸の哲學書は充分近隣に於ける私の人物を表明するであらう。しかし、自分自身に對しては——そこで自分は逡巡する。私とその畫の前景を占めなければならぬ事を、自分は自然承認する。即ち、その一幅の畫中の主人公であり、或は法廷に於ける罪人の格である私の身體が特に注意を惹かれなければならない。是は如何にも道理ある様に見える。然し、なぜ自分はこの點を畫家に迄白狀するのであるか？なぜ少しでも白狀するのか？若し公衆が（そのひそかな耳元に私は信頼して私の告白を囁いてゐるので、畫家に向つてではない）偶々かれ等自身の爲めに、阿片溺愛者の外貌に對して、氣持のいい肖像を作り出し——ロマンティックに優雅な容子と麗しい顔を彼に歸したとしても、私はなんでそのやうに快よい！公衆にとつても自分にとつても嬉しい——幻影を野蠻に拐ぎ取るやうなことをしよう。否、少なくとも、君自身の想像に任せて僕を描いて呉れ給へ。そして畫家の想像は美しいさま

さまの創造に充ち溢れてゐるから、それにしても、自分は結局、得をしない譯にはゆかない。そして、今、讀者よ、われ／＼は一八一六年から——一七七年にわたつた私の境遇の十の類目を悉く通過した。その後年の中頃迄、私は自ら幸福な人間であつたと判じてゐる。そして、私はその幸福のあらゆる要素を諸君の面前に披瀝しようと努めたのである。それは冬の暴風雨の夜、山中の小屋に於ける學者の書齋の内部を描いたこのスケッチである。

しかし、今はさらばである——冬と夏との幸福にながらば、あらゆる微笑と哄笑とにさらばよ！ 心の平和にさらば！ 希望と静かなる夢と、祝福された夢の慰藉とにさらば！ 三年半以上私はこれらのものより離るべく召されてゐた。私は今災厄のイリアッドに到着した。自分はこれから、それを録さなければならぬ。

阿片の痛苦

—As when some great painter dips

His pencil in the gloom of earthquake and eclipse,

Shelley's Revolt of Islam.

かく遙々と私に従いて來た讀者よ、私は今三ツの點に對する簡単な説明的註釋に諸君の注意を促さなければならぬ。

1 色々な理由から、私は私の物語のこの部分の手記を規則立つた連続した形に編む事が出来なかつた。私はその手記を自分の見出したまま、離ればなれに、掲げるか、若しくは記憶からそれ等を引き出した。或物は、それ自らの月日を示してゐる。或物は後から私が月日を記入した。そして或物には全然月日がない。自分の目的通り自然に、年代的の順序にそれ等を移植することが出来る場合には、自分はさうすることに躊躇しなかつた。時に自分は現在で語り、時に過去で話す。恐らく、それ等の手記はたいしてそれが物語る時期に、精確に書かれたものではなかつた。しかしこれはその精確なることに何等の影響をも及ぼさない。なぜなら、それ等の印象は決して私の心から消え失せるやうなものではなかつたから。多くが略された。私は、自分の頭腦中に推積されてゐる恐怖の重荷をことごとく呼び起して、それを規則立つた物語に纏める仕事を自分自身に強ひることは、努力なしには、到底出来なかつた。この感じを私は半ば辯解の理由とし、半ば自分が今倫敦にゐると云ふことと、人手を借りないでは、自分の原稿を整理することさへ出来ない、薄弱な人間であり、そして私は私の爲めに筆記者の役目を始終して呉れた人々から離れてゐると云ふことに歸してゐる。

2 諸君は、恐らく、私があまりに信頼的に、私自身の立ち入った歴史を好んで物語ると考へるのであらう。しかし私の書き方は、私に傾聴する人々のことを多く考へるより寧ろ高聲に思索して、私自身の氣まぐれに従ふやり方である。そして若し自分が歩みを止めて、甲或は乙の人間にどんなことを云ふのが適當かなど考へてゐたら、私はやがて何處でも適當ではないのではないかと疑ふやうになるであらう。事實、私は今から十五年、若しくは二十年先に、私自身を置いて、今後自分に就て興味を持つやうな人々に書いてゐるのだと自分を想像してゐるのである。そして自分以前に何人も知ることの出来ない歴史全體の記録を持ちたいと思つて、私が現在盡すことが出来る丈の努力を充分それに注がうと思ふのである。なぜなら、私は再びそれを爲す時を見出し得るか否かを知らないからである。

3 私が阿片をやめるか、或は減ずるかして、なぜ、阿片の恐怖から、私自身を救はなかつたのかと諸君は屢々訊ねるやうなことがあるであらう。これに對して私は簡単に答へなければならぬ。私があまりに容易に阿片の蠱惑に負かされたと思像されるかも知れない。また、何人もその恐怖に魅せられると云ふことをば想像し得ない。故に、讀者は、私はその分量を減ずるべく種々なる企てをしたと云ふことは恐らく疑ふまい。そしてそれ等の企ての苦悶を目撃した私以外の人々は先づ第一にその企てを止めることを私に求めた人であることを私に付け加へる。しかし、私はそれを一日一滴に減じ若しくは水を加へて、一滴を二ツにも

三ツにも分けることは出来なかつたであらうか？ 溶解された數千滴はかくして減ずるに凡そ六年の歳月を要したであらう。そしてその方法は確かに何の効果をも齎さないであらう。しかしこれは實驗的に阿片のことを何も知らない人々の普通の謬想である。或點まで、阿片は容易に快樂を伴うてすた減ずることが出来るが、その點以下に一層減じようとするれば、激烈な苦痛を引き起すものではないか否かと云ふ事を、實驗的に知つてゐる人々に訴へる。いかにも、汝は數日の間、少し元氣が失せて消沈するであらうと、自分が何を云つてゐるかも知らない多くの無考へな人間は云うであらう。私は否と答へる。其處には元氣がなくなると云ふやうなことはない。反對に、單なる動物的元氣が異常に高められ、脈搏が改善せられ、健康がよりよくなる。苦痛のあるのはその點ではない。それは酒をやめた原因から生ずる苦痛とは何等の類似をも持たない。それは一種云ふべからざる胃の激衝で（たしかに元氣阻喪と云ふやうなものではない）激しい發汗がそれに伴はれる。そしてそのさま／＼の感覺はとても、もつと自由に餘地が與へられないでは容易に描寫し難いものである。

私は今 "in melting" (事件の眞中) に入りこんで、私の阿片痛苦がその "point" (極致) に達したと云はれるかも知れない時から、それが智的諸能力に及ぼした麻痺的影響の報告を先にしてみよう。

私の學問が今永い間防げられてゐた。私は東の間も續けて、自分自身に對して興味を以つて讀書することは出来ない。けれど、私は時々他の人々の快樂の爲めに高音で朗讀する。なぜなら、音讀は私の一個の藝術で *accomplishment* を、俗語では、淺薄な裝飾的才藝の意味に用ゐるが、その意味で、私が所有する殆ど唯一のものである。そして、以前からも、若し私が自分の天稟若しくは才藝に連絡した何等かのヴニテイを持つてゐたとすれば、これであつた。なぜなら、私はこの嗜み位、稀れなるものはあまりないと云ふことを觀察してゐたから、俳優はすべての中で最もヒドイ朗讀家である。ジョン・ケンブルは劣悪な讀み方をする。シッドンス夫人は非常に有名だが、戲曲的な文章以外にはなにも讀むことが出来ない。彼女がミルトンを讀むと、とても我慢がしきれない。一般の人等はまた詩を何の情熱もなく讀んでゐる。さもなくば自然の禮節を飛び超える。そして學者のやうには讀まない。近頃、自分が書物で、少しでも感動したものがあるとすれば、それはサムソンゴニストの雄大な悲歎と "*Paradise Regained*、中の惡魔の演説の偉大な諧調とである。それは、いづれも、私が自分に對して高聲な音讀してゐた時である。一人の若い婦人が時々來て、自分達と一緒に茶を飲む。彼女とマアガレットの要求によつて、自分は時々かれ等にウワーズワースの詩を讀んできかせる。(因に、ウワーズワースは自分の遇つた中では彼自身の詩を讀むことの出来る唯一の詩人である。そして實際彼は屢々稱賛に價する讀み方をする。)

約二ケ年の間私はたつた一冊の書物しか讀まなかつたと信ずる。そして私はその著者に對する大なる感謝の負債を償却する爲めに、それが何んであつたかを報告する義務がある。私は、前にも云つた通り、今でもなほ莊麗な情熱ある詩人を折々断片的に讀んでゐる。しかし、自分でもよく知つてゐた通り、私の正しい天職は解析的智力の修業であつた。さて、大抵分解的な學問は連續的で、氣まぐれや、飛々や、断片的努力では研究されるものではない。例へば、數學や、智力的な哲學は悉く、自分にとつて耐へ難いものになつた。私は無力な薄弱な幼兒の如き感覺を抱いてそれ等から縮み上つた。それが以前、私の時々刻々の喜びとしてそれを纏み得た時の記憶から愈々自分に齒噛みするやうな苦悶を與へた。そして更にもう一つの理由があつた。それは自分が私の一生の努力を傾注して、私のあらゆる精華と果實とを包んだ私の智力を捧げ、除々に刻苦丹誠して一箇の著述の完成に努力したからであつた。その著述に對して、私は兼てよりスピノザの未完の著書、即ち *Le emendatione humani intellectus* (人間智力の修正) と云ふ書名を附けようと考へてゐた。これは恰かも建築家のあらゆる方法を傾倒して、大仕掛に始められたスペインの橋梁、或は水道の如く、今では霜によつて閉ざされてゐる。そして、かくの如く偉大な目的を進捗すべく神が最も私に適した方法によつて人生の高揚に捧げられた努力の一生、熱望、そして少なくとも願望の紀念として、私の死後に生き残る代りに、それは敗れた希望、無駄な努力、徒に蒐集された材料、遂に一度も上部の結構を支へ得なかつた土臺

——要するに建築師の悲歎と滅亡に終つた記念塔を子供達の爲めに建てることになつてしまつた。この無力な状態に於て、私は、なぐさみに、經濟學に自分の注意を向けて見た。以前には鬻狗ユウコの如く不斷の活動を續けてゐた私の理解力は、思ふに（少なくとも私の生きてゐる間は）全然昏睡状態に沈むことは出来なかつたのである。そして經濟學は自分のやうな状態にゐる人間にこの便宜を提供する。勿論經濟學も明らかに一箇の組織的學問である（即ち、如何なる部分も全體に影響しないものはなく、そして再び部分の上にその全體が反動するのである）。しかし部分／＼によつて單獨に離して思考することが出来るのである。この當時私の能力の衰弱が非常ではあつたが私は自分の智識を忘れることは出来ない。そして、私の理解力はあまりに多年、論理の嚴肅な思索家や、智力の優れた大家などと親しんでゐたので、近代經濟學者の主なる連中に出遇つても全然薄弱になつてゐることを氣づくやうなことはなかつた。私は一八一一年には經濟學の種々なる方面に關する多くの書物や、小冊子の堆積を涉シヤクるやうになつた。そして、私の望みによつて、マアガレットが時々近頃の著書の或章や、議會の討論集の或物などを讀んでくれた。私はこれ等が大抵人間智力の殘滓であることを見た。そして誰でも健全な頭腦を持つて、學者的敏腕によつて自由に論理を驅使することの出来る人なら、彼の中指と母指とで、かれ等を空間につるしあげてヒネリつぶし、かれ等の齒のやうな頭を貴婦人の扇子で粉々に碎くことが出来ると思つた。一八一九年に、とう／＼エディンバラにゐるある友達が私に

リカアド氏の書物を送つて來た、そしてこの科學の立法者の降臨に對する私自身の豫言的豫想を再び思ひ出して、私は第一章を讀み終らない前、*“Thus art the man!”*（聊々その人なれ！）と云つた。驚異と好奇心とは長く私の心内に死んでゐた情緒であつた。しかし、私はもう一度驚いた。私は自分が再び讀書の努力を刺烈された自分自身に對して驚いた。それ以上、私は更にその書物に對して驚いた。この深遠ソフアウソンドな書物が果して十九世紀の英國に於て書かれたのであらうか？ さう云ふことがあり得るであらうか？ 私は思索が英國では既に斷絶してゐたと思つてゐたのである。アカデミーの閣亭に憩へるにあらず、たえず商業若しくは議員等の煩累に壓服されてゐる一英國人が、歐羅巴のあらゆる大學と思想の一世紀が、一本の毛髮程の進歩をも示す能はざりし處のものを完成せしめ得たと云ふことが、果して有り得べきことであらうか！ 他の著者等は大抵事實や文書の巨大なる重さに壓倒され、粉砕されてしまつた。しかるに、リカアド氏は理智それ自身から、*“a priori”*（先天的）に諸法則を推論したのである。そしてそれ等は扱ひ難き渾沌たる材料に初め一條の光りを投げ與へ、從來、單に試験的論議の蒐集であつたものを秩序整然たる一個の科學に建設し、今では、それが、初めて永遠の根柢に立つやうになつたのである。

かくして深遠なる悟性の單に一箇の著述が數年間、自分の知らなかつた快樂と活動の効果を私に與へた。——それが、私をして書くこと、少なくとも、マアガレットが私の爲めに書いたものを、口述させる迄に私

を刺激した。それは或重要な眞理がリカード氏の "the inevitable eye" (抜目なき眼力) すらも逃れたやうに思はれたからであつた。そしてそれ等はたいいてい、經濟學者等の例のまはりくどい拙劣な陳述によるよりも、もつと簡単に、綺麗に代數的符號を用ゐて自分が説明することの出来るやうなものであつたから、全體としても、ポケットブック位に纏めることが出来ると思つたのである。それはまったく簡単に、あらゆる努力が不可能になつてゐるこの時でも、マアガレットを筆記者にすれば、私は私の Prolegomena to all future Systems of Political Economy (經濟學將來のあらゆる組織に對する序論) を纏めることが出来ると考へた。私はたとへその題目が、たいいていの人々によつて充分醒睡的であつても、阿片の香りに充たされざることを希望するものである。

しかし、この努力はその結果が示した如く唯だ一時の閃光に過ぎなかつた。——なぜなら、私は自分の著述を出版する計畫だつたので、それを印刷する爲め、色々な整理が、約十八哩計り離れたある地方の印刷所になされた。この爲めに、數日の間、特別な植字者が雇はれた。その著述は二度までも廣告された。そして私は、多少、私の意向を遂行する爲め人質に取られた形になつた。兎に角自分は書くべき序文と献辭とを持つてゐた。私はリカード氏に對して立派なデディケーションをしようと思つてゐた。私はこれを悉く完成することが全く不可能な私自身を見出した。準備が取り消された。植字者が解雇された。そして私の「プロレ

欠

欠

を傷けることを、甚だしく自分が嫌つたと云ふことは寧ろ幸福である。賢明な讀者の興味はそれに當惑せられる當人ではなく、主としてその魅力に向けられるに相異なる。だから物語の眞の主人公は阿片であつて、阿片愛用者ではない。そして、興味はその正當なる阿片を中心として回轉するのである。目的はその快樂と苦痛とは問はず、偏に阿片の絶大な力を發揮するにあつた。若しそれが爲されたなら、その仕事は終結したのである。

しかし、或人は、あらゆる反則を犯して、オピウム・イーターの消息を問ひ、彼が今如何なる状態にあるかを執拗に尋ねるであらう。私はその人に對してかくの如く答へる。讀者は阿片が快樂の魅力の上にその領土を築くことを止めてから、久しくなつたと云ふことを氣付いてゐる。今ではそれが、それを棄てようとする企てに聯關したさまざまの苦痛によつてのみ、その把持を續けてゐる。しかし、このやうな暴虐の繼續には他の苦痛（恐らく同一と見做れるかも知れない）が伴つてゐたから、いづれにしても禍の撰擇が殘されてゐるのみであつた。そしてそれは、如何にそれ自身恐しいものであつたにせよ、最後に幸福を回復する希望を表はしてゐた。これは實際に思はれる。しかし正しい論理はそれに従つて働く力を著者に與へなかつた。しかし、著者の生涯に向つてある危機が逼つて來た。そしてそれは彼にとつて、なほ懐かしい他の物に對する危機であつた——そして、その物はいつても彼の生命より遙かに懐かしいものであらう。今でさへそれは

再び幸福なものである。——私は若し阿片を續けたなら、死ななければならぬと云ふことが解つた。それで、私はたとへ死ななければならぬにしても、それを投げ棄てて死んでやらうと決心した。その當時、私がどの位な分量を飲んでゐたのか、自分にもわからない。なぜなら、私が用ゐてゐた阿片はある友達が私の爲めに買つてくれてゐたのであつた。その友人は後には私に金を拂はせることを拒んだ。だから、私はその年の内にどの位の分量を使つたか確かめることが出来ない。しかし私が極めて不規則にそれを飲んだと云ふことだけは解る。それで、凡そ一日五六十粒から百五十粒位までの差異を示した。私の最初の仕事はそれを四十粒から、三十粒に、そして、全速力で、十二粒にまで減ずることであつた。

私は打ち勝つた。しかし、讀者よ、と云つて私の苦しみが終つたと思つてはいけない。また阻喪した状態に坐してゐる人間のやうに考へてもらひたくない、四ヶ月経つた後にさへ、なほ、擾亂、激動、輾轉反側してあらゆる苦悶に浸つてゐる人間として私を考へてもらひたい。恐らく私はかの伸肢刑架の拷問に遇つた人間の状態にゐたに相異なる。それを私は(ジェームス一世の時代の)最も無辜な受難者によつて残された哀れな物語からその種の苦難を推察することが出来る。兎に角、私は薬からは何等の恩恵をも受けることが出来なかつた。唯だ一つ例外があつた。それはエディンバラの或る非常に優れた醫者が、私の爲めに處法を與へてくれたので、それはカノコ草(Valerian)から製した一種のアンモニア丁幾であつた。だから、私の救済

に關する醫學方面の事は、餘り書くべき材料を持つてはゐない。そして、その僅かなものすら私自身のやうに醫藥に對して無智な人間に取り扱はれる時は、恐らく誤つた方向にその人を導くのみであらう。少なくとも、この場合に於て置き違へられるであらう。この物語の教訓はオピウム・イータアに話しかけてゐるのである。だから、必然にその適用の範圍にのみ限られてゐる。若しその人が恐怖戰慄を教へられたなら、充分有效であつたと云はなければならぬ。しかし、また、私の場合から生じた結果は、少なくとも、阿片が、十七年間の使用と、入年間の亂用の後に放棄してもいいものだと言ふ證據を示すものではないかと云ふ人があるかも知れない。そしてその場合、私がやつたよりも更に偉大な精力をその仕事に用ゐ、私以上に強健な體格で、同一の結果をもつと少なく得ることが出来るかも知れないと云ふ人が、あるかも知れない。これ或は眞であらう。私は自分自身の力で他の人々の努力を憶断しようとは思はない。私は心からその人の精力の多いことを願ふものである。そして、私は同一の成功を彼に希望するものである。しかしながら、私は不幸にもその人が缺いてゐるかも知れないやうな私獨特の動機を持つてゐた。そしてこれ等が良心の扶助を私に供給して呉れた。それは單なる個人的興味(個人的興味)が阿片の爲め衰弱した心に供給し得なかつたものかも知れない。ペイコン卿は生まれるのは死ぬと同様に苦しいものかも知れないと推断してゐる。私も恐らくさう考へてゐる。そして阿片減少の全期間に渡つて私は一ツの存在の様式から他の存在のそれに移行行く人間の苦悶を

嘗めた。その結果は死ではなかつたが、一種の肉體的更生であつた。そして、その後、度々、私は青春の元氣以上に心の回復を覺えたと言ふことを附け加へて置く。勿論、それは、私が不運と呼んだかも知れないやうな、あまり幸福でない心の状態にあつて、艱難の壓迫を受けてゐたこととはあるが。

私の以前の状態の記憶がなほ一ツ残つてゐる。私の夢は未だ全く穩やかではない。嵐の擾亂がまだ全く風いてはゐない。それ等の中に陣取つた軍勢が漸く退きつつはあるが、悉く解散しはしない。私の睡眠は今にざわざわしてゐる。そして、遙かに振り返つた時、我々の最初の両親の眼に映じた樂園の門の如く、それはなほ（ミルトンの絶大な詩句を借りれば）

With dreadful faces throng'd and fiery arms,

鏖戦すべき容貌と火の如き軍勢に群がり満ちてゐる。

追 加

一八二一年の九月號と十月號に於て、この表題 (*Confessions of an English Opium-Eater*) を附せられた二ツの文章によつて喚起された興味は、第三篇を出すと云ふわれわれの約束を今なほ讀者の記憶に新たならし

めてゐることであらう。その元の意味でわれわれの義務を果すことが出来ないと云ふことは、確かに、われわれ同様、讀者にとつても残念なことに相異なる。特に左の感動的な物語を熟讀した時に。それは、既に公刊されてゐる分冊の告白録の或版に附録とする目的で書かれたのであつた。そしてわれわれは購讀者諸君がこの異常な歴史全體を手に入れることが出来る爲め、それを全部翻刻することにした。

この小篇の版權所有者がそれを再版することに決定したので、昨年十二月の「ロンドンマガジン」に約束された第三篇が現はれなかつた理由に對する説明が入るやうに思はれる。それにその約束が版權所有者の保證の下に發せられたので、出ないとするとかれ等迄も——多少——約束違背の罪過に巻き込むやうになるから猶更のことである。この非難は、正當に、著者が全部彼自身の上に引き受ける。だが、かくして彼が自身に背負つた罪の精確な總計はどんなものであつたかと云へば、彼自身の判斷でも極めて闇黒な疑問である。そして、彼がその場合相談した良心學の先生の何人によつても、亦明瞭にされなかつたものである。一方に於いて、約束と云ふものは、約束される人數の反比例に束縛されるものと云ふことが一般に一致されてゐる。その理由から、我々は一個人としてあらゆる義務に對し、宗教的にかれ等の約束を守る人々が全國民に對するかれ等の約束を何等の狐疑なくして破る事實を見るのである、——自分より強い團體に對する約束破

棄は、その人自身の危険を賭して行はれる。しかるに著者の約束に利害關係を有する唯一の團體は、彼の讀者である。そして如何なる著者も約束を出来るだけ、少なく信ずると云ふ事が一種謙遜の態度を示してゐるのである。或は恐らくその場合には如何なる約束も、道德的責任の神聖を移し、考へるだけでも身震ひの出るものでもあるかも知れない。しかし、良心學を排除すれば——、著者が彼の遅延によつてかれ等自身惱まされてゐると考へ得るすべての人の恣のままな考慮の上に彼自身を投げる、——そして約束された昨年を終りから殆んど現在に至る彼自身の境遇を左に物語らうと思ふ。自己辨明の目的から云へば、耐へ難い肉體の苦痛が全く精神上の努力、特に感情の爽快な状態を豫想するやうな要求に對して、まったく、彼を不可能にしたと云ふだけで、充分であるかも知れない。しかし、阿片の力が屢々専門家の注意の下に齎される程度以上に、阿片の醫學上の歴史は些細な功績を恐らくするかも知れない場合として、彼はもつと詳細に記載する方が或讀者にとつて受けがいいかも知れないと斷定した。That experimentum in corpore VIII (經驗をして些細なものの上にも爲さしめよ)は大體から見ても何等かの効果が正當に豫想される場合に於ては正しい規則である。しかしどんな利害があるかは將しく疑問である。しかし恐らく肉體上の價值に關しては何物もあり得ない。何故なれば彼自身以上に無價値な肉體はあり得ないことを、著者は自由に告白するものである。人生の普通の嵐や消磨の下に二日間も辛うじて、耐へ得るかどうかと云ふことは——卑しい、氣狂じみた、輕蔑

すべき人體組織そのままの模型だと云ふことを信ずるのが彼の誇りである。そして、寔に、若しそれが人體を處分する信頼すべき方法であるとするなら、彼はどんな上品な犬にても、その役に立たない身體を譲ることを殆んど恥ぢなければならぬことを白狀しなければならぬ。——しかし、今の場合は兎に角、煩さい婉曲辭の續出を避ける爲め、著者は第一人稱で書く自由を撰むであらう。

この告白を讀んだ人達は私がまったく阿片の使用を拒絶したと云ふ印象を以つてそれを閉ぢたであらう。私はこの印象を何處までも傳へようとしたのであつた。そしてそれには理由が二つある。第一は、このやうな苦悶の状態を熟慮して記載すると云ふその行爲は、必然に、記載者の中に、彼自身の事柄を冷靜な一個の傍觀者として考察する力と、適當にそれを描寫する心的状態の或度とを豫測せしめる。現在苦しんでゐる人間がなにか云つてゐると想像することは矛盾であらう。第二に、八千滴と云ふやうな大きな分量から(比較的)に云つて)三百乃至百六十滴と云ふやうな小量に減じ得た自分は、畢竟、征服者たり得たと想像しても差支ないと考へるからである。だから、私を一個の改善されたオピウム・イーターとして考へることをわが讀者に許したとしても、私は私自身が與かつたことを除いては、何等の印象をも残さなかつた。そして御覽の如く、この印象すら、特に立入つた言葉——それは如何なる場合でも字義的の眞理と相容れないことはない

——からではなく、結論の一般の調子から推測せらるべくそのままに残された。——あの文章が書かれてから間もなく、私に残された仕事は私が豫測したよりも遙かに澤山のエネルギーを自分に價しさうだと感づくやうになつた。そして、それを實行する必要が日々愈々明らかになつた。特に私は胃の無感覚が次第に増して行くのを氣付いた。そして私はこれが胃の硬性痛状態を意味してゐはしないかと想像した。私はその當時その人の親切に深く負ふところがあつた、ある秀れた醫者は私の疾患のかくの如き終結は、私が阿片の使用を繼續すれば不可能ではないと、告げた。勿論、異つた終結に先鞭をつけられるらしかつたけれど。だから私身を見出のこの目的に對して分たれざる注意と精力とを自由に注ぐことが出来る私自身まではしたら、早速阿片をスッカリ棄てようと思つた。しかしこの六月の二十四の實驗をかくの如き企てに對する容易さの可なりな同意が起らなかつた。其日に私初めた。以前から、私自身の心に定めて、どんな『刑罰』の下にも、決して逡巡せず、『その試験に耐へよう』と思つてゐたから、數ヶ月間、私のとつた定量は約百七十滴から百八十滴で、時々五百滴に昇り、一度などは殆んど七百滴に達したと云ふことを前提として、私は掲げて置かなければならない。私の最終の實驗に對する繰り返された^{序曲}の中に私はまた百滴の低さに降つたことがあつた。しかし四日目以上それを持ち耐へることは不可能だと云ふことを發見した——それにいつでも四日目になると、前の三日のどの日よりも打ち勝つことが一層困難であつた。私は三日の間は一日に百三十滴で

——噴風に帆を掲げて走つた。四日目に私は直に八十に飛びこんだところが私が受けた苦痛が直ぐ私から、『自負を奪つてしまつた。』そして約一ヶ月間、私はこの點を往來した。それから私は六十に降つた。そして翌日は——少しも取らなかつた。これは約十年間、阿片無しで私が存在した最初の日であつた。私は九十時間——即ち半週間以上——程私の禁慾を維持した。それから私はまた飲んだ——どの位と云ふことはきかないでもらひたい。汝最も嚴酷な讀者よ、汝が如何なることをなし得たかを云へ。それから再び私は禁慾した。それから又約二十五滴となつた。それから棄てた。——と云ふ風にして行つた。

そのうち、その實驗の最初の六週間、私の疾患に伴つたさまざまの徴候はこのやうなものであつた。——全組織の恐しい刺戟性と昂奮、特に活力と敏感の充分に回復された胃、しかし屢々著しい苦痛があつた。晝夜小休なき不安。睡眠——と云ふものはどんなものであつたかを殆んど知らなかつた。二十四時間の中で、精々三時間位しか睡れなかつた。そしてそれさへ淺く騒々しいもので手近にある物音がみんな聴えた。下顎が始終脹れ上つて口が爛れてゐた。そしてその他多くの厭はしい徴候は繰り返すさへ煩さい位である。しかし、その中で私はタッタ一つを擧げなければならぬ。なぜなら、それは阿片廢止の企てに必ず伴ふことを誤まらなかつたからである。——即ち激しい嘔吐である。これが今非常に煩さくなつた。時々一度に二時間以上も嘔いて少なくなるともそれが、日に二回か三回起つた。鼻孔の内面の膜の延長だと云ふことを何處かて讀む

か聞くかしてゐたので私はこれに對して、別段、驚きもしなかつた。コップ酒を飲む人間の鼻孔に現はれる炎症もこれから説明出来ると思つてゐる。胃の元來感覺の突然の回復がかう云ふ風にそれ自から現はしたものだ、私は想像してゐる。私が阿片を飲んだ數年の間、私は一度も風を引いたことがなかつた。咳、一ツ出なかつた位であつたと云ふことはまた著しいことである。しかし、今激しい風邪が私を襲ふた。そしてやがて咳が出た。この頃××に宛てて書き初めた未完の手紙の断片中に、私は之等の言葉を見出す、
「君は僕に××を書けと云ふ。君はビュームントとフレッチャアが書いた *Thierry and Theodoret* と云ふ戯曲を知つてゐるか？ 其處に君は僕の睡眠状態を見るであらう。それは他の點に就ても、あまり誇張してはゐない。——僕は阿片に支配されてゐた一年間よりも、現現の一時の間の方が遙かに思想の流動を感じてゐることを明言する。恰かも十年間、阿片の爲めに凍りついてゐたあらゆる思想が、今、昔話の如く、一時に溶けて、——群川が四方から私の上に流れ注いだのである。しかし私の性急と焦燥は甚だしく——私が一ツを引き留めて書く中に、五十は逸し去るのである。苦痛と睡眠不足の困憊から、私は二分とチット立つてゐることも坐つてゐることも出来ない。 *I nunc, et versus meditare canoros*。Cyra、行つて調子のいゝ歌を冥想せよ」

私の經驗のこの状態に於て、私は近所の醫者を迎へにやつて、來て診察してもらふやうに頼んだ。晩になつて、彼が來た。そして簡單にその容體を彼に述べた後、私はこの質問を試みた。——彼は阿片が消化機關に對する刺戟劑として働くとは思はないが、また明らかに不眠の原因であつた現在の胃の苦痛が消化不良から起つたのであるとは考へないか？ 彼の答はかうであつた——否、反對に彼はその苦痛が、不消化それ自身からによつて引き起されたと考へた——それは自然意識の下に行くのだが、永い阿片の常用から害された不自然な胃の状態から、明らかに見えるやうになつたのだと云ふのである。この説は尤もらしかつた。そして其苦痛の間斷なき性質が私をして、それが眞であつたと考へさせるやうに仕向ける。なぜなら、若しそれが單に不規則な胃の疾患であつたなら、自然間斷的で、絶えず或度までの變動を示したであらう。健全な状態に現はされた自然の意向は、明らかにわれ／＼の注目から、血液の循環、肺の伸縮、胃の蠕動的活動等あらゆる生命の運動を隠すことである。そして阿片は他の場合に於けるが如く、彼女の目的に反抗する事が出来るやうに思はれる。——その醫者の忠告に従つて、私は苦酒を飲んでみた。しばらくの間、これが著しく私の苦しんだ感覺を減じた。然し、實驗を初めてから四十二日目頃に既に注意した徴候が退き初めたと同時に新な遙かに異つた一種の苦痛が現はれて來た。折々軽減したが、これ等の苦痛の下に、私はその後苦しみを續けた。しかし私は二ツの理由から、それを棄却する。第一、心が、あまりに短かい、殆んど間斷なくそれが爲めに動かされる苦痛を詳細に跡づける事に反抗するからである。その吟味を何かの役に立つやうに充分

精密にすると云ふことは——實際、[※]“infantum renovare dolorem”であらう。そして、恐らく充分な動機もないのであらう。また第二には、この後の状態が幾分でも——積極的に考へても、或は消極的にすら考へても、——阿片に關係があるかどうかを自分は疑ふのである。即ち、それは阿片の直接の作用から生じた最後の禍の中に數へ入れらるべきか、又は永くその使用によつて攪亂された組織に阿片の缺乏を感じたので起つた以前の禍の中に數へらるべきであるかと云ふにある。確かにその徴候の一部は八月頃から算へられるかも知れない、なぜなら、たとへその夏が暑くなかつたとしても、どんな場合にも、前月來から積み立てられた（と云やうな事が云へれば）あらゆる熱の總計が、その月の現在の熱に附け加へられて、自然八月をその年の中で一番暑い月にするのである。そしてクリスマスに於てさへ、阿片の日常の量を非常に減じた結果に伴ふ過度の發汗が——七月に於て殊に甚だしかつたので、私は日に五六回湯を使はなければならなかつた。しかし、それは一番暑い季節が始まると共にまつたく退散してしまつた。その爲めに熱から受ける悪い影響が一層減じられなかつたかも知れない。もう一つの徴候は私の無智から、それ内部性リウマチと呼んでゐるものであるが、それは、時に肩などを侵すこともあるが、それよりも屢々、胃に固定してゐるやうに思はれる）、それがまた恐らく阿片や、その缺乏と云ふよりは寧ろ私が住んでゐる家の濕氣に歸せらるべく思はれた。そして七月と云ふ月はいつとも英國の最も雨の多い部分に於ける降り通しの月であつたので、——その時分、そ

の最高點に達してゐたのである。

阿片が私の肉體苦痛の後の状態と關聯したか、否かを疑ふこれ等の理由の下に、——（實際、副理由として、肉體を一層薄弱に氣狂じみたものに化し如何なる悪影響をも受けやすくしたことを除いて）、——私はわが讀者をそのあらゆる描寫から、免じたいと欲してゐる。讀者から、それを消滅せしめよ。そして若し容易に自分が云ひ得るとすれば、私自身の記憶からそれを消滅せしめよ、そして將來の平靜な時間をして人間慘苦のあまりマザマザした模型によつて攪き亂さしむる勿れ！ 私の實驗の結果は、もうこれで充分である。しかし、多分、他の疾患に對する實驗とその應用とがその中にあるかも知れない以前の狀態に關して、私はわが讀者が自分の記した理由を忘れないことを希望しなければならぬ。これには二ツの理由があつた。第一は、醫藥上から見た阿片の歴史に何物かを附け加へたかも知れないと云ふ一つの信念。これに對して、私は私自身の意向を少しも果してゐなかつたと云ふことに氣づいてゐる。その原因は精神の麻痺や、——肉體の苦痛や、私とその原稿を書いてゐた間、私を困んだ問題に對する極端な嫌厭等であつた。そして、それが直に印刷に附せられたので（緯度の差異が約五度もある處では）訂正することも改善することもどうすることも出来なかつた。しかしこの記事から、たとへ漫然たるものであつたにもせよ、かくの如き阿片の歴史に最も興味を有する人々——原ち一般のオピウム・イーターに多くの便宜を與へ、そして、阿片は、普通の決心

以上に苦しまずとも、かなり迅速な程度で止めることが出来るものだと云ふ事實を確立して、かれ等に慰藉と刺戟とを與へ得るかも知れないのである。

私の實驗のこの結果を傳へることが——私の第一の目的であつた。第二は、これに附隨した目的として、この翻刻を出す時分迄に、どうして、第三篇を書くことが自分にとつて、不可能になつたかと云ふことを説明したかつたのであつた。なぜなら、この實驗の間、此翻刻の原稿が倫敦から、私の處に送られた、そして私の無能力はそれを伸すことも、改めることも出来なかつた。そればかりではない。私は言葉の不精確や、誤植に氣がつく程充分な注意を拂つて、それを讀む我慢さへ出来なかつたのであつた。これ等が私自身の肉體と云ふやうな眞に下品な問題に關する實驗の記録を多少なり、披瀝してわが讀者を煩はす理由であつた。そして私は讀者がそれ等を忘れず又私とそのやうに卑しい題目を自身のために書く程、低級だと信ずるやうな誤解を避け、實際、他の人々に對する一般の利益以下の目的で書いたものでない事を信じてもらひたいと切望するのである。自己觀察の病人 (self-observing valitudinarian) と云ふやうな者のあることを——私は知つてゐる。私は自分自身を彼に出遇つたことがある。そして私は彼が凡そ想像され得る最悪のヘウトンテイモラウメノス (自己苛責者) であるを知つてゐる。彼は、思想の方向を轉換しさへすれば恐らく須臾にして消滅したであらうやうな、あらゆる徴候を、明瞭な意識の下に呼び出して、それを誇張したり、扶

助したりしてゐるのである。しかし、私自身にとつては、この威嚴のない利己的な習性に對する私の侮蔑はかなり深い。さうする事は、私が卑下して憐れな下女娘——にたつた今、或若者が何にかが私の家の背後で戀をしかけてゐるのが聽えるが——を見守る爲め私の時間を費やすのと、あまり變りはないのである。苟くも一人の超絶哲學者がこのやうな場合に好奇心を起すと云ふやうなことがあり得やうか？ 或は、僅かに八年半保つか、保たない生命を持つた私がこのやうなツマライ仕事をする暇があると想像することが出来るであらうか？——しかし、これを問題外として私は一つのことを云はう。それは恐らく或讀者を戰慄せしめるであらう。しかし、私がそれを云ふ動機を考へれば、それは確かなにさるべきことではないのである。何人も、何等かの尊敬なしに、彼自身の肉體の現象に關して多くの時を費やすものではないと自分は想像する。しかるに讀者は、禮儀或は尊敬を以て自分の肉體を遇するところか、それを憎んで、自己の冷嘲侮蔑の玩弄物としてゐる私を見るのである。そして私は最悪の犯罪者の身體の上に法律が科する最後の義憤がこの後、その上に落ちるかも知れないと知つても不愉快には思はないであらう。そしてかく云ふ自分の眞摯な證明として、私は左の提出をするであらう他の人々のやうに、私も私の埋葬の場所に對する特別な想像を持つてゐる。主に山國に住んでゐたので、私は寧ろ古い靜寂な丘の間にある緑の墓地の中の石塔か、倫敦の恐しいゴルタゴの如何なるものよりも、哲學者にとつて遙かに莊嚴沈靜な休安所であると云ふ幻想に戀着し

てゐる。しかし、若し醫學會の紳士達がオビヤム・イータアの身體の外観を検査することから何等かの裨益をかれ等の學問に功獻し得ると考へるなら、私は私の身體が心配なくかれ等に引き渡されるやうな手續をして置かう、——即ち私が自分自身、肉體の始末をつけたら早速、かれ等をして上品振る偽りの狐疑と、私の感情に對する念慮から、かれ等の願望を發表することに躊躇せしむる勿れ。私は自分のやうな氣狂ひ身體を「demonstrating」(解剖説明)することによつてあまりに多くの尊敬を私に致すものであることをかれ等に保證して置く。そしてこの世で私をサン／＼に苦しめた肉體の上に科せられたこの死後の復讐と侮辱とを豫想することは私に快感を與へるであらう。かくの如き遺言は普通ではない。遺言者の死の上に偶然起る復讐的恩恵は實際、多くの場合公表する事は危険である。これに就いてわれ／＼は或羅馬の皇太子の習慣に著しい例を有してゐる——彼は金持がその遺言狀の中に立派な財産を残したと云ふ通知があると、かくの如き處置に對する彼の充分な満足を表はし、それ等の忠義なる遺産に對し優渥な嘉納を示し給ふたが、若しその遺言が財産の即刻の所有を彼に與へる事を怠つたり、不忠にも、(スエトニウスが云つたやうに「*Vivere Perseverare*」——生きることを固執したなら)彼はいたく激憤して、直に然るべく處分した。その當時に於ては、最悪な皇帝の一人から我々はかくの如き振舞を期待するかも知れない。しかし今日の英國の外科醫から、私は何等性急の表情、其他の感情を待ち望む必要はない。若しありとすれば、學問及それより生ずるあらゆる

興味に對する粹な愛にふさはしいものである。私をしてかくの如き提供をなさしめた所以である。

一八三二年九月、三十日。

阿片溺愛者の告白 終

後の阿片溺愛者の手記より

Walking Stewart

俗に“Walking Stewart”と云はれてゐる旅行者のステュワート氏は極めて異常な天才であつた。彼は活字で彼の事を話す人々からは一般に狂人として取扱はれてゐた。しかし、これは誤謬であつて、主として彼の書物の題名に基いてゐたに相違ない。彼は情熱あり、高遠な志を抱いてゐた人ではあつたが、決して狂人ではなかつた。或は若し彼がさうであつたとしたなら、その時、私は狂人であることが遙かに願はしい事であると思ひたい位である。一七九八年か一七九九年だつたか、なんでも自分が十三位だつたにちがひない、ウォーキング ステュワートはバスにゐた。その當時私の家族が其處に住んでゐたのである。彼は度々[※]ポンプ・ルーム (pump-room) にやつてきた。なんでもあらゆる盛り場を、アチコチと歩きまはりながら、恰度希臘の哲學者のやうに右や左に彼の哲學上の意見をまき撒してゐたのだと私は信じてゐる。初めて私が彼を見たのは、アップアールームで開かれた演奏會に於いてであつた。彼は地球の上に嘗て生存した極めて奇矯な人間として、私の仲間の一人によつて、指摘された。恰度、その時にマラ夫人が唱つてゐたことを、自分は未だに記憶してゐる。そして音樂の眞の愛好者であつた(と云ふことは後に知つたのだが)ウォーキング ス

テュワートは素馨の花にとまつてゐる蜂のやうに彼女の歌に纏り着いてゐた。彼の容貌は著しいものであつた。そして思索する哲學的習性と溫柔との結合を表はしてゐた。彼の歩行運動はその節制的な生活法と結び付いてかくの如き健康状態に彼を保つてゐた。彼は、勿論、其當時、四十歳を超えてゐたには相違ないが、見たところ、二十八歳よりはフケてゐるとは思はれなかつた程に、少なくとも、數年の間私の記憶に残つてゐた顔は青年のそれであつた。その後、約十年位経つて、私は彼と知り合ひになつた。其間、私はプリストで彼の著作の一冊を拾ひ上げてゐた——即ちそれは彼の“Travels to discover the source of Moral Motion”（道德運動の源泉を發見せんとする旅行）で、その第二巻目は“The Apocalypse of Nature”（自然の黙示）と題されてゐた。私は、彼がその第一巻目の中で、歐羅巴の國民性に就て論じてゐる健全な獨創的な見解によつてヒドク印象せしめられた。特に、彼は、私の知つてゐる限りで、英國國民に粘液的性格を當てはめる深い誤謬を指摘した最初の、そして唯一の著者であつた。“English Palegnu”と云ふ言葉は、英國人を佛蘭西人と對照せしめる時に、多くの著者の取る常套なエキスプレッションである。しかし、事實、英國國民は、悉ゆる他の國民以上に、深遠な情熱の本質を有してゐるのである。そして、若し、吾人が舊い氣質の教義に歸るとすれば、英國國民性は粘液的ではなく、憂鬱質の下に入れられなければならない。そして佛蘭西人は多血質の下に分類されなければならない。一國民の性格は、この一事に關しては、其慣用語を驗べる事に

よつて判斷せられるかも知れない。低級な情熱が絶えず淺薄皮相な感情性から泡立つてゐる佛蘭西人は悉ゆる情熱の言語を些々たる日常生活にまでも適用した。故にかれ等は詩歌の爲めの、或は眞にそれを要求する場合に用ふべき情熱ある言語を有してはゐない。何故なら、それは既に無感動な多くの場合の不斷の聯想によつて弱められてゐるからである。しかしながら、深き情熱の性格はそれ自身に於て不斷の標準を有してゐる。それは恰かも本能の如く、それによつてあらゆる場合を吟味する。そして、充分正しいと認められない場合には、情熱の言葉は不均衡であり、滑稽であるとして排斥する。“Ah Heavens!”或は“Oh my God!”などは、我々にとつて、深いインテレストの場合にのみ限つて保存せられてゐる感嘆詞である。若し或る婦人さへ（最も容易に昂奮せしめられる異性が）かくの如き言葉を發したのを聞いたとすれば、我々は彼女の子供が若しや危険な状態にでも落ち入つてゐるのではないかと云ふやうな期待を以てあたりを眺めまわすのである。しかし、佛蘭西に於ては、“Ah Ciel!”（オー天！）と“Oh non Dieu!”（オーわが神！）は、鼠が一匹一寸床を走つてさへすべての婦人によつて發せられるのである。しかし、無智と考へ無しとは英國國民性を粘液質の下に分類し續けるであらう、同時に哲學者は、それが粘液質とは精確な反對であることを智覺するであらう。この結論——勿論その發想や説明の仕方は違ふが——によつて英國國民性に關するウォーキングステュワートの見解の歸結する處が見出されるであらう。そして彼の意見は、特に——先づ第一、彼が哲學者

であるが故に價值があるのである。第二には、彼が、その文明たると非文明なるとを問はず、悉ゆる國民的相違の下にある人間との彼の熟知が絶無類であつたからである。しかし、又一方、かくの如き彼の説は、若し文字通りに解釋されたら、屢々氣狂ひじみて、バカバカしく見えるやうな言葉で云ひ表はされてゐた。實際、外國人との永い間の交際が、彼の語法に一種の雜種的色彩を與へたことは確かである。例へば彼の或る著作中に、彼は佛蘭西語の *l'homme* を英語の *the man* 同様に用ひてゐる。そしてまるで彼の誤謬を意識してゐないやうに見える。彼は又、絶えず、形而上學に反對する形而上學的議論をする奇癖を持つてゐた。私の夙い日から形而上學的冥想に埋められてゐた自分にとつて、これは彼の不正な語法が私の學者的趣味を喜ばさないと同様、恐らく彼に對する牽引の理由とはならなかつた。しかしながら、あらゆる嫌厭の論據は彼の力強き眞價に對する私の感覺の前に消え失せてしまつた。そして、私の云つたやうに、私は彼の知遇を求めた。一八〇七年か一八〇八年頃、オックスフォードから倫敦に來たので、私は彼に就て色々尋ねて見た。そして、い彼がつてもピカデイリーの珈琲室で新聞を讀んでゐると云ふことを發見した。彼が貧乏なのを知つてゐたので、フト、私は彼が自分の下宿を訪問されることを欲しないかも知れないと思つたので、その珈琲室に彼を探した。此處で、私は彼に私自身を紹介する自由を取つた。彼は感慙に私を迎へて、彼の室に私を招待した。それは當時、ゴールドン スクエアのシェラアド街に在つた——それは既に私にとつては忘れがたい

街であつた。私は私の會話の雄辯なのにヒドク驚かされた。そして、その後、私は、會話に於て最も雄辯な一人であるウアーズワース氏自身も同様に驚かされたと云ふことを發見した。氏が彼に遇つたのは巴里で、佛蘭西革命の嵐が始まりかけてゐる一七九〇年から一七九二年の間であつた。私は幾度もシェラアド街に彼を訪問した。そして色々な問題に就いて彼と話しあつた會話のノートをとつて置いた。私は此を早晩どこかで發表しなければならぬ。出来るなら私は今此處でそれを紹介したいと思ふ。そして、それが讀者を喜ばすに足ればよいと思ふ。これ等の會話の中で、彼は作物中にもやるが、折々彼の自傳を紹介した。特に、私は、彼が東印度で、ハイダアの囚人になつた話をしたことを記憶してゐる。彼は多少の困難を経て、其處を逃れ、地方の或君主の祕書役だか通譯だかをして、僅か許りの金を蓄へた。これは餘りに輕少なものであつたに相違ない。恐らく、その當時、哲學者の樂みをすら、彼に許すことが出来なかつたのであらう。何故なら、その幾分は、佛蘭西の國庫にあづけて、沒收されてしまつたからである。私はかくの如く才能があり、紳士らしき態度と優雅な習性を有し、しかも一方癡症に冒されてゐる人が、このやうな艱難苦痛を受けてゐるのを見て悲しんだ。そして、私は或時、適當な機を見て、無遠慮にも、書物を彼に贈ることを許してもらひたいと云つた——その本と云ふのは、彼が折々持つてゐないことを残念がつてゐたものなのである——私はその當時、私の世俗的繁榮の全盛を極めてゐたのであつた。しかし、彼はこの申し出を品位と決意とを以

つて拒絶した。無論、無駄にはない。私が今、こんなことを話すのは、彼が自己の金残上の利害に關して利己的だと新聞で攻撃されてゐるのを見たからである。これに反して、彼は私には極めて寛仁大度の人に見受けられた。そして、彼は、自分では、如何な物でも受けることを拒んで置きながら私が彼と交際してゐる間、彼の出版した書物は悉く私に贈物として受け取ることとを餘儀なくせしめた。その中の二冊は、彼自身の手で訂正されてゐた、——即ち、"Lyre of Apollo" と "Sophionometer" とで——私はそれを近頃、倫敦に残して置いた書物の間に發見した。そして、その他は私がウエストモアランドにゐた時に送つてくれたのである。一八〇九年に、私は度々彼に遇つた。その年の春、私は偶々倫敦にゐた。……私が最後に彼に遇つたのは、一八一二年だつたと思ふ。それから、私が彼と別れた日に、「ロンドン マガジン」の譏智ある作家によつて、彼に與へられた一種の遍在性 (Cabinety) の面白い證據を、私自身に經驗した。私はソマアセット ハウスの下で彼に遇つて握手した。そして、その晩、都會を後にしてウエストモアランドに行くと彼に告げた。それから、私は一番の近道を通つて、(ムアー街や、ソホ街を通つて——私は倫敦の多くの隅々をよく心得てゐたから) 或地點へ向つた。それは、必然に私をトッテンハム コート ロードへ導いた。私は何處にも寄らず、急いで歩いた。しかも、トッテンハム コート ロードで、私はウォーキング ステュワートに追ひ着かなければならない事になつた。私が追ひ着かれたのではなかつた。確かに、先の作者が確言し

たやうに倫敦には三人のステュワートがゐたに相違ない。彼は自分でも少しもこの事に就て怪しんでゐる様には思はれなかつた。そして、どこかトッテンハム コート ロードの近邊に小さい芝居小屋があつて、其處には舞踊や、時々いい歌がかかるので、そこと近所の珈琲店とを一晚の中に掛け持ちすることがあるのだと私に説明した。歌は、彼の聲にも似ず、聴くことが出来たのだと見える。この街で、私は彼に最後の訣別を告げた。それがさうなつたのであつた。その時もさうなるだらうと云ふ豫感があつたので、私は、彼の白い帽子の消えて行く瞬間にそれを見送つて、叫んだ。「さらばよ、汝半氣狂ひにして最も雄辯なる者よ！ 私は決して再び汝の顔を見ないであらう」その瞬間、私は數年の間、再び倫敦を訪問しようとは思つてゐなかつた。處が、一八一四年に、暫時、倫敦にゐることになつた。そして、その時、私はウォーキング ステュワードが東印度會社から、著しい金額(凡そ一萬四千磅だと自分は信ずる)を取り戻したと云ふことをきいて、非常な満足を感じた。そして、彼の親戚の手になつた傳記の抜萃が「倫敦マガジン」に出たが、私はそれによつて、彼がその金を最も賢明に用ひて年金を買ひ、年金局の平和の爲めにあまり永く、生活に固執した」と云ふことを知つた。斯くして多くの哲學者の利益に逆つて立つ會社や、年金局は、東でも西でも、まづこんな目に會つて御暮しなさい！ しかし、一八一四年に私が彼に會ふことが出来なかつたのは私にとつて非常な悲しみであつた。私はその時分、かなり、多量に阿片を喫んでゐた。だから、哲學者を朝夙きに訪問す

るなどと云ふ計畫は夢にも立てられなかつた。そして、夜分は、以前彼が彼自身の習慣に就いて私に報告した事があるところから、彼が大抵外出してゐるものと定め込んでみた。しかし彼はその後彼自身の部屋で談話會 (Conversations) を開いて、あまり芝居などには歩き廻らなかつたらしい。又、或る時彼と同じ家に部屋を貸りてゐた彼の兄弟の一人から聞いたところに依ると、その他の點でも、その全盛時代に於て彼の前生の活の哲學的主調から迷ひ出さなかつたさうである。勿論、彼は彼の逍遙遊をすこしもやめはしなかつた。そして彼が以前からやつてゐたやうに、規則正しく、聖ジェームス公園に朝の散歩をした。そこで彼は牧牛の群れに混じつて、恍惚たる冥想に耽り、かれ等の快よき息の香を嗅ぎながら、彼の哲學的思索を追ふたのである。彼は又オルガンを幾つか買つて、彼の孤寂を慰め、不安な思ひ——もし彼にもそれがあつたなら——から自らを忘れた。

ウォーキング・ステュワートの作物は或る縦ひままの気分をもつて讀まなければならない。その題名が大抵いつもあまりに高遠で、氣取り過ぎ、時に無法とさへ思はれる事がある。そしてその文體は、私が前にも云つた様に、冗慢で不精確である。そしてその教義は折々極めて大膽に、しかも不注意に述べられてゐるから、多くの近代的道德學者の女々しい神經には、あまりに硬く、あまりに高調子である。しかし、ウォーキング・ステュワートは人間性に就て氣高く考へてゐた人であつた。だから彼は、現代の壓制者や破壊者に

向つて、古への豫言者の如き精神と義憤とをもつて書いた。私が、グラスミヤーで、彼から受け取つた二二三の小冊子の中で、暴君暗殺の問題に關して、かれ自身の發表した意見は(その中で、彼は種々なる例を擧げて、正不正を明瞭に區別してゐる) 凡そ哲學者らしい態度に價するものであることを私自身にも、又ウワアズワースにも思はせた。しかしその問題がその當時、折々衆議院でとり扱はれた態度に比較しては、當然、彼の教義が時代の贅澤な、弛緩した道德に適さなかつたことは明らかである。人間性に就て氣高く考へる凡ての人々の如く、ウォーキング・ステュワートも、それに就いて、希望をもつて考へてゐた。彼の希望は、或る點に於て、賢明な根據を有してゐたが、他の點に於ては、あまりに多く形而上學的推論の上に立てられてゐるので、それは單に彼自身のみ満足せしめるものであつて、一般には守り難いものであつた。なぜなら、その方面に關する彼の思索は純粹に獨創的で、個性的訓練を経たものであつたから。彼は自己本然の心力に依頼してゐた。しかしながら、悉ゆる時代の智慧と哲學とが相續いて建設し來つた無解決な問題に對しては、如何に強大な精神と雖も、全然、それ自身の上に立つ可き資格はないのである。多くの物の中で彼は宗教的觀念——特にそれが非哲學的精神に存在した場合——を慄やかした。彼は蕪雜な非科學的な一種のスピノジズムを抱いてゐた。そして彼はそれを亂暴に、大抵反感を買ふ様な仕方で發表した。そして、實際彼の作物が眠つてゐる全的昏迷の證據として、それ等が悉く迫害を脱かれたと云ふ事以上に強いものは有り得

ないのである。彼は又倫敦及び其他の大都會に存在する賣笑婦の悲惨なる光景に對して、あまりに軽く又あまりに縦ままに眺める事を彼自身に許した。これこそ自分が彼と争はなければならなかつた唯一の點であつた。なぜなら私は、凡そ日の下に於て奴隷賣買以上に慘憺たる光景はなく、これ以上人間性を害ふものはないと云ふ見解を抱いてゐたからであつた。私は歴々さう彼に話した。そして私は、どうして哲學者ともあらうものが、賣淫制度をもつて單に文明生活の一裝飾品と見做し、宛も警察署や、新聞紙や燈火の如く、大都市の家財の一種と見做して自ら満足し得られるかと思ふと、失望しないではゐられなかつた。宛もこの世の獸的精神と共鳴してゐるかの如き一例としてこれを斥けるとしても、その他の問題に關して、彼は著しく非世間的であり、又小供らしく、單純であり正しくもあつた。彼は何人にも媚びなかつた。たとへ國民に對して、話しかける場合に於てすら、如何に彼が彼の提言に簡單なる眞理を前置きとして必然的に述べ、たとへそれが他の機會に於て成就せられる様な事をも、激烈な態度に訴へて、彼の目的を破つたかを見ては、笑はずにはゐられなかつた。例へば、亞米利加に向つて話しかける場合に於いて、彼はこのやうに初めるのである。——『亞米利加の人民よ！ 汝等が母國と分離して以來、汝等の道德的性格は思想と官能の力に於てどれほど墮落した事であらう。それは汝等が英國の官吏や商人と交際する事を疎んじた結果にはかならない。汝等は英國の保護力と佛蘭西の破壊力とを識別する道德的能力を有してゐない。』そして、彼が愛蘭土の國民

に與へた手紙は、このやうに氣持のいい、愛撫的な態度で初まつてゐる。——『愛蘭土の人民よ！ 予は、汝等の無反省な性格と、道德的識別力の完全なる缺乏が汝等の爲に準備しつつある不斷の災厄を先見する自然の眞の哲學者として汝等に話しかける』……………彼は他人に對して自由に大膽に話すやうに、彼自身に就ても威丈だかに物を云つた。『アポロンの豎琴』の三百十三頁で、彼はソークラテースと彼自身を比較してゐる。(そこで彼は自然に彼自身に對して優越を與へてゐる)。そして、彼は『豎琴』その他の著述を『人間精力のこの無比類な著述』と呼んでゐる。三百十五頁で、彼は又『此スバラシキ著述』と云つてゐる。それから同じ頁の少し下の方で、『私は十五歳の時、阿呆の低能兒として、學校から放逐された。何故なら、自分は、自分の記憶の中に學問の悉ゆる馬鹿らしさを填めこまなかつたからである。そして、若し未來の時代が此著作中に天才の無類な精力を發見するなら、それは私の最も重要な教義——即ち、人間精神の諸力は、道德的意見の研究中に於ける思想と官能の教育中に發展せらるべきであつて、藝術と科學の研究中に於てではない。』又、彼の『Soghometer』の二百二十五頁で、彼は云つてゐる。『絶えず、私の心の中に宿つてゐる主要な思想は、私が自分に對して抱く疑問である——即ち、死による私の個體的分解の事件によつて、私の無二の心が人間と自然の偉なる學問の中に所有する悉ゆる發見を傳達し得たか、否かと云ふことである。』次の頁で、彼はそれを成し得たと斷定してゐる。但し例外の眞理が

一ツある——それは即ち、英國民中に存在してゐる人性の生理と心意との潜勢精力である。然し、此處で彼は確かに理由なしに彼自身を非難してゐるのである。何故なら、自分の知つてゐる處によると、彼は彼の多くの著述の如何なるものの中にも、この題目に對して、少なくとも、數百萬度、主張しないことはなかつたからである。彼の雄大な自己尊重の他の例は、彼の數種の著作の表紙で、自からを『ジョン・ステュワート』、嘗てこの世に出現せる自然の唯一人』と公言してゐるのでも知れる。

此處まで書くと、讀者は彼が氣狂であつたと疑ひ始めるにちがひない。そして、確かに、私が全てを考へる時に、彼は風が北北東であつた時、氣が狂つてゐたに違ひない。何故なら、ウォーキング ステュワート以外の何人が嘗て彼の書物の日附を彼の如き計算によつてなしたであらう——それは創世紀からでも、洪水時代からでも、ナボナツザルからでも、或は *ad hydrotia* (羅馬都市建設記) からでも、*Hegira* (回教徒年代) からでもなく書物それ自身の出版された年代からで、それが人間歴史の上に偉大なる一時代を劃するものであつて、それと比較する時、他の年代は悉く輕浮にして無意味なるものであると云ふのである。かくして、一八一二年、私に與へられた彼の一著作に於て、——そして、それは、恐らくその年に出版されたのであつた——私は、彼が偶々、その當時に於て、『六十三歳に到達し、節制と心の平和によつて獲られたる健全なる健康状態にあり、人間の悉ゆる罪惡から殆んど獨立してゐる——なぜなら、人生に對する私の智識が私

をして、家族との悉ゆる關係を避けしめ、利益と名譽と權力に對する總ての野心を除くことによつて、私の幸福を他人の愚行と情慾の到達接觸以外に置くことを得せしめたからである』と彼自身に就て録してゐるのを發見する。これを讀んで、私はその日附を確かめやうとした。ところが、扉を開いて見ると、これが不可思議に言ひ表はされてゐるのを發見した。『天文歴史の第七千年、此著書の年からは、智力的人生或は道德的世界の第一日』。狂氣の他の微かな徴候が執拗に彼の心に付き纏うてゐた觀念の中に現はれた。それは地上の王者と支配者とが總ての時代に於て同盟して、彼の著作に反抗し、かのヘロデ王がベツレヘムの嬰兒に對してなせしが如く鋭敏に彼の著書を狩り立てるであらうと云ふ如きものであつた。この焦慮からして、それ等の書物が主として書き送られてゐる遠方のステュワート流の人や、或は彼の先驅者に到達する以前に、これ等の兇惡な王族の長い腕によつてさまたげられる事を恐れて、それが重要であると云ふ觀念を抱いてゐる人々に對して、各著書の幾冊かを、濕氣に浸されぬやうに、地下七八尺の深さに埋め、かれ等の臨終の床に於て、この事實を、或る親友に傳へるべきであると思つてゐる。かくして、それ等の友人は、かわる／＼その口傳を次の時代の思慮ある人々に傳へるであらう。かくの如くして、たとへばその眞理が數年代の間、撒布されないとしても、此處、彼處に——たとへば、コーカサス山の秘密の場所に *Piel Tugata* の砂中に、——亞米利加森林の隠れ場所に埋没し、遙かなる時代に於て再び出現し一般人類のために生長してし果實を結ぶ

であらうと云ふ智識が少なくとも、時代から時代へと驕かれなければならなかつた。そして、數萬の帝王が彼に對して十字軍を起しても、ウォーキング ステュワートは永き *Kingdom* の連續を通じて、彼の書物の影響を、彼が數世紀の列樹を通じて、驕る氣に見た自然の子に與へなければならなかつた。若しこれが狂暴であるとしても、それは、私にとつて、稍崇高な狂氣であると思はれた。そして、私は帝王に反抗する、彼の計畫に協力することを彼に確かめた。そして、私は *"Harp of Apollo"* をフェヤアフィールド山の麓のグラスミヤアにある私自身の果樹園に埋め、*Apocalypse of Nature* をヘルズリンの山麓に、それから、その他の著書を、私自身に一番よく知られてゐる色々の場所に埋めようと約束した。彼は感謝して私の申し出を受け入れた。しかし、彼はその時、彼の遙かに重要な役目に對して、私の力を借りたいと告げた——それはかうであつた。現代と、彼の著作が其使命を果すべき時代との間に恐らく介在する多數の時代の經過中、英國語がひとりてに、腐敗消滅してしまふかも知れないことを不安に思つてゐた。『否！』と私は云つた、『恐らくそんな事はあるまい。英語がかなり廣く傳播されて、今では、地球上の諸洲に移植されてゐるのを考へてみても、自分は、地上の他の國語に比して、何によりも英語の肩を持たうと思ふ。』しかし、彼自身の信仰はラテン語が悉ゆる國語の中で最後に生き残る運命を有してゐると云ふのであつた。それは萬國語であると同時に、永遠なものでなければならなかつた。そして、彼の希望は、私が彼の著作の幾部分でも、其國語に

翻譯すると云ふことであつた。これを、私は約束した。そして、私は眞面目に餘暇を見て、彼の哲學の要領を體現してゐさうな部分を拔萃してラテンに翻譯しよと企てた。これは彼の特殊な語法の錯迷から明快にされ、現在では多く散逸してゐる浩瀚な彼の、著述中特異な説が簡略凝結されてゐるのを見たいと思つてゐる人々には役に立つものとなつたであらう。しかし、私の多くの他の計畫と同様、不實行に終つてしまつた。大體から云つて、ウォーキング、ステュワートが少なくとも氣狂であつたとしても、彼は彼の素質の天才と雄辯とに影響しない程度に於てさうであつた——否、狂氣は寧ろそれ等を高調した程であつた。實際、大なる智慧と狂氣とは確かに決して結び付かないものである」と云ふ古い格言、このドライデンの格言と通俗の格言が嘗て、コルリツチ氏とウァーズワース氏によつて論じられてゐるのを聞いた。兩氏は狂人といふ者は人間の中で、凡そ鈍て倦屈な者であると云ふ説を主張してゐるのである。全體として、かれ等は如何にもさうだと、自分は信じてゐる。しかし、私はおのづから、それを區別する點で兩氏と意見を異にしてゐる。狂氣が、胃や肝臓などのミチメな擾亂と聯關して、身體の中央機關（即ち、胃及びそれと關聯せる機能）に明らかに存在する愉快なる生活の源を攻撃する場合には、その爲めに、思想が絶えず、混迷惑亂されなうてはゐられない。そして、患者は屢ノロクサク又矛盾する。それ等の機關の甚だしき擾亂のために苦しんだことのない人々は、日常生活の上に瞬間的に流れ入る快感が思索の過程にとつて、如何に缺くべからざるもの

であるかと云ふことに殆ど氣づいてゐない。實際、快感がなくなるか、或は朦朧となる迄は、たいていの人は、自分達が組織中の大きな中央機官の適宜なる動作から快樂を得てゐることに氣づいてゐない。快樂が障害を受けずに持續することは、呼吸作用と同様に意識から逃れる。子供は、その存在の最も幸福なる状態に於て、幸福であると云ふことを知つてはゐない。時々刻々の感情の水平状態は、それがなんであれ、無考へな人（即ち百人の中九十九人迄は）によつて決して幸福の帳簿の中には記入されない。それは決して、積極的の符號、即ち $+$ に同等なものとして記入されはしない。しかし、單に $||$ としてである。そして、それが正量であつたと云ふことを人々が初めて氣付くのは、それ等がその價を失つた（即ち $-$ に下落した）時である。そして、活力作用から來る愉快な幸福は、勿論、意識には現はれないにしても、悉ゆる動作、衝動、動作、言葉、思想に肉迫してゐるのである。そして、哲學者は愚人が愉快な状態にゐるのを知つてゐる。勿論、かれ等自身はそれを知らないのである。故に、私は今、かう云ひたいのである。快樂のこの源が浸されない場合に於て、狂氣は屢々高揚せられた熱情以上のものではない。動物精神が過度に豊富である。そして、狂人は、若し彼が狂人である以外に、智識あり卓見ある人であるなら、更によりき同伴者である。私はかくの如き幾人かの狂人に出遇つた。私は、私の立派な友達——彼は如何なる方面に於ても遲鈍に耐へ得る人ではなかつた、そして彼自身は愉快なる伴侶の典型であつた——であるエディンバラ大學のW教授に訴

へる。彼は果して今迄にかの狂人以上に面白き人間に出遇つたことがあるかと。——その狂人は餘程以前、彼と私がエディンバラ郵便馬車に追ひつかふと思つて、逃亡重罪人の速力で急ぎながら——驛傳馬車へ乗つて、ペンリスからカアライルへ行く途中で、私達と一緒になつたのであつた。彼の幻想と奇矯と、サブアイザック・ニウトンに對する猛烈な攻撃とは、プラトーンの晩餐の如く、單にその日丈の我々を爽快ならしめた許りでなく、それを思ひ起す度に、何時も胸をセイ／＼させた。そして、自分達は、其後或るケンブリッジにゐる男から、彼が乗合馬車の中で我々の賢明な友達が無慈悲な保護者の監督の下にあるのを見かけたと云ふ事をきいた時に悲しんだ。——かくの如き狂氣が、若しあつたとしたなら、ウォーキング・ステュワートの狂氣であつた。彼の健康は完全であつた。彼の氣分は春の鳥のそれの如く軽く躍り上つてゐた。そして彼の心は苦痛ある思想にさまたげられず、彼自身と平和に於てあつた。故に、若し、彼が愉快な伴侶でなかつたとしたなら、それは彼の思想の哲學的傾向が彼をそれ以上の何物かにしたからである。彼は、逸事や、實際の事柄に就て話すことをあまり好まなかつた。彼が旅行の廣大な範圍に於て見た總ての物を、會話の取材にするやうなことは殆んどなかつた。私は、今でも、彼との交際に於て、かつて彼自身の旅行に言ひ及ぼしたことを記憶してゐない。但し、彼自身の偉大な個人的經驗を基礎として多くの輕率な誤つた旅行者の記述を貶しめる目的を持つた場合は例外である。彼はかくの如き記述を人間性に有害であると考へたのであつ

た。例へば、未開種族との彼の無数の邂逅に於て、彼は決して、かれ等の欺待と忍耐との前に自からを投げ出して、かれ等をして理解せしめ得る武装なく、防禦なき人を敢えて攻撃するやうな勇猛な歐的な蠻人に出遇つたことは殆どなかつたと云ふ如きがそれである。

全體から押して、ウォーキング・ステュワートは崇高な夢想家であつた。彼は色々な人間の間に入つて多くを見、多く苦しんだ。しかし、それは他人の苦痛に對する彼の同情の懇ろな調子を鈍くする程ではなかつた。彼の心は天地有情の鏡であつた。大きな幻影全體がこの世の中で彼の目前を飛ぶが如くに走つた。東洋的な野蠻な裝飾をしてゐる。ハイダア アリと彼の息子のテップーの軍隊、英國の都府の莊麗、亞細亞と亞米利加の大砂漠、歐羅巴の大都市、倫敦の不斷の喧騒、その『偉大な心臓』の止むことなき干満、革命的動亂の猛烈なる苦難によつて振撼されたる巴里、ラブランドの靜寂、カナダの閑寂たる深林、熱帯の群がる生命、彼が同情に依つて分つた各人の喜びと悲しみの無数の回憶、——これ等が彼の眼下に地圖の如く横はり、恰かも永遠に彼の視野に同時に存在してゐるかの如く思はれた。それで、この巨大な全景を默想すると、彼はそれ等の部分を切り放つて、詳細を以つて彼の心を占める暇を持たなかつた。此處に於て、輕浮な散漫な人間が彼の會話の中に發見する單調さが生ずるのである。しかし、種々なる經驗によつて、彼に就て物語る資格ある自分は、彼を偉大なる天才であると認め、彼の會話を非常なる雄辯であると公言しなければならぬ。

い。これ等がよく知られず、認められなかつたと云ふ事は、二ツの不利な事情に歸せられる——一ツは彼の不完全な教育に由るもので、もう一ツは彼の精神の特殊な組織に因るものであつた。第一はかうであつた。故のシュレイ氏のやうに、彼も美しい漠然たる熱情と、崇高な渴望とを抱いてゐた。そしてそれが普通の人間性とその希望とに結び付けられてゐた。そして、彼のやうに、彼は、これ等の感情に哲學的意見の計畫をあてはめて、安定と、統一ある傾向と、明瞭な目的とを與へようと務めた。しかし、不幸にして、兩者の哲學組織はかれ等自身の見解や、かれ等自身の熱情の切望を維持することから、遙か離れてゐた。だから、或點に於いて、それは、根柢のない矛盾した、不可解なものであつた。又、他の點では、若しかれ等がそれを先見したなら、先づ最初に自から長縮する如き道德的結果に陥る傾向があつた。そして、勿論、それは、かれ等の哲學組織の本來の目的に反するものであつた。故に、かれ等自身の組織を維持するに當つて、かれ等は屢々人間性を阻害し墮落せしめる教義に巻きこまれて苦しまなければならなかつた。これ等はかれ等の思索に於ける *paradoxes* の免れがたい結果であつた。ウォーキング・ステュワートが苦しんだもう一ツの不利な理由はかうであつた。彼は天才ではあつたが、能才ではなかつた。少なくとも彼の天才は、彼の才能と均衡のとれないものであつた。そして、たとへば、それ自身を表現すべき機關を要したのであつた。故に、彼の最も獨創的な思想は不完全な、不明瞭な、未熟な状態に於て述べられた。だから、流俗の耳には入り易

いものではなかつた。彼は自身でも公平にこの事を氣づいてみた。そして、彼は、勿論、至る處で、人間性に對する彼の深遠な直覺力を公言はしたが、同一の公平さを以つて、自からの魯鈍と才能の缺乏に就いて彼自身を非難してゐる。彼は一個の片輪な智力であつた。そして、それだけ怪物でもあつた。彼は平凡な才能を有する人々によつて憐憫と侮蔑を以つて見下された、獨創的な人々の長い名簿の中に附け加へられなければならぬ。平凡な人間の智力は、無論、數千等劣つてはゐるが、遙かに馭し易く、更に容易に自己廣告に適し、平凡な使用や、理解に一層迎合しやすく流れゆくものである。

NB——一八一二年頃、自分は方々の印刷所の店頭にいつもの服裝と様子をしてゐる、ウォーキング・スチュワートの全身像のスケッチが水彩で描かれてゐるのを見かけたことを記憶してゐる。私は自分の要してゐる人間の姿の唯一の紀念として、これを所持したいと思つてゐる。それで、私は勝手に廣告して、これを讀む讀者で、若し賣物に出た版畫の畫集かなにかの中にこのスケッチを覚えてゐて、見つけた人があるなら『ロンドン マガチン』の編輯者宛に送つてもらひたいと思ひます。代價は編輯者の方で拂ひます。

著者の小傳

トマス・デ・クインシー(Thomas de Quincey)は一七八五年、八月十五日、マンチェスタア(か或は其附近)で生まれた。彼はトマスとエリザベス・デ・クインシーの間に出來た五番目の子供で、次男になつてゐた。父はかなりな商人で、彼の息子のトマスが幼少の折、郊外に別莊を建てて程の自分であつた。此グリーンヘイと云ふ處で未來の論文家がその少年時代を過した。そして彼の華々しい少年期の記憶がそれに結び付けられてゐる。彼は弱々しい子供ではあつたが、かなり生を樂しんだやうに思はれる。それは彼の *Autobiographic sketches* (自傳的スケッチ)を讀むと判かる。これはデ・クインシーの生涯を理解するに缺くべからざるものである。彼の奇妙な、ムラ氣な生活が平凡な少年時代にも既に現れてゐたのだ。

デ・クインシーは豊かな商人の息子に通例な生活をして、兄弟のウキリアムと一緒に近傍の學校に通つてみた。しかし彼の父の派手な生涯も一七九三年の彼の死と共に終りを告げた。母はグリーンヘイにも倦きたのでバスに移つた。それで、トマスもバスの古典學校にやられるやうになつた。その時の校長はモルガン氏で、『告白』中に所謂『圓熟した立派な學者』だつた。此學校で彼はウエストポート侯と知己になつた。その人は『告白』中に重要な役割を演じてゐるのである。この學校時代彼は極めて幸福で、彼の奇妙に早熟な能

力が遺憾なく發揮されたい。二年許り経つと母はその學校を下げて、暫時、家で家庭教師を付けて勉強させて置いた。一七九九年、彼はウエルトシヤアのウインクフキールド校にやられた。その校長はスペンサー氏で「告白」中に「愚物」として描かれてゐる人物である。彼は此處に一年許りゐた。その時彼は若いウエストポート侯をアイルランドに訪問した。歸つてから、彼の意志に反して、マンチエスタア古典學校にやられた。其處の校長(度々校長ばかり御引合に出るが)はローソン氏で「健全で、シツカリした學者だが、粗野で、チヂムサク、武骨な」人間として描かれてゐる。彼はどこの學校でも拔群の成績を現はしたけれども、場所が全く敏感な子供の性分に合はなかつたと見える。彼は又その學校をやめて、大學に行きたくなつたので後見人等に頼んでみたが許されなかつた。彼は一八〇二年、七月頃迄其處にゐた。それから自分で計畫をめぐらして、出奔したのであつた。この事は先刻讀者が承知の筈である。

デ・クインシイの艱難辛苦の目が慄々始まつた。彼はマンチエスタア校を逃げ出してからチエスタアのプライオリイに在る實家に行つた。これより少し前母が其處に移つてゐたのであつた。恰も叔父のペンソンが印度から歸つて來てゐた。そして叔父の意向で、母の嚴酷な性情から期待することが出來たより以上に穩かな解決が出來た。彼の叔父は少年の出奔を全然否定してはゐないやうに思はれた。そしてデ・クインシイはウエルシュの山の中を漂流してゐる間、生活費として一週間一磅丈送つてもらつてゐた。彼は一八〇二年の

七月から十一月までウエルスをさまよひ歩いて、初めは友達と手紙のやりとりなどをしてゐた。しかし、やがて、彼はまつたく友人との文通を絶つと同時に、家からの送金も拒絶してしまつた。その金は友人に始終彼の居所を知らせると云ふ條件の下に、受け取つてゐたのであつた。彼の放浪が一八〇二年の十一月にウエルスで始まつた。それから、突如として彼はロンドンに現はれた。ロンドンに行くまでのことは後から出た「告白」中に詳しく物語られてゐる。要するに無理な奇抜な方法で、どうにか其處まで漕ぎつけたのであつた。彼の浮浪生活の本舞臺であるロンドン生活が初まつた。彼はこの挿話を彼の生涯の "impassioned parenthesis" だと云つてゐる。

どうにかして、彼の友達に歸る道が開かれたので、一八〇三年の秋に、彼はオックスフォードのウオセスタアカレッジの學生となることが出來た。此處に彼は四年間在學した。在學中、彼は殆んど何等の注目にも値しなかつた。しかし、彼は手當次第の讀書に耽けた。勿論主として英文學に關するものであつた。彼はこの當時、屢々ロンドンに出かけた。阿片の飲み方を初めて覺えたのもこの時代であつた。卒業間際になつて、彼は突然大學をやめて、その原因は彼の非常な内氣が口頭試験を恐れたにあるらしい。勿論筆記試験では立派な成績を得てゐたのである。

翌年、乃ち一八〇八年に我々は表面上法律を研究してゐる彼を發見する。しかしその實、彼の從來の讀書

の範圍を一層廣くして、文學、科學、哲學、經濟と云ふ風にあらゆる方面の智識を涉獵し、傍ら當時有名な文學者との交際を初めてみた。中でも、彼はコルリッチを非常に信頼して、彼の知己になると間もなく、コルリッチの出版業者コットルを通じて、彼に三百磅の金を送つた。當時チャールス・ラムとの親交が始まつてゐた。それは其後次第に親密の度を増して行つた。コルリッチの紹介で彼は又ウワーズワースに遇つた。尤も彼とは大學入學當時から通信はしてゐたものであつた。

一八〇九年、この邂逅の結果として、デ・クインシーは、ウワーズワースに近く住む爲め、グラスミヤアに行くことになつた。此處で彼は一八一六年まで彼の獨身生活を續けた。其年に彼はウエストモアランドの「經世家」實は、地付の百姓の娘、マアガレット・シンブソンと結婚した。彼は一八二一年迄、グラスミヤアに滞在して、彼の驚くべき多讀に従事し、傍ら *Westmorland Gazette*, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, *Quarterly Review* などに寄稿してゐた。そして「ウエストモアランドガゼット」を一年許り編輯したことなどもあつた。彼はこの間原稿料でかなりな収入を得てゐたにも拘らず、彼の無鐵砲な癖がことごとくこれを消費し、遂にはかなり莫大な父の遺産をも盡してしまつた。そしてソロ／＼貧乏の苦痛を感じ始めた。それで一八二〇年に、彼は「文學的機會」を求め、ロンドンに出かけた。そして幸ひにも、其當時最も有力だつた「倫敦雜誌」の發行者のテイラー、ヘッセイの二氏に紹介を求めることが出来た。この紹介の結

果として、一八二一年の九月と十月に「*The Confessions of an English Opium Eater; Being an Extract from the Life of a Scholar*」(「英國阿片喫者の告白、即ち一學者の傳記よりの拔萃」といふ無名の論文が現はれた。異常な興味が喚起された。デ・クインシーの位置が確立された。そしてこの時から、彼の精力は著しく盛んになつて、諸雜誌の寄稿となつて現はれた。

彼はやがてグラスミヤアの彼の妻と家族とに歸つて行つた。そして一八二八年迄、其處で暮した。その年に彼は湖水地方で求められるよりも遙かに廣い文學の領域を求め、爲めエチンバラに行つた。エチンバラは一八一四年から一五年の冬にかけて彼が其處を訪問したこの方、北方の都會の多くの文星と共に彼にはよく知られてゐた都であつた。エチンバラの文學者の知己を頼つて、彼はなにか割のいい仕事にありつき、彼の次第に困難に落入つて行く經濟狀態を回復しようと思ふ希望を抱いて出かけて行つたのであつた。彼は失望はしなかつた。行くと殆んど同時に彼は「ブラックウッド・マガジン」や「テイツ・マガジン」に書き初めた。二年程たつて、彼は自分の位置が略々明らかになつたので、一八三〇年に、夫人と子供等をエチンバラに呼びよせた。かれ等はその市のアチラコチらに住んだ。決して一ツ所に永くゐるやうなことはなかつた。一八三七年に、夫人が死んだとして四〇年には彼と子供達とがエチンバラの近くのラスウェードに居を定めた。其處で彼は晩年を送つた。勿論彼丈はたいい市の下宿でその時間の大半を費やした。

一八五一年から——五九年にかけて、彼の時間は、これ迄、諸方の雑誌に寄稿した文章を蒐集する爲めに大方使用された。彼の亞米利加に於ける人氣は非常なもので、一八五一年には、フキールズ氏が全集出版の計畫を初めた位であつた。一八五三年に、デ・クインシーが當時定まつて寄稿してゐた“Hogg's Instructor”の發行者のホグ氏が亞米利加の出版業者からヒントを得て同一の計畫をデ・クインシーに促した。第一巻が一八五三年に現れて、最後の巻は一八六〇年、即ち彼の死後に出たのであつた。一八五九年、十二月の八日に彼はこの世を去つてゐたのである。

註

佛蘭西文學。ルソオの『懺悔録』の暗示。

獨逸文學。ゲーテの『若きウェルテルの悲哀』等の暗示。

今迄の入達の記録云々と、自分は云ふが、現在一人の著名な人間（コルリッチ）があるのである。若し彼に就いて云はれてゐることが眞實であるとすれば、彼は量に於て遙かに私に抜んでゐる。」
デ・クインシー。

キリアム・キルバアフォース W. Wilberforce (1759—1833) 有名な博愛家で兼ねて奴隷賣買廢止論者。

故のカアライルの校長。 Dr. Isaac Milner (1750—1820) キルバアフォースの親友。ケンブリッジ、クインスカレッヂの學長から、カアライルの監督になつた人。

アースカイン侯。Thomas Erskine (1750—1823) 著名な法律家兼雄辯家。

コルリッチ。Samuel Taylor Coleridge (1772—1834) 詩人兼批評家。"Ancient Mariner" 及び

"Kubla Khan" 等によつて最もよく知らる。後者は『告白』中の幻影に極めて類似した詩篇。

『前に決して喰へなかつた人達が……』二三世紀頃の羅典詩(作者不明)をモチッタのである。原詩の意味は『嘗て愛さざりし人々をして今愛せしめよ、常に愛し來りし人々を今更に愛さしめよ。』と云ふのである。餘計なことも知れないが原詩の音調が一寸面白いから、物好きな讀者の爲めに引用して置く。"Cras amet qui nunquam amavit, quique amavit cras amet" シンド。Richard Mead (1673—1754) チェーチ二世の侍醫。

牡牛に關して語る。『犁を把り、刺棍イカリを誇り、牛を追ひ、牛の使役にのみ耽けり、常に牛のことのみを口にする人は如何にして智慧を得んや——Ecclesiasticus XXXIII. 25 Humani nihil……。テレンティウス (Ter nee B. C. 195—159) の劇曲『自己呵責者』ケルンテリウス中の有名な句の借アタキヤ用。

デヴィッド リカアド。David Ricardo (1772—1823) 彼の最も重要な著作は The Principles of Political Economy and Taxation

女神グレーセス。美を司とる三柱の希臘女神。彼女等の名は Euphrosyne (歡喜) Thalia (青春)、Agla (光彩) である。女神グレーセスに犠牲を捧げるといふことは詩を作ること。

ソフォクレス。Sophocles (B. C. 495—405) 希臘の悲劇作者。

Archidisculus 「校長」と云ふ希臘語を諸語的に用ゐたもの。

七人の睡眠者。エフェソスの七人の若い基督教徒。第三世紀頃、時の皇帝デシウスの迫害を受けて山の中の洞窟に逃れて、そのまま二百年間、眠つてゐた。眼を醒して、市まちに歸ると世の中が一變してゐた。皇帝は最早、昔の殘酷な皇帝ではなかつた。それから面謁してその譯を物語り、未來の世界を證明して、再び永久の睡眠に落ちたと云ふ。

愛讀の英國詩人。勿論ウワーズワースの詩集。

エウリビデース。Euripides (B. C. 480—406) サラミスに生る。三大希臘劇作家(アイスキュロス、ソフォクレス、エウリビデース)の一人。彼の劇曲はデ・クインシイの愛讀書だつたと見える。

身上の理由。デ・クインシイは全體山が好きだつたが、彼がこの時分、湖畔地方に著しく牽引された理由は云ふまでもなく、詩人ウワーズワースに對する憧憬であつた。

サブフォ風やアルカイオス風。Sappho Alcaeus は二人とも紀元前七世紀の終り頃に希臘のレスボス島に住んでゐた詩人である。かれ等の詩は當時、アイオリア派の希臘抒情詩を代表してゐたのである。サブフォは有名な女詩人。

クロムウエルの方法。クロムウエルは、二晩と續けて同じ部屋にはメツタに寝たことがなかつたさ

うだ。

青髭部屋。ブルウピヤアドが自分の殺した澤山の妻の死骸を入れて置いた部屋。そしてその部屋を開けることをどの妻にも禁じて置いた。フハミリアーナ話である。

パンなしに云々。“Sine Genere et Libero friget Venus”——Terence, *Eunuchus* (パンと酒なければ戀も冷かなり)

ソークラテース風。ソークラテースが大道で誰れでもかまはずつかまへて、個人教授をした話は有名なものである。

トマス クインシイ。その姓に“De”を付け加へたのは著者の母であると云はれてゐる。

羅馬詩人によつて……。“Cantabit vacuus coram latrone Victor”——Juvenal, *Satire*. (空囊の旅人は盜賊の面前で歌ふであらう)

モンターグ。M. W. Montague 女は十八世紀に於ける最も巧妙なレタパライタアであつた。

オトウェイの話。Thomas Otway (1625—1685) 劇作家。『The Orphan』、『Venice Preserved』など云ふ作がある。その話と云ふのはかうだ。或日、オトウェイが木賃宿から出て来て、喫茶店ウチヤにある或紳士に『私は詩人のオトウェイです』と云ひながら、金をねだつた。この人は驚きもし、氣の毒にも思つて、彼に一ギニイを興へた。彼はそれで早速パンを買つて飢ゑてゐたものだから夢中にそれを頬張つた。しかし、永い間、なにも食はなかつたので、呑み込むことが出来ず、一口目に咽喉へつかへて死んでしまつた。

マクダレン。Magdalen 新約聖書、路加傳二章、三六節 五〇節參照

北に行く道。ウワーズワースがその當時グラスミヤアに住んでゐた。デ・クインシイは嘗て詩人を訪ねようと思つてウエストモアランドに行つたことがあつた。しかし、彼の過度な内氣と崇拜とが戸口まで行つて彼を引き返させてしまつた。

その同じ家。一八二一年にデ・クインシイは嘗てウワーズワースが往んでゐた Dove Cottage に住んでゐた。

オレステース。Orestes (人名)。エウリピデトスの戯曲である。此處ではその戯曲の巻頭の光景を借りて、彼自身の状態を叙してゐるのである。オレステースが良心の苦痛と云ふ悪鬼につかれて、苦しんでゐる。それを彼のやさしい姉(エーレクトラ)が頻りに弟の看護に盡してゐるのである。

エウメニデス。Eumenides オレステースを懐ます復讐女神エウメニデス。希臘人等はその神々を恐れてかれ等の本名を呼ばず、エウメニデスと云ふ婉曲辭オクシマを用ゐてゐたのである。エウメニデスは希臘語で「善心」と云ふ意。

立派な神廟スライトイオンと云つても、其處は神々が祭つてあるのではなく、音樂會場や、劇場やバザアなどに使用されてゐた一種の建物。

I. Allegro...。「ラレグロ」と「イルベンセロソ」は有名なミルトンの相對詩である。前者は快

活な情調を、後者は憂愁な情調を歌つてゐるのである。

アテナイオス。Athenaeus 二世紀から三世紀にかけて住んでゐた希臘學者。彼は「學者の晩餐」と云ふ十五卷程の著述をした。

クラシニ。Josephina Grassini (1773—1850) 一八〇三年から一八〇六年にかけて、倫敦で評判をとつた伊太利の最低女聲唱歌者。

Twelfth Night その中の美しいエキストラバガンザと云ふのは譯してはまるで駄目になるので特志の讀者の爲めに原詩を擧げて置く。

“If music be the food of love, play on;
Give me excess of it, that, surfeiting,
The appetite may sicken, and so die,
That strain again! It had a dying fall!”

O, it came o'er my ear like the sweet sound,
That greathes upon a bank of violets,
Stealing and giving odour”

Religio Medici の一節。『誰れでも調子よく身體を組織されてゐる者は諧調を喜ぶものである。私はすべての寺院音楽を排斥する人達の頭の均整を疑ふものである。自分としては、私の従順からばかりでなく、私の特別なジニアスがそれを抱擁する。時に或人を愉快にし、時に他の人を狂せしめるあの卑俗な酒場音楽さへ、私に深い敬虔の發作を起し、最初の作曲家(the First Composer)に就て深く冥想せしめるのである。その中には人間の耳が発見する以上に神性がこもつてゐる。それは全世界と神の被造者に對する神聖な臍ろの教訓である。全世界を理解せるが如き耳に對しては、かくの如き旋律はその理解を授けるであらう。要するに、それは神の多くの耳に智的に響くその諧調の感動的の歌である。』Sir Thomas Browne (1605—1682) は一六四二年 Religio Medici を出版した。

マリヌス・プロクルス。Marinus は Proclus の弟子で又その傳記家でもあつた。プロクルスは四一二年にビザンティウムで生れた。彼はプラトーン派の錚々たる學者であつたが、基督教の侵略するに及んで、プラトーン哲學に反對する方に彼の力を傾注した。

トロフォニオスの洞窟。Trophonius は有名な希臘の神殿であつた。トロフォニオスの神託を受ける爲めにその洞窟に這入つた人間は必ず意氣消沈した憂愁の人として出て來た。

ペーメニズム。獨逸の神秘家 Jakob Boehme (1575—1624) に由來す。

靜寂教。Quietism 外界の活動を斷つて神秘的瞑想に耽けると靈魂が完全な靈的高揚に到達すると云ふ教義。

フェイテラス。Phidias (B. C. 490—432) 最も偉大な希臘彫刻家。彼の偉大な作は雅典のバルテノン (アテーナ神殿) 及びゼウス神像。

フラクシテレース。Praxiteles これも希臘の彫刻家。

ヘカトンピロス。Hekatompylos 百の門と云ふ意で、埃及のテーバイを差す形容詞。そしてヘブタピロス (Heptapylos 七ツの門の意) と呼ばれた希臘のテーバイと區別する爲めにさう云はれたのである。

ボトレイアン。オックスフォードに在る有名な圖書館。Sir Thomas Bodley の建設にかかる。

X. Y. Z. デクインシイのペンネーム。

アナスタシウス。Anastasius; or, Memoirs of a Greek, written at the close of the Eighteenth Century (一名、十八世紀の終りに書かれた一希臘人の備忘録) と云ふ書物である。内容は主として土耳其古の歴史や文明に關するもので、それに著者が豊富な想像力を加へて書いたものであると云ふ。著者の名は Thomas Hope.

アデルンク……。Johann Christoph Adelung (1732—1806) 獨逸の言語學者でドレスデンの圖書館長。書名 *Mithridates oder allgemeines Sprachkunde*.

トマス尊者の日。十二月二十一日。

ジョナス ハンウェイ。Jonas Hanway (1712—1786) 旅行家、博愛家、著作家。初めて蝙蝠傘なるものをさして倫敦街上を歩いたと云はれる人。茶の激烈な反對家。

アウロラ、ヘーベール。Aurora 曙の女神、Hebe 永久青春の女神。

十の數目。アリストテレスのカテゴリイ。即ち、物體、量、質、關係、場所、時、姿勢、習慣(或は服裝)動作、感情。

ジョンケンプル。ケンプルもシフドンス夫人も當時シエクスピヤア物を演じた有名な俳優。

キルケーの蟲惑。Circe はエア島に住んでゐた魔女で、四人のニンフアイに侍かれてゐた。彼女の住家に近づいたものは御馳走をされて、その後で獸に變化せしめられた。

オイテイプス……メンフィス。(Edipus テーバイの王、Pharo—古代の最も有名な大都市。フェニキアの首府。Memphis 埃及の大都市、テーバイの没落後、その首府となる。

リウイウス。Titus Livius (B. C. 59—A. D. 17) 百四十二卷の羅馬史を著した。

パウルス或はマリウス。Lucius, Paulus マケドニアの征服者。彼が羅馬に凱旋して歸つて來たところは羅馬史中に精彩を發つてゐる。Gaius Marius—羅馬執政官。

アララグモス。alalagnos—羅馬兵士の喊聲。元、希臘語。

ピラネズイ。G. B. Piranesi (1720—1778) 伊太利の建築家兼彫金家。

偉大なる近代詩人の一節。ウワーズワースの *The Excursion* 第二篇より引照、大意だけでも譯した
いのだが、譯者は遂にそれ程大膽にはなり得なかつた。

ドゥライテン。John Dryden (1613—1700) 有名な十八世紀の諷刺家で戯曲家で叙事詩人。

フセリ。Henry Fuseli (1741—1825) 瑞西の歴史畫家。英國に住んでゐた。

ブラマ……シブ。印度の神々。Brama は創造力を、Vishnu は保存力を、Siva は壞力をそれごとく
體現してゐた。

イシスとオシリス。埃及の宗教で Isis 神は Osiris 神の妻である。オシリスは太陽やナイル河の活
力の具體化されたもの。

復活の初物。新約聖書哥林多前書十五章、二十節參照。

戴冠式歌曲。Coronatic Anthem G. F. Handel (1685—1759) の作曲。

血族相姦の母。サタンの娘なる彼女は、サタンと通じて「死」を生み、「死」と通じて又 *yellowing*
monsters (號叫する怪物) を生んだ。(ミルトン「失樂園」二篇、六四八節—八一四節參照)

ビューモントとフレッチャア。Beaumont (1584—1616) and Fletcher (579—1639) かれ等は
始終兩人で戯曲を書いた。

昔話。The Sleeping Beauty in the wood.

infandum renouare。"Infandum, vegin, jubet renouare dolorem." Virgil, *Aeneid* (おゝ女皇よ、卿
は言ひ知れぬ 悲哀を呼び醒せと私に命ずるのか！)

ゴルゴタ。Golgothas 新約聖書、馬太傳、二十五章、三十三節參照。

羅馬の皇太子。Caligula (A. D. 14—41)

スエトニウス。Gaius Suetonius Tranquillus 羅馬の歴史家で學者。羅馬皇帝（最初の十二人）の傳を書いた。

ポンブルーム。温泉場で鑛泉を飲ませる部屋。

蛇 足

“My way of writing is rather to think aloud, and follow my own humours, than much to consider who is listening to me” — De Quincey

○
この翻譯に關することをゴツチャに色々書いて見たいと思ふ。全體、こんなものは讀者に見せる性質のものではないかもしれない。しかし、それをやらないと、一寸胸がすかないと云ふわるい癖が讀者にある。わかりやすく云ふと樂屋落で、手品なら種明かしと云ふところかも知れない。種がわかつて、案外手品がつまらなくなつたりして相憎をつかさたりしては困るが—まあ、そんなことはどうでも、蛇足だと思つて讀んで置いてもらへばそれでいい。

○
この翻譯をU君から頼まれたのは、なんでも去年（一九一五年）の三月頃だと思ふ。六月一杯と云ふやうな計畫で初めたのであつた自分がこれを引き受けた時は、云ふまでもなく安受合で初めから、荷がかち過ぎてるると云ふ豫感があつたが、結局、それが自分の骨折甲斐にもなることだし、自分には少しもつたなさ過

ぎる仕事だとは思ひながらも、一方又なんとなく、自分の畑のもののやうな氣持がしたので、かなりの興味を持つて初めたのであつた。勿論名前だけは拾年も昔からきいてゐたが、實の處、通讀はしてゐなかつた。嘗て（七八年も前だつたと思ふ）ペーバア・カバアの安本を買つて二三枚讀み出したことはあつたが、むづかしいので止めてしまつたことを覚えてゐる。それつきり殆んど手にはしなかつた。その頃ラムの論文集なども一寸ヒネクツテみたが、それでもデ・クインシイと同然で、今ではどんなことが書いてあつたものやら、サッパリ忘れてしまつた。しかし、デ・クインシイと云ふといつてもラムのことを必ず連想する。

今頃デ・クインシイでもあるまいと云ふ人もあるかも知れない。それも舊いならグット大時代に希臘へでも廻ればそれは又それで、かへつて新味があるかも知れないが、イヤそれより一段と舊く印度まで行けば猶更申分はないのではあらうが（此時、日本にタゴール流行す）、百年も前の英國文學などを何を苦しんで譯すのだと改つて訊ねられても、僕には一寸返答が出来かねる。これが茶番かなにかだと「……一分で頼まれやした」とかなんと云つて落になるところなのだが……

しかし、諸君、デ・クインシイ必ずしもさう舊いと云つてバカにしたものでもないと思ふ。なぜならそれはツイ近頃、日本で廢つたデカダン文學の親類筋であるからである。若しデカダンと云ふ言葉を少しく廣義に用ひる事を許してもらへば、嘗て最も寛大なる日本のジャアナリズムはカフエエに入りびたり、女を買ひ

にゆく事にすらも適用した！）デ・クインシイは將に一個の立派なデカダン文學者であつた。彼は酒と女との代りに、書物と阿片とに耽溺した。彼自身も勿論、この種の文學を健全だとは考へてゐなかつたものと見えて、先づ冒頭に「……是非、佛蘭西文學か、佛蘭西の不純な缺點に染られた獨逸文學に行かなければなりません」などとケンソクしてゐる。しかし、僕は無理にも彼をデカダンにしたいと云ふ程の道樂氣はない。

○
翻譯をイザ初めると云ふ間際になつて、この書物には版が幾通りかあると云ふことを知つた。それで、なるべく最上なテキストによつてやらなければいけないと氣がついた。初めに、テキストにしようと思つたのは僕が郊外にゐる時分、御近所の先輩N先生から拜借したスコット ライブラリイで、それによつて序文を二三枚許り譯しかけた。それからと云ふものは、本屋の店頭に立つと、どうも、兎角、オビヤム イータアが眼につく。それで、ツイ同じものだとは知りながらも手にとつて見ると、後についてゐる附録が變にちがつてゐたり（大方、版横かなにかの關係でもあらう）なにかするのに氣がついた。するうち或日、偶然丸書（エッセイ）の二階で、例の「萬人叢書」をあさつてゐるうち、オビヤム イータアが又眼に這入つたので、それをとつて見ると、こんどは今迄見たのとはズット分量が多くなつてゐる。變だと思ひながら、序文を見ると、この本こそ後から出た訂正増補の方である。それが、わかつたので、早速、買つて歸つて、やり初めた。處

が實に厄介至極の文章で、これが名文と云ふものだらうかと思はれるので、とても、僕如きは、まだるこくつて翻譯は愚か、讀むことさへ御免蒙りたいやうなものであつた。それに、イヤにひねくれてむづかしい上に、少しも面白くない。僕等に縁の遠いやうな故事來歴のやうなことばかりにこだはつてゐて、事件は少しも發展しない。成程、小説ぢやないのだから、それは我慢するとしても、横道に踏み入り方が、少なからずヒド過ぎる。それで、僕も幾度、途中でやめようかと思つたか知れなかつたけれど、しまひには意地になつてとう／＼三分の一程漕ぎつけたが、どうしても我慢しきれずに降参してしまつた。そして、今更安受合の愚を悔んだが致し方なかつた。しかし、折角、こんな骨折りをして、中止したのでは、愈々益々愚を發揮する許りだとしてやらうと思案投首に多大の日數を經過したが、さて、特別上等の智慧が浮んで來ればこそだ。一寸道樂に落語家の體色を拜借すると、「兎角いたしますうちに、光陰には關守なしとやらで時は用捨なく打過ぎます、俗に新緑の候と申します、青葉若葉の初夏の頃、愈々御約束の六月も近づいてまゐりました。」ところが、U君の方も都合により、延期と云ふことで、ゆつくりでもよろしいと云ふ御内命があつた。しかし僕もオビヤム・イーターにノボセきつて心中する程の餘裕もなかつたので、「風向きをかへて他の仕事に取りかかつた。さうかうするうち、自分はしばらく、田舎に行かなければならないことになつた。それで行く前に兼ねて、一度、行かなければならないと思つてみたY氏の處を暇乞旁々御訪ねした。その折、Y氏

にホンヤクのことを訊ねられたので、實はやりきれないで降参しましたと云ふと、どんなテキストでやつておいてかときかれたので、實はこれ／＼と話すので、Y氏は如何にもと云ふやうな顔付をして、それは無駄骨だからやめた方がよからう、米國あたりの學校でも、決して増補の方は讀みはしない。みんなたいい此テキストを用ゐてゐるのですと云つてマクミランのポケット クラシックスを見せて下すつた。そして、これでおやりになつてはどうです、折角やりかけたのだからと、親切に云つて下すつた。僕もその言葉に又色氣が出て、では兎に角、これを拜借してまゐりますと云つて、その本を拜借して來た。Y氏は、自分が兼ねて尊敬する學者で、英文學にも造詣が深い人だから、まづ、おとなしく、氏の説に従へば間違はあるまいと、歸ると早々、其本の序を讀んで見た。そこで、初めて僕の一を知つて二を知らない人間だと云ふことにおくればせながら氣がついた。其本のテキストは抑も最初に此「告白録」が現はれた。"London Magazine"から一字一句もちがへずに翻刻？したので、著者特有の綴字法や、句讀點までも其儘に保存したと斷つてある。そして何故テキストとして、増補の方を採用しないかと云ふ理由まで長々と述べてある。その理由は要するに文學的價值から云つて、遙かに劣つてゐると云ふので、デ・クインシー彼自身すらそれを承認してゐると云つて、彼の言葉を引照し、後世の批評家等も皆な悉くそれに賛同してゐると云つてゐる。僕の見るところでは、恐らく、阿片の中毒があまりに激しくまわつてゐたセイでもあらう。それに、所々讀み比べて見ると、

増補は主として前半で、後半は極めて僅かしかされてゐない。特に最後の夢の描寫は殆んど何等の増補をも加へられてゐない。それから、篇中最も興味ある淨浪の場面も殆んど全く同じである。思ふに、彼の精力が前半以後續かなかつたものと見える。彼がその改版に満足し得なかつたのも尤もた次第である。

由來、自分の譯した本とさへ云へば、天下の一大傑作であるかの如く吹聴するのが常識になつてゐる。だが、鑑識のある讀者なら、一讀してそんなことはスグとわかる筈だ。だから、僕は少し意地が悪いやうだけれど、この本のアラ探しをして面白がらうと思ふ。しかし、たとへ僕がこの著者とこの書に對して、如何程悪口を叩かうが、依然として、僕の著者に對する愛にかわりがなく、又この書の一愛讀者である事に變りはない。それだけは立派に斷言して置く、さて、僕は最初に非常な期待を持ち過ぎたせいか、譯後に於いて、少なからず、ガツカリした。「己はズイブンかひかぶつてゐた——なんだ、さういたしたくない」これが譯後に於ける僕の偽りのない感である。テキストの編者アーサー ベテイと云ふ人の効能書によると、この書は“book of style”で、實に見事な文章だ、そして、音讀する時に一層、其美しさが發揮されると云ふのだ。又レスライ ステイヴンと云ふ人もデ・クインシイの文章を“Mistral Composition”と云つてゐる處などを見ると、滿更、ウソではないらしいが、外國人の僕には一寸その邊の微妙なコツは解らな

い。が、兎に角、この書の價値はその中に書かれてゐる事柄や表現されてゐる思想などよりも、その文體に存すると云ふのが一般の批評家の結論らしい。それを、僕は又その反對に考へてゐたのが抑もの感運ひであつたらしい。なる程、さう云はれて見ると、如何にも“intellectual”には相違ないが、この書中に現はれた思想と云つても、左程複雑でも、深遠でもない。如何にもデイレックタント フィロソファーが云ひさうなこゝとばかりである。例のベテイ氏が、しかし、この中のある感想を差してホイットマンの使命を豫想してゐると云つてゐるのを讀んだ時は、僕は、思はずフキ出してしまつた。なにも御叮嚀にわざ／＼ホイットマンを擔いでこないでもよささうなものだ。もつたいをつけるにも程があると思つた。一體何處の國でもさうだが自國の文學（ばかりではないが）には兎角、箱をつけ過ぎたがる。一寸浮んで來るだけでも、英國のシエクスピア、佛蘭西のモリエール、日本の紫式部などはいづれも、始終、神棚に祭り上られてゐる形だ。つい餘計なことをしやべつたが、要するにデ・クインシイの「告白録」も評判程のものではないらしい。

しかし、此書の價値を文體許りに歸するの少からず極端だ。否、反つて記録されてゐる事柄それ自分に充分價値があると信ずる。其主たる理由は此記録の眞實と云ふ事である。此書の文證や思想は暫時措いて、ある異常な人間の殘した“Human Document”として見ても、立派に一顧の價値があることは争はれない。

著者も終りに断つてはゐるが、この書物はまったく龍頭蛇尾である。初めに序文を読むと如何にも大仕掛で珠に、この書の書かれた中心の目的である夢の描寫はさぞスバラシイものだらう、と誰でも先づ期待しないでゐられない。ところが、讀者をさん／＼引ッばつて置いて愈々夢の描寫になると、ほんの申し譯ばかりに御茶を濁してゐる。尤も著者の辯解によれば後が出る筈であつたが、どうしても病氣のために續けることが出来なかつたと云ふのだから、仕方もないが、なんだか一杯食はされたと云ふ感じがする。

この本は兎に角「告白録」と云ふのだから、普通の考へから云へば、いくら舊いにしろ、もつと現實味が勝つてゐさうなものである。比較するのも變だが、ルソウの「懺悔録」などを一寸連想してもわかる話である。殊に、自然主義以後の文學を讀んでゐる上に讀めばたしかに現實味の少ないことを感じさせられる。なにしろ「浮浪生活」を描くにしても、それが如何にも上品に學者らしく描かれてゐる。其處が恐らく又その特色なのであらう。だが、古典的だと云ふには少からず近代的の處がある。しかし、要するに、現代人にとつては物足りない心持がするであらう。

○

今、この著者のことを少しく考へて見るに、彼は一生デイレクタントであり、どこまでもアマアチュアの態度を失はなかつた人らしい。この書を讀んでも、彼が如何に無邪氣で、御人よしだかと云ふことが想像さ

れる。人間としての純粹さが如何にもよく現はれてゐる。少年時代に浮浪して、餓死しかけたなぞも、心柄と云つていい位で、全く御坊チャンの邊か乞食である。又初めて崇拜してゐたウワースを遙々訪ねてその戸口から、這入り得ずに後戻りをしたと云ふことなどは、實に美しい逸話で、彼が如何に内氣で純な性質を持つてゐるか云ふことを説明してゐる。

彼は金錢上のことに關しては全く無茶であつたらしい。なぜなしの金をやたらに乞食に呉れてやつたり、友人に興へたりして、始終困つてゐたのなどは、全く "half ludicrous pecuniary distress" と云はれても仕方がなかつた。生前に、彼が、引越しをして歩くのはかなり有名な話だつたが、死んだ時には、少くも、彼の所屬の室が四つあつて、其處には各々書物と原稿紙で、堆高くなつて足の踏み入る餘地さへなかつたと云はれてゐる。しかも、その藏書のアチコチから、紙幣のクシャ／＼になつたのなどが、現はれてきた。金錢に無頓着であつた彼は又、服裝に對しても、かなりかまはなかつたらしい。全く一個の "scholarship" であつた。たとへば、或多の晩、友人の晩餐會に招待された彼が、晩餐のすんだ頃に雪を拂ひながら、席上に現はれる。如何にも「夢見るやうな」つけた一人の學究で、その服裝がふるつてゐる。小供の着るやうなダブ／＼な上衣——それは糸がすり切れて穴さへ明いてゐる——をきて、ネクタイの代りに、變なハンケチを首のまはりに巻きつけてゐる。更に甚だしいのはそのズボンで、リンネルかなにかの生地を、普通の

インキで黒く染めてゐる！しかし、この“Papaverius”は、到る處で、歓迎されて、彼のブリリアントな座談に傾聴する人々もかなり多かつた。

○
彼は自分では「哲學者」だと云つてゐる。この「哲學者」と云ふ言葉には、別段、深い意味もなにもあるのではなく、極めて軽い意味で云つてゐるらしい。若し、彼が大眞面にさうだと信じてゐたとすれば、あまりにお目出度い氣がする。彼が自分を「哲學者」だと云ふ時には、口元にどうやら微笑を浮べてゐるのではないかと、想像される。

彼はなにより先づ一個の“Bibliophile”であつた。彼の讀書は徹頭徹尾道樂であつた。就中哲學者を愛讀したらしい。勿論規則立つた研究などやつた譯ではなかつた。病氣が進んでからは又經濟學にも手を出して見る。又この書の中では怪し氣な醫學上の智識を振り廻してゐる。すべてかう云つた調子である。

○
序文を読むと、彼は、自分の阿片に溺愛した理由は、その原因がまつたく病氣と落魄にあるので、快樂の爲めにとつたのではないとしきりに申し譯をしてゐる。その實、僕の見るところでは、内心一向後悔してゐるやうにも見えない。かの阿片の効能を諄々と説き立ててゐる處を見てもまるで阿片讚美論である。彼がやめた

と云ふのも、畢竟、自分が苦しい結果で、道徳的意味もなにもありはしなかつたのであらう。自分でも「俺は幸福論者だ」とどこかで云つてゐる。快樂の爲めに阿片を飲みたかつたら、いくら飲んでも差支へはなさうなものだと、僕などは考へてゐる。しかし、恐らく、その當時の英國では、そんな辯解でもしなければすまなかつたであらう。だが、彼が、それを何處まで、眞面目にやつたかは、疑問である。見方によれば、面白ツクに云つてゐると思はれる。畢竟この「告白録」も阿片のオノロケ位に思つて讀めばあまり失望はしないであらう。

ユウモアのわかる人なら、この書物から、「上品なわらひ」を享受することが出来るであらう。又人生觀じみたことの好きな人なら“Too Deep for Tears”（嗚呼、なんと云ふ人道主義者で彼はあるよ！）と云ふ言葉から「自分はあまり泣かない」と云ふ人生哲學を學ぶことが出来るであらう。

○
この書は文學上の分類から云つて、當然“Folio-Letter”の中に這入るべき筈のものである。就中、夢の描寫などは原文では立派な散文詩である。それが僕のプロゼイックな譯し方で味もソツケもなくなつてゐるのは甚だ申し譯がない。

自分は原文にあくまで囚はれた譯し方をした。始め出来る丈け、原文の結構を傳へたいために句讀點まで

も、コンマとフルストップ以外にコロソとセミコロソを「V」で現さうと考へたが、それは都合でやめることにした。此處では唯だ如何程、原文に馬鹿くしい程拘泥したかと云ふことを讀者に吞み込んで置いてもらへばいい。

そのままでは意味の通じない場合を除いて、出来るだけ、パラフレーズすることを避けた。純文學を譯す場合にはその濃淡までもハッキリ譯し出さなければ、立派な翻譯とは云へないのださうだが、ニュアンスは置いて、原文の意味を取り違へてゐないと云ふ程度——それもどうか怪しいものだ——で満足すべく、まだ中々其邊までは遺憾ながら手が届き兼ねてゐる。

附録には彼の代表的な散文詩で、デ・クインシイの "Kuhla Khan" と云はれてゐる "the Sepia" か「レバノンの娘」かなにかを附けた方が適當だったかも知れないが、譯者の都合で「ウォーキング・ステュワート」にした。後の阿片溺愛者の手記の中には、まだ、他に、二ツ譯してもいいやうなものもあつたが、初めの豫定より、遙かに紙數が超過したので、やめることにした。

「註」は主として、マクミランのテキストによつた。かなり「蛇足」が長すぎたが、僕は死ぬ迄に、デ・クインシイのことに就いて恐らく、再び書くやうな機會はないであらうと思つたので。計らず駄辯を費した。



阿片溺愛者の告白

昭和四年七月五日 印刷
昭和四年七月拾參日 發行

定價 金五拾錢

著者 辻 潤
發行者 神田 豊 穂
印刷者 白井 赫 太郎
印刷所 東京市神田區錦町三丁目十七番地 精興社
東京市神田區錦町三丁目十七番地

發行所

東京市麹町區
内山下町一ノ一

春秋社

振替東京二四八六一番
電話銀座(57)五五六五三番

春秋文庫

※一ツ五拾錢

續々刊行

- (1) 永井 潛著 科學的生命觀 *
- (2) 出井盛之著 經濟學說史 *
- (3) 久保良英著 晩近の心理學 *
- (4) 澁本誠一著 日本經濟學史 *
- (5) 宮島新三郎著 文藝批評史 *
- (6) 阿部重孝著 教育學 *
- (7) 入澤宗壽著 教育史 *
- (8) 高野辰之著 民謡・童謡論 *
- (9) 住谷悦治著 社會主義經濟思想史 *
- (10) 美濃部達吉著 選舉法概說 *
- (11) 石川千代松著 生物進化論(近刊)
- (12) 深作安文著 倫理學概說 *
- (13) 萩原井泉水著 俳句趣味論 *
- (14) 五來欣造著 政治哲學 *
- (15) 賀川豊彦著 宗教教育の本質 *
- (16) ギツシンガ著 藤野 滋譯 クロフトの手記 *
- (17) デクエンレイ著 辻 潤譯 阿片溺愛者の告白 *
- (18) 内山賢次著 宇宙の謎(上) * (八月刊行)
- (19) 内山賢次著 宇宙の謎(下) * (同)
- (20) 青野季吉著 中産階級論 * (同)
- (21) 田邊尙雄著 東洋音樂論(近刊)